

ガ
リ
バ
ー
旅
行
記

はじめに

さて、今回の有名な『ガリバー旅行記』という作品は、もう誰でも子供の頃には一度は読んだことがあるか、或いは、最近では、実に多彩な「絵本やアニメ或いは動画やその他」などで見聞き読んだりすることも多いかと思えます。しかし、それは、ほとんどの場合、第一部の「小人国（リリパット国）渡航記」という内容のものであり、その後、第二部の「大人国（ブロブディンナグ国）渡航記」や第三部の「飛島（ラピュータ）その他及び日本への渡航記」それに第四部の「馬の国（フウイヌム国）渡航記」と続くものであるが、それらの「内容」についてはあまりよく知らない人が非常に多いのではないかと思う。そこで、今回は、第一部から第四部までの「全ての内容」が誰にもごく簡単に読めるようになっていますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年四月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

ガリバー旅行記

第一部 小人国しょうじんこく（リリパット国）渡航記

第二部 大人国たいじんこく（プロブデインナグ国）渡航記

第三部 飛島とびしま（ラピユータ）その他及び日本への渡航記

第四部 馬の国（フウイヌム国）渡航記

※ 参考文献

ガ
リ
バ
ー
旅
行
記

第一部、小人国しよじんこく（リリパット国）渡航記

ガリバー旅行記

第一部、小人国（リリパット国）渡航記

一、船出と難破

さて、私は、いろいろ不思議な国を旅行して、様々の珍しいことを見て来た者ですが、名前は、「レミユエル・ガリバー」と申します。子供の時から、船に乗って外国へ行ってみたいと思っていましたので、航海術や数学、また、医学などを勉強しましたし、外国語の勉強も、私は大得意でした。

一六九九年の五月、私は『かもしか号』に乗って、イギリスの港から出帆しました。船が東インドに向かう頃から、海が荒れ出し、船員たちは大層弱っていました。そして、それは、十一月五日のことです。酷い霧の中を船は進んでいましたが、その霧のために、大きな岩がすぐ目の前に現われて来るまで気がつかなかったのです。あッという間に、岩に衝突、船は真二つになりました。それでも、六人だけはボートに乗り移ることが出来ました。私たちは、くたくたに疲れていたもので、ボートを漕ぐ力もなくなり、ただ海の上を漂っていました。すると、急に吹いて来た北風がいきなりボートをひっくり返してしまい、それきり仲間の運命はどうなったのか分かりませんでした。

ただ、私は一人夢中で泳ぎ続けました。何度も何度も試しに足を下げてみましたが、とても海底には届きません。嵐はようやく静まって来ましたが、私はもう泳ぐ力もなくなっていました。ところが、やがて、私の足は、今ひとりでに海底に届きました。ふと気がつくと、背が立つのです。この時ほど嬉しかったことはありません。そこから一マイル（約一・六km）ばかり歩いて、私はようやく岸に辿り着くことが出来たのです。

私が陸に上ったのは、かれこれ夜の八時頃でした。あたりには家も人も見当たりません。いや、とにかく、酷く疲れていたもので、私は睡いばかりでした。草の上に横になったかと思うと、たちまち何もかも分からなくなりました。ほんとにこの時ほどよく眠ったことは、生れてから今まで一度もなかったことです。

二、自分の身体が縛られている

さて、ほっと目が覚めると、もう夜明けらしく、空が明るんでいました。さて起きようかな、と思い、身動きしようとする、どうしたことか、身体がさっぱり動きません。気がつく、私の身体は、手も足も細い紐で地面にしっかりとくくり付けてあるのです。髪の毛までくくり付けてありました。これでは、私はただ仰向けになっている他はありません。日はだんだん暑くなり、それが眼にガラガラします。まわりで何かやがやという騒ぎが聞えて来ましたが、しばらくすると、今度は、私の足の上を何か生物がごそごそ這っているようでした。その生物は、私の胸の上を通って顎のところまでやって来ました。

私はそっと下目を使ってそれを眺めると、なんとそれは人間なのです。身長六インチ（約十五cm）もない小人が、弓矢を手にして、私の顎のところ立っているのです。そのあとに続いて、四十人あまりの小人が今ぞろぞろ歩いて来ます。いや、驚いたの驚かなか

ったの、私はいきなり「ワッ！」と大声を立てたものです。

相手も、びつくり仰天、たちまち逃げてしまいました。あとで聞いて分かったのですが、その時、私の脇腹から地面に飛び降りる拍子に、四、五人の怪我人も出たそうです。しかし、彼等はすぐ引返して来ました。一人が何か鋭い声で訳の分からぬことを叫ぶと、他の連中がそれを繰り返します。私はどうも気味が悪いので、逃げようと思ひ、もがいてみました。すると、うまく左手の方の紐が切れたので、ついでにぐいと頭を持ち上げて、髪の毛を縛っている紐も少し弛めました。これでどうやら首が動くようになったので、相手を捕まえてやろうとすると、小人はばたばた逃げ出してしまふのです。

その時、大きな号令とともに、百幾本の矢が私の左手めがけて降り注いで来ました。それはまるで針で刺すようにチクチクしました。そのうちに矢は顔に向つて来るので、私は大急ぎで左手で顔を覆い、うんうん唸りました。逃げようとする度に、矢の攻撃は酷くなり、中には槍で以て、私の脇腹を突きに来るものもありました。私はとうとうじつと堪えていることにしました。そのうち夜になれば、わけなく逃げられるだろうと考えたのです。

三、大將が舞台から指示をする

さて、私が大人しくなると、もう矢は飛んで来なくなりました。が、前とは余程人数が増えたらしく、あたりは一段と騒がしくなるのでした。先ほどから、私の耳から二間（約三・六尺）ぐらい離れたところで、何かしきりに物を打ち込んでいる音がしていましたので、そつと顔をそちら側へねじ向けて見ると、そこには高さ一フィート（約三十センチ）半ばかりの舞台が出来上っていました。これは、小人なら四人ぐらい乗れそうな舞台です。登るために梯子まで二つ三つ掛かっていました。今、その舞台の上で大將らしい男が立つと、大演説をやり出しました。四人のお附きを従えたその大將は、年は四十歳ぐらいで風采も堂々としていました。と言つても、その身長は、私の中指ぐらいでしょうか。声を張り上げ、手を振りまわして、彼はなかなか調子よくしゃべるのでした。

私も左手を高く上げて、うやうやしく答へのしるしをしました。しかし、なにしろ私は、船にいた時に食べたきりであれから何一つ食べていませんので、ひもじさにお腹がグーグー鳴り出しました。もうどうにも我慢が出来ないので、私は口へ指をやつては、何か食べさせてください、という様子をしました。大將は、私の意味がよく分かったと見えて、さつそく、命令して、私の横腹に梯子を五、六本掛けさせました。

すると、百人余りの小人がそれぞれ肉を一杯入れた籠を下げて、その梯子を登り、私の口のところへやつて来るのです。牛肉やら、羊肉やら、豚肉やら、なかなか立派な御馳走でしたが、大きさは、雲雀の翼ほどもありません。一口に二つ三つは、すぐ平げることが出来ます。それにパンも大変小粒なので、一口に三つぐらいいけないのです。あとからあとから運んでくれるのを私がペろりと平げるので、一同はひどく驚いているようでした。また、私は水が欲しくなつたので、その手真似をすると、あんなに食べるのだから、水だつて、ちよつとやさつとでは足りないだろうと、小人たちは一番大きな樽を私の上に吊し上げて、ポンと呑口を開けてくれましたので、私は、一息に飲み干してしまいました。なあに、大樽と言つたつて、コップ一杯分ぐらいの水なのですから、何でもありません。が、その水は、薄い葡萄酒に似て、何ともいい味のものでした。

四、食事後、睡眠中に車台の上へ

彼等は、大喜びで、はしやぎまわり、私の胸の上で踊り出しました。下からは私に向つて、その空樽を投げ下ろしてくれと手真似をするのでした。私が左手で胸の上の樽を下に投げてやると、小人たちは一斉に拍手をしました。それにしても、私の身体の上を勝手に歩きまわっている大胆さ。私の身体は、彼等から見れば山ほどもあるのです。それを平気で歩きまわっているのです。

しばらくすると、皇帝陛下からの勅使が十二人ばかりのお供を連れてやって来ました。私の右足の足首から登って、どんだん顔のあたりまでやって来て、その書状を広げたかと思つと、私の眼の前に突きつけて、何やら読み上げました。それから、頻りに前方を指さしました。この意味は、あとになって分かったのですが、指さしている方向に小人国の都があつたのです。そこへ皇帝陛下が私を連れて来るよう言いつけられたのだそうです。私は、どうかこの紐を解いてくださいと、くくられていない片方の手で、いろいろと手真似をして見せました。すると、勅使は、それはならぬというふうに頭を左右に振りまわした。その代わり、食物や飲物に不自由させぬから安心せよ、と彼は手真似で答えました。

勅使が帰って行くと、大勢の小人たちが私のそばにやって来て、顔と両手に何かひどく香りのいい油のようなものを塗つてくれました。と間もなく、あの矢の痛みはケロリと治りました。私は気分もよくなつたし、お腹も一杯だったので、今度は睡くなりました。そして八時間ばかりも眠り続けました。これもあとで聞いて分かったのですが、私が飲んだあのお酒には眠り薬が混ぜてあつたのです。

最初、私が上陸して草の上に何も知らないで眠っていた時に、小人たちは、私を発見すると、大急ぎで皇帝にお知らせしたのでした。そこでさつそく会議が開かれ、とにかく、私を縛り付けておくこと、食物と飲物を送つてやること、私を運搬するために、大きな機械を一つ用意すること、こんなことが会議で決まつたらしいのです。

で、さつそく、五百人の大工と技師に言いつけて、この国で一番大きな機械を持ち出すことになりました。それは、長さ七フィート(約二・一メートル)で幅四フィート(約一・二メートル)の木の手台で、二十二箇の車輪が付いています。私が眠り薬のお陰でぐっすり何も知らないで眠っている間に、この車が私の身体にびったり横づけにされていきました。だが、眠っている私を担ぎ上げて、この車に乗せるのは大変なことだったらしいのです。

まず第一に、高さ一フィート(約三十センチ)の柱を八十本立て、それから、私の身体をぐるぐる巻きにしている紐の上に丈夫な綱をかけました。そして、この綱を柱に仕掛けてある滑車で、えんやえんやと引き上げます。九百人の男が力を揃えて、とにかく私を車台の上に吊り上げて結び付けてしまいました。すると、千五百頭の馬がその車を引いて、私を都の方へ連れて行きました。もつとも、これは、みんなあとから人に聞いて知つた話なのです。

五、都近くの神社へと到着

車が動き出してから、四時間もした頃のことです。何か故障のために、車はしばらく停

まっていますでしたが、その時、二、三の物好きな男たちが私の寝顔はどんなものかとそれを見るために、わざわざ車によじ登って来ました。

初めは、そつと顔の辺りまで近づいて来たのですが、一人の男が手に持っていた槍の先を、私の鼻の孔にグイと突っ込んだものです。こよりで突かれたようなもので、くすぐったくてたまりません。思わず大きなくしゃみと一緒に、私は目が覚めたのでした。

日が暮れてから、車は休むことになりましたが、私の両側にはそれぞれ五百人の番兵が、弓矢や炬火を掲げて取り囲み、私がちよつとでも身動きしようものなら、すぐ取り押えようとしています。翌朝、日が昇ると、車はまた進み出しました。そして正午頃、車は都の近くにやって来ました。皇帝も大臣もみんな出迎えました。皇帝が私の身体の上に登って見たがるのを、それは危険でございませうと行って、大臣たちは止めていました。

丁度、車が停まったところに、この国で一番大きい神社がありました。ここは前に何か不吉なことがあったので、今では祭壇も取り除かれて、中はすっかり空っぽになっていました。この建物の中にこの私を入れることになったのです。北に向いた門の高さが約四フィート（約一・二メートル）で幅は二フィート（約六十センチ）ぐらい、ここから私は入り込むことが出来ました。私の左足は、錠前で留められて、左側の窓のところに鎖で繋がれていました。

この神社の向い側に見える塔の上から、皇帝は、臣下と一緒にこの私を御見物になりました。何でも、その日、私を見物するために、十万人以上の人が出がったということです。それに、番人が居ても、梯子を伝って、この私の身体に登った連中が一人人ぐらいいはいました。が、これは間もなく禁止され、犯したものは死刑にされることになりました。

もう私が逃げ出せないことが分かったので、職人たちは、私の身体に巻き付いていた紐を切ってくれました。それで、初めて私は立ち上って見たのですが、いや、何とも言えない厭な気持でした。

六、皇帝がやって来る

ところで、私が立ち上って歩き出したのを、初めて見る人々の驚きと言ったら、これまで大変なものでした。足を繋いでいる鎖は、約二ヤード（約一・八メートル）ばかりあったので、半円を描いて往復することが出来ました。立ち上って、私はあたりを見回しましたが、実に面白い景色でした。附近の土地は庭園が続いているようで、垣を巡らした畑は、花壇を並べたようでした。その畑のところどころに森が混ざっています。一番高い木でまぐ七フィート（約二・一メートル）ぐらいです。街は左手に見えていましたが、それはちょうど芝居の町そっくりでした。

先程まで塔の上から私を見物していた皇帝が、今、塔を降りて、こちらに馬を進めて来られました。が、これはもう少しで大事になるところでした。というのは、この馬はよく馴れた馬でしたが、私を見て、山が動き出したようにびっくりしたものですから、たちまち後足で立ち上ったのです。しかし、皇帝は、馬の達人だったので、鞍の上にぐつと落ちておられました。そこへ家来が駆けつけて手綱を押える、これでまず無事に降りることが出来たのです。

皇帝は、私を眺めまわし、頻りに感心されていました。が、私の鎖の届くところへは

近寄りませんでした。それから、料理人たちに食物を運べと言いつけられました。すると、みんなが御馳走を盛った車のような容れものを押して来ては、私の側に置いてくれたので、私は、容れものごと手で掴んで、ペロリと平げてしまいました。肉が二十車、飲物が十車、どれもこれも平げてしまいました。

皇后と若い皇子や皇女たちは、たくさんの女官に付き添われて、少し離れた椅子のところに居りましたが、皇帝の先ほどの馬の騒ぎの時には、みんな席を立て、皇帝のところに集って来ました。ここで皇帝の様子をちよつと述べてみましょう。

七、皇帝の様子とその後

まず、皇帝の身長は、宮廷の誰よりも高かったのです。丁度、私の爪の幅ほど高かったようです。が、これだけでも、なかなか立派に見えます。男らしい顔つきで、きりつとした口許、弓なりの鼻、頬はオリブ色、動作はもの静かで態度に威厳がありました。年は二十八年と九カ月ということです。

頭には、宝石を鑲めた軽い黄金の兜を頂き、頂辺には羽根飾りが付いていましたが、着物は大変質素でした。手には、長さ三インチ（約七・六センチ）ぐらいの剣を握っておられました。その柄と鞘は黄金で作られ、ダイヤモンドが鑲めてありました。

皇帝の声はキイキイ声ですが、よく聞き取れます。女官たちは、みんな綺麗な服を着ています。だから、みんなが並んで立っているところは、まるで金糸銀糸の刺繍の衣を地面に広げたようでした。——皇帝は、何度も私に話しかけましたが、残念ながら、どうもお互に言葉が通じませんでした。二時間ばかりして、皇帝をはじめ、一同は帰って行きませんでした。あとに残された私には、ちゃんと番人が付いて見張りしてくれました。つまり、これは、私を見に押しかけて来る野次馬のいたずらを防ぐためです。

野次馬どもは、勝手に私の近くまで押し寄せて来て、中には私に矢を射ようとするものまでいました。一度など、その矢が私の左の眼に当たるところでした。が、番人は、さっそくその野次馬の中の頭らしい六人の男を捕まえて、私に引き渡してくれました。番人の槍先で、私の近くまでその六人が追い立てられて来ると、私は、一度に六人を手で掴んでやりました。五人は上衣のポケットにねじ込み、後の一人には、そら、これから食つてやるぞ、というような顔付きをして見せました。すると、その男は私の指の中でワーワー泣き喚きました。私が手を口を持って行くと、ほんとに食われるのではないかと、番人も見物人も、みんなハラハラしていたようです。が、間もなく、私はやさしい顔付きに返り、その男をそつと地面に置いて放してやりました。他の五人も、一人ずつポケットから引つ張り出して許してやりました。すると、番人も見物人もほつとして、私のしたことに感謝している様子でした。

夜になると、見物人も帰るので、ようやく私は家の中にもぐり込んで、地べたで寝るのでした。二週間ばかりは、毎晩、地べたで寝たものです。が、そのうちに皇帝が、「……私のためにベッドを拵えてやれ」と言われました。普通の大きさのベッドが六百、車に積んで運ばれ、私の家の中でそれを組み立てました。

八、人間山の扱い方の議論

さて、私の噂は、国じゆうに広まってしまいました。お金持で暇のある物好きな連中が、毎日、雲のように押しかけて来ます。そのために、村々はほとんど空っぽになり、畑の仕事も家の仕事もすっかりお留守になりそうでした。で、皇帝から命令が出ました。見物が済んだ人は、さっさと帰り、無断で私の家の五十ヤード（約四十五呎）以内に近づてはいけない、と、こんなことが決められました。

ところで、皇帝は、何度も会議を開いて、「……一体、これはどうしたらいいのか」と相談されたそうです。聞くところによると、朝廷でも、私の取り扱いは大分困っていたようです。あんな男を自由の身にしてやるのも心配でしたが、なにしろ、私の食事がとても大変なものでしたから、これでは国じゆうが飢饉になるかも知れないと言うのです。いっそのこと、何も食べさせないで餓死させるか、それとも、毒矢で殺してしまう方がよろうと言うものもありました。

だが、あの男に死なれると、山のような死体から発する臭いがたまらない、その悪い臭いは、国じゆうに伝染病を広げることになるだろうと説くものもありました。丁度、この会議の最中に、私があの人野次馬を許してやったことが伝えられました。すると、皇帝も大臣も、私の行ないにすっかり感心してしまいました。そこで、皇帝は、勅命で、私のために村々から毎朝、牛六頭、羊四十頭、そのほかパン、葡萄酒などを供出するように命令されました。

それから、六百人のものが私の御用係にされ、私の家の両側にテントを張って寝泊まりすることになりました。それから私の服を作ってくれるために、三百人の仕立屋が雇われました。それから、宮廷で一番偉い学者が六人、この国の言葉を私に教えてくれることになり、それで、私は三週間ぐらいで小人国の言葉がしゃべれるようになったのです。

皇帝も、時々、私のところへ訪ねて来られました。私は皇帝に跪いて、「……どうか、私を自由な身にしてください」と何度もお願いしました。すると、皇帝は、「……もうしばらく待て」と言われるのでした。「……自由な身にしてもらうには、お前は、まず、この国と皇帝に誓いをしなければいけない。それから、お前ははずれ身体検査をされるが、それも悪く思わないでくれ。多分、お前は何か武器など持っていることだろうが、お前のその大きな身体で使う武器なら、よほど危険なものに違いない」と言うのでした。

私は、皇帝に申し上げました。「……どうかいくらでも調べてください。何ならすぐお目の前で裸になつて御覧にも入れましようし、ポケットを裏返してお目にかけますから」と、これは、半分は言葉、半分は手真似でやって見せました。すると皇帝は、「……では、二人の士官に命じて身体検査をやらせるが、これは臣下の生命をお前の手に委ねるのだから、何分、よろしく頼む。それから、たとえどんな品物を取り上げても、お前がこの国を去る時には、必ず返してやる。でなかつたら、いい値段で買い取つてやってもいい」と言われるのでした。

さて、二人の士官が身体検査にやって来ると、私は二人をつまみ上げて、まず上衣のポケットに入れてやり、それから、順次に他のポケットに案内してやりました。が、どうしても、見せたくないものを入れていたポケットだけは、見せなかつたのです。二人の男は、ペンとインクと紙を持って、見たものをつつ詳しく書き留め、皇帝に御覧入るために目録を作りました。私も後になって、その目録を見せてもらいましたが、それは、ざつ

と次の通りでした。

九、人間山の持ち物検査

まず、「……この大きな人間山の上衣の右ポケットをよく検査したところ、ただ一枚の大きな布を発見しました。大きさは、宮中の大広間の敷物くらいあります。次に、左ポケットからは銀の蓋の付いた大きな箱のようなものが出て来ましたが、二人には持ち上げることが出来ませんでした。私どもはそれを開けさせ、一人が中に入ってみますと、塵のうなものが一杯詰まっていました。その塵が私どもの顔のところまで舞い上った時には、二人とも同時に何度もくしゃみが出ました。

次に、チョッキの右ポケットから出て来たものは、人間三人分ぐらいの白い薄い物が、針金で幾枚も重ねて締めつけてあり、それには、いろんな形が黒く付いていました。これはたぶん書物だろうと思います。一字の大きさは、私どもの手の半分ほどもあります。

次に、チョッキの左ポケットには、一種の機械がありました。宮殿前の柵に似た長い二本ばかりの棒が、その背中から出ているのです。これは人間山が頭の髪をとく道具と思えます。ズボンのポケットからは、長さ人間ほどもある、鉄の筒がありました。これは何に使うのか分かりません。右の内側のポケットからは、一寸じの銀の鎖が下がり、その下の方には一つの不思議な機械が付いていました。私どもは、その鎖に付いているものを引き出して見よ、と言いました。これは半分は銀で、半分は透明なもので出来ています。彼はこの機械を、私どもの耳の傍らへ持って来ました。すると、水車のように絶えず音がしているのです。これは不思議な動物か、小さな神様らしく思えます。人間山の説明では、彼は何をするにも、いちいちこの機械と相談するということです。

次に、彼は左の内ポケットから、漁夫の使うような網を取り出しました。これは財布だそうです。中には重い黄色い金属が幾つか入っていました。これがほんとの金だとすれば、大したものには違いありません。このようにして、私どもは陛下の命令通り、熱心に彼の持ち物を調べてみましたが、最後に、彼の腰のまわりに一つの帯があるのを見つけました。それは何か大きな動物の革で拵えたもので、その左の方からは、人間五人分の長さの剣が下っておりまして。右の方からは、袋が下っておりまして。

私どもは人間山の身体から発見したものを、このように書き留めておきます。人間山は、陛下を尊敬して、礼儀正しく、私どもを待遇してくれました」とある。

十、この目録は、皇帝の前で読み上げられる。

皇帝は、丁寧な言葉で、その目録に書いてある品物を私に出せと言われました。まず短刀を出せと言われたので、私は鞘ごとそれを取り出しました。この時、皇帝は三千の兵士で私を遠くから取り囲み、いざと言えば、弓矢で射るように用意されていたのでした。が、私の目は皇帝の方だけ見ていたので、それには少しも気が付きませんでした。「……その短刀を抜いてみよ」と、皇帝は言われました。刀は潮水で少し錆てはいましたが、まだよく光ります。スラリと抜き放つと、兵士どもは、あッと叫んで、みんな驚き恐れられました。振りかざして見せたら、太陽の反射で刀がピカピカ光り、兵士はみんな目が眩んでしまっ

たのです。が、皇帝はそれほど驚かれませんでした。それをもう一度、鞞さやに収めて、鎖くさりの端から六フィート（約一・八尺）ほどの地上に、なるたけ静かに置けと私に命令されました。

次に皇帝は、鉄の筒を見せよと言われました。鉄の筒というのは、私の「ピストル」のことです。私はそれを取り出して、その使い方を説明しました。そのピストルに火薬を詰めて、「……今から使つて見せますが、どうか驚かないでください」と、皇帝に注意しておいて、ドンと一発、空に向つて撃ちました。今度の驚きは、短刀どころの騒ぎではありませんでした。何百人の人間が打ち殺されたようにひっくり返りました。皇帝はさすがに倒れなかったものの、眼をパチパチされていました。私は、短刀と同じようにこのピストルを引き渡しました。それから、火薬と弾丸の入った革袋も渡しました。そして、「……この火薬は、火花が一つ飛んでも、宮殿も何もかも吹き飛ばしてしまいますから、どうか火に近づけないでください」と注意しておきました。

それから、懐中時計を渡しました。皇帝は、この時計を非常に珍しがり、一番背の高い二人の兵士に、それを棒にかけて担がせました。絶えず時計がチクタク音を立てるのと、時計の長針が動いているのを見て、皇帝は大変驚きました。この国の人たちは、私たちより目が良いので、分針の動いているのまで見分けがつくのです。一体、これは何だろう、と皇帝は学者たちにお尋ねになりましたが、学者たちの答えはまちまちで、とんでもない見当違いもありました。

次に私は銀貨と銅貨を取り出し、それから櫛や嗅ぎタバコ入れ、ハンカチ、旅行案内などを、みんな渡しました。短刀とピストルと革袋は荷車に積んで、皇帝の倉へ運ばれましたが、その他の品物は私に返してくれました。私は身体検査の時に、見せなかつたポケットがありました。その中には眼鏡が一つ、望遠鏡が一つ、そのほか二、三の品物が入っていました。これは失されたり壊されると大変だから、わざわざ見せなくてもよからうと思つたのです。

十一、いろいろな曲芸や余興を見せ合う

私の性質が大人しいということが、みんなに知れ渡り、皇帝も宮廷も軍隊も国民も、みんなが私を信用してくれるようになりました。で、私は近いうちに自由の身にしてもらえるのだらう、と思うようになりました。私は、出来るだけみんなから良く思われるように努めました。人々は、もう私を見ても、だんだん怖がらなくなりました。私は寝転んだままで、手の上で五、六人の人間を踊らせたりしました。時には、子供たちがやって来て、私の髪の毛の間で「かくれんぼ」をして遊ぶこともありました。もう私は彼等の言葉を聞いたり、話したりすることに馴れていました。

ある日、皇帝は、この国の見世物をやつて見せて、私を喜ばしてくれました。それは実際、素晴らしい見世物でした。なかでも面白かつたのは、綱渡りです。これは地面から二フィート十二インチ（約九十センチ）ばかりに、細い白糸を張つて、その上でやります。

この曲芸は、宮廷の高い地位につきたいと望んでいる人たちが、出て演じるのです。選手たちは、子供の時から、この芸を仕込まれるのです。仮に、宮廷の高官が死んで、その椅子が一つ空いたとします。すると、五、六人の候補者が、綱渡りをして皇帝に御覽に

入れます。中で一番高く跳び上って落ちない者が、その空いた椅子に腰かけさせてもらえるのです。時には、大臣たちが、この曲芸をして、こんなに高く跳べますよと、皇帝に御覽に入れることもあります。大蔵大臣のフリムナップなど、実に鮮やかで、高く跳び上ります。私は彼が細い糸の上に皿を置いて、その上でとんぼ返りをするところを見ました。

だが、この曲芸では、時々、死人や怪我人を出すことがあります。私も選手が手足をくじいたのを二、三回見ました。中でも、一番危ないのは、大臣たちの曲芸です。それはお互いに仲間の者に負けまいとして、あんまり緊張してやるので、よく綱から落っこちます。大蔵大臣のフリムナップでさえ、一度なんか、もう少しで頭の骨を折るところでしたが、下に国王のクッションがあつたので、助かったということです。

*

それから、もう一つ、ほかの見世物があります。これは皇帝と皇后それに総理大臣の前だけでやらされる特別の余興なのです。皇帝は、テーブルの上に長さ六インチ(約十五センチ)の細い絹糸を三本置きます。一つは青、一つは赤、もう一つは緑の糸です。皇帝は、特に取り立てて目をかけてやろうとする人たちに、この「賞品」をやるのです。

まず、宮廷の大広間で候補者たちは、皇帝からいろんな試験をされます。皇帝が手に一本の棒を構えていると、候補者たちが一人ずつ進んで来ます。棒の指図に従って、人々は、その上を跳び越えたり、潜ったり、前へ行ったり後へ行ったり、そんなことを何度も繰り返すのです。この芸を一番うまく熱心にやった者に優等賞として、青色の糸が授けられます。二等賞は赤糸で、緑が三等賞です。もらった糸は、みんな腰のまわりに巻いて飾ります。ですから、宮廷の大官は大概この帯をしているのです。

軍隊の馬も皇室の馬も、毎日、私の前を引き回されたので、もう私を怖がらなくなり、平気で私の足許までやって来るようになりました。私が地面に手を差し出すと、乗手が馬を躍らしてヒラリと跳び越えます。大きな馬にうち乗って、私の片足を靴ごと跳び越えるものもあります。これは実に見事なものでした。

*

*

ある日、私は非常に面白い余興をして見せて、皇帝にひどく喜ばれました。まず、私は、皇帝に、長さ二フィート(約六十センチ)・太さ普通の杖ほどの棒を取り寄せて頂きたいと願い出しました。すると、皇帝は、すぐ山林官に命じられたので、翌朝、六人の樵夫が六台の荷車に乗せて、それぞれ頭の馬に引かせてやって来ました。

私は、九本の棒を取って、二フィート(約六十センチ)半の正方形ができるように地面に打ち込みました。それから四本の棒を二本ずつ平行に並べて、地面から二フィート(約六十センチ)ばかりのところで、四隅を結びつけました。そして今度は、ハンカチを九本の棒に縛りつけ、これを太鼓の皮のようにピンと張りました。すると横に渡した四本の棒は、ハンカチより五インチ(約十二センチ)ばかり高くなつたので、これはちようど欄干の代りになりました。これだけ用意が出来たので、私は皇帝に申し上げました。「……騎兵の馬二十四騎をこの野原の上でひとつ走らせてお目にかけます」と言うと、皇帝は、この申し出にすぐに賛成されました。

私は、武装した乗馬兵を馬と一緒に一人一人つまみ上げて、ハンカチの上に置き、それから指揮官たちも、その上に乗せました。整列が終わると、彼等は敵味方に分れ、模擬戦をやり始めました。矢を射かけるやら剣を抜いて追っかけっこするやら、進んだり退

いたり、こんな見事な訓練は、私もまだ見たことがありません。横棒が渡してあるので、馬も人も舞台から落っこちる心配はありませんでした。

皇帝は、これがすっかりお気に召したので、何日も何日もこの余興をやって見せよと仰せになりました。一度などは、御自身でハンカチの上にお上りになって、号令をおかけになりました。とうとう終いには、厭がる皇后を無理にすかして、椅子のまま私に持ち上げさせました。私は訓練の有様がよく見えるように、舞台から二ヤード（約一・八メートル）ばかりのところ、皇后の椅子を持ち上げたのです。

幸いにも、この余興の間、故障は一つも出なかったのです。尤も、ただ一度だけこんなことがありました。ある隊長の乗っていた暴れ馬が足掻きまわって、蹄でハンカチに穴を開け、足を滑らし、乗手もろとも転んだのです。すぐ私は助け起し、片手でその穴を塞ぎ、片手で一人ずつ兵隊を下ろしました。転んだ馬は、左肩の筋を違えました。乗手の方は無事でした。ハンカチの穴はよく繕いましたが、私はもう危ないので、こんな危険な余興はしないことにしました。

十二、帽子の発見と軍隊の大股くぐり

さて、私が自由の身にしてもらえる二、三日前のことでした。宮廷の人たちを集めて、ハンカチの余興をしているところへ、俄に一人の使いが到着しました。

何でも、数人の者が馬でいつか私が捕まった場所を通りかかると、一つの大きな黒いものが落ちていたのを見つけました。非常に奇妙な形のもので、縁が円く広がっています。その広さは、陛下の寝室ぐらいあり、真中のところは、人の背ほど高くなっています。はじめ、みんなは、これは生きものだろうと思つて何度もそのまわりを歩いてみましたが、草の上じつとしたきり動かないのです。そこで、お互に肩を踏台にして、頂上にのぼつてみると、上は平べったくなっています。足で踏んでみると、内側は空っぽだということが分かりました。そこで、みんなは、これはどうも人間山の物らしいと考えました。「…：馬五頭あればそれを運んで参ります」と、使者は皇帝に申し上げました。

私にはすぐ、ははあ、そうか、と分かりました。そして、これはいい知らせを聞いたと喜びました。よく考えてみると、ボートを漕いでいる時に、私は紐で帽子をしつかり頭に結びつけていました。それから、泳いでいる時も、それは絶えず頭に被っていました。ところが、難船後、初めて陸に辿り着いた時には、なにしろ私はひどく疲れていたもので、何かの拍子に紐が切れて落っこちたのも知らなかったのです。帽子は海で失くしたものとばかり思っていました。

私は、皇帝に、それは「帽子」というものだということをよく説明して、どうかさつそくそれを取り寄せてくださいとお願ひしました。すると、翌日、馬車引がそれを届けてくれました。帽子は、かなり酷いことをされていました。縁から一インチ（約二・五センチ）半ばかりのところ、穴を二つ開け、これに鉤が二つ引っかけてあります。その鉤を長い綱で馬車にくくり、こんなふうにして一マイル（約一・六キロ）半以上も引きずって来たのです。ただ、この国は地面が非常に平なので、帽子の傷もそれほどではなかったのです。

それから二日経つと、皇帝は、首府の軍隊に出動を命じて、また途方もない遊びを思い付かれました。私には出来るだけ大股を広げて、巨人像コロツサスのように立っていよ、

と仰せられました。それから今度は、將軍（この人は何度も戦場に出たことのある老將軍で、私の恩人でもあります）に命じて、あの股の下を軍隊に行進させてみよ、と仰せになるのでした。歩兵が二十四列、騎兵が十六列に並び、太鼓を鳴らし、旗を翻し、槍を横たえ、歩兵三千、騎兵一千、見事に私の股の下を行進しました。

陛下は、各兵士に向って、行進中は私によく礼儀を守ること、背けば死刑にすると申し渡されていました。しかし、それでも若い士官などが、私の股の下を通る時は、ちよつと眼を上げて上を見るのは仕方ありません。私のズボンには、もう酷く綻びていたので、下から見上げると、さぞ、びつくりしたことでしょう。

私は何回となく皇帝に書面を送って、「……自由な身にしてください」とお願いしていましたが、ついに皇帝もこの問題を大臣と相談され、議会の意見もお求めになりました。議会では誰も反対する者はなかったのですが、ただ一人、スカイリツシュ・ボルゴラムだけが反対しました。ボルゴラムは、何か私を怨んでいらっしゃるらしく、どうしても絶対反対だ、と言い張りました。しかし、議会は私を自由にすることに決め、ついに皇帝の許可も出ました。

このボルゴラムという男は、この国の海軍提督で、皇帝からも厚く信任されており、海軍のことにかけては、なかなか専門家なのですが、どうも気むずかし屋で、苦虫を潰したような顔をしています。けれども、とうとうこの人もみんなに説き伏せられて、承知しました。それでも、私を自由にするには、私にいろんなことを誓わせなければならぬのですが、その条件は俺が書くのだ、と、あくまで押し通しました。その誓約書を私のところへ持って来たのも、このスカイリツシュ・ボルゴラムでした。二人の次官と数人の名士を連れてやって来ましたが、誓約書を読み上げると、私にいちいちその実行を誓え、と言うのでした。

十三、誓約書

まず、初めに私の国のやり方によって誓い、次に、この国のやり方で誓わされたのが、それは、右の足先を左手で持ち、右手の中指を頭の上に、拇指を右の耳朶に置くのでした。その時の誓約書というのは、次のようなものです。

*

*

この宇宙の歓喜恐怖にもあたる、リリパット国大皇帝、ゴルバストー・モマレン・エブレイム・ガーデイロウ・シェフィン・ムリ・ギュー皇帝、領土は地球の端から端まで五千里を跨ぎ、一度首を振れば草木もなびき、その徳は、春、夏、秋、冬に通じる。ここにこの大皇帝は、この頃、わが神聖なる領土に到着した人間山に対して、次の条項を示し、厳粛に誓わせ、その実行を求めるものである。

第一、人間山は、朕の許可状なしにこの国土を離れることは出来ない。

第二、人間山は、朕が特に許した場合以外は勝手に首都に入ることは出来ない。首都に入る時は、市民は二時間前に家の中に引っ込んで注意されることになっている。

第三、人間山の歩いてもいい場所は、主要国道だけに限られている。牧場や畠地を歩いたり、そこで寝転んだりすることは許されない。

第四、人間山が主要国道を歩く際には、朕の良民、馬、車などを踏みつけないようによく注意すること。また、良民の承知なしに矢鱈に人をつまみ上げて掌に乗せることは出来ない。

第五、急用の使いが要る際には、毎月一回、その伝令と馬を人間山のポケットに入れて運ぶこと。また場合によっては、さらにこれを宮廷に送り返さねばならない。

第六、人間山は、朕の同盟者となり、ブレフスキュ島の敵を攻め、朕の国を狙う敵艦隊を打ち滅ぼすことに努力しなければならぬ。

第七、人間山は、閑の時には、朕の労役者の手助をして、公園その他帝室用建物の外壁に大きな石を運搬するのを手伝わねばならぬ。

第八、人間山は、二カ月以内に、海岸を一周して歩き、その距離を測り、朕の領土の地図を作って出すこと。

第九、これまで述べた条項をよく謹んで守るならば、人間山は、毎日、朕の良民千七百二十四人分の食料と飲料を与えられ、自由に朕の近くに侍ることを許され、その他、いろいろ優遇されるであろう。

ベルファボラック皇宮にて

聖代第九十一月十二日

私は大喜びで満足し、誓いのサインをしました。ただ、この条項の中には、提督ボルゴラムが悪意で押しつけたものもあり、あまり有り難くないものもありましたが、それほどうも仕方のないことでした。

すぐに私の鎖は解かれました。私は全く自由の身になったのです。この儀式には、皇帝もわざわざ出席されました。私は、陛下の足許にひれ伏して感謝しました。すると皇帝は私に、「立て」と仰せになり、それから、いろいろと有り難い言葉を賜りました。国家有用の人物となり、陛下の恩に背かないようにしてもらいたいというお言葉でした。

十四、宮殿見物（自由の身となって）

さて、鎖を解かれたので、私は、この国の首府ミレンドウを見物させていただけではないでしょうか、と皇帝にお願いしました。皇帝は、すぐ承知されました。ただ、住民や家屋を傷つけないよう注意せよ、と言われました。

私が首都を訪問することは、前もって市民に知らされていきました。街を囲んでいる城壁は、高さ二フィート（約六十センチ）半、幅は少くとも十一インチ（約十七センチ）ありますから、その上を馬車で走っても安全です。城壁には十フィート（約三メートル）おきに丈夫な塔が築いてありました。

西の大門を一跨ぎで越えると、私はそろっと横向きになって、静かに歩き出しました。上衣の裾が人家の屋根や軒に当たるといけないので、それは脱いで手に抱えて、チョッキ一つになって歩いて行きました。市民は危険だから外に出ているはいけません、という命令は前から出ていたのですが、それでも、まだ街中をうろろしている人もいます。踏みつぶしてもすると大変ですから、私はとても気を配って歩きました。

屋根の上からも、家々の窓からも、見物人の顔が一杯いました。私もずいぶん旅行はしましたが、こんなに大勢の人が集つているところは見たことがありません。市街は正方形の形になつていて、城壁の四辺は、それぞれ五百フィート（約一五二呎）です。全市を四つに分けていて、十文字の大通りの幅は五フィート（約一・五呎）。私は小路や横町には入れないので、ただ上から見て歩きました。街の人口は、五十万。人家は四階建から六階建まであり、商店や市場には、なかなかいろんな品物がありました。

皇帝の宮殿は、街の中央の二つの大通りが交叉するところにありました。高さ二フィート（約六十呎）の壁で囲まれ、他の建物から二十フィート（約六呎）離れています。私は皇帝のお許しを得て、この壁を跨いで越えました。壁と宮殿との間には、広い場所がありますから、私はそこで、あたりをよく見まわすことが出来ました。外苑は方四十フィート（約十二呎）、その他に二つの内苑があり、一番奥の庭に御座所があるのです。

私はそこへ行って見たくてたまらなかつたのですが、どうもこれは無理でした。何分、広場から広場へ通じる大門というのが、たつた十八インチ（約四五呎）の高さ、幅はわずかに七インチ（約十七呎）です。それに外苑の建物というのは、みな高さ五フィート（約一・五呎）以上で、壁は厚さ四インチ（約十呎）もあり、丈夫な石で出来ていますが、それを私が跨いで行ったら、建物が壊れてしまいそうです。ところが、皇帝の方では、しきりに御殿の美しさを見せてやろうと仰せになるのです。その日は、御殿を見るのは諦めて帰りましたが、ふと、私はいいいことを思い付きました。

十五、二つの踏台を使って市街見物

翌日、私は、市街から百ヤード（約九十一呎）ばかり離れたところの林に行つて、一番高そうな木を五、六本、小刀で切り倒しました。それで高さ三フィート（約九十呎）の踏台を二つ、私が乗つてもグラつかないような丈夫な踏台を作りました。これが出来ると、私はまた市街見物を皇帝に願ひ出しました。すると、市民には、また家の中に引込んでいるようにとお達しが出ました。

そこで、私は二つの踏台を抱えて、市街を通つて行きました。外苑のほとりに来ると、私は一つの踏台の上に立ち上り、もう一つの踏台は手に持ちました。そして、手の方の踏台を屋根越しに高く持ち上げ、第一の内苑と第二の内苑の間にある、幅八フィート（約二・四呎）の空地へ、そつと下ろしたのでした。

こんなふうにして、私は建物を跨いで、一方の踏台からもう一方の踏台へ、乗り移つて行くことが出来ました。乗り捨てた方の踏台は、棒の先につけた鉤で、釣り寄せて、拾い上げるのです。こういうことを繰り返して、私は一番奥の内庭まで来ました。そこで、私は横向きに寝転んで、二、三階の窓に顔を当てて見ました。窓はわざと開け放しにされていましたが、その室内の立派なこと、どの部屋も目が覚めるばかりの美しさでした。

皇后も皇子たちも、従者たちと一緒にそれぞれ部屋に坐つておられます。皇后は、私を御覧になると、やさしく笑顔を向けられ、わざわざ窓から手をお出しになりました。私はその手をうやうやしく頂いてキスをしました。

十六、宮内大臣が訪ねて来る

私が自由な身になってから、二週間ぐらい経った頃のことでした。ある朝、宮内大臣のレルドレザルがひよっこり、一人の従者を連れて、私を訪ねて来ました。乗って来た馬車は、遠くへ待たしておき、彼は、「……一時間ばかりお話がしたいのです」と、私に面会を申し込みました。

私がしきりに皇帝へ嘆願書を出していた頃に、彼にはいろいろ世話になったのです。私はすぐ彼の申込みを承知しました。「……何なら私は横になりましょうか。そうすれば、あなたの口は、この耳許に届いて、お互に話しいいでしょう」と。「……いや、それよりか、あなたの掌の上に乗せてください。その上で私は話をしますから」と言うので、私が彼を掌に乗せてやると、彼は、まず、私が釈放されたことのお祝いを述べました。「……あなたを自由の身にするについては、私も大分骨を折ったのです。だが、それも現在、宮廷にいろいろ混み入った事情があったからこそ、うまく行ったのです」と、彼は宮廷の事情を次のように話してくれました。

十七、国内に激しい党派争い

それは、「……今、わが国の状態は、外国人の眼には隆盛に見えるかも知れませんが、内幕は大変なのです。一つは、国内に激しい党派争いがあり、もう一つは、ある極めて強い外敵から、わが国は狙われていて、この二つの大事件に悩まされているのです。

まず、国内の争いの方から説明しますが、この国では、ここ七十カ月以上というもの、トラメクサン党とスラメクサン党という、この二つの政党があつて、絶えず争っているのです。この党派の名前は、履いている靴の踵の高さから付けられたもので、踵の高いか、低いかによつて区別されています。一般にわが国の昔からのしきたりでは、高い踵の方を良いとされていました。

ところが、それなのに、皇帝陛下は、政府の方針として、低い踵の方ばかりを用いることに決められました。特に陛下の靴などは、宮廷の誰の靴よりも一ドルル（ドルルは一インチの約十四分の一）だけ踵が低いのです。この二つの党派の争いは、大変猛烈なもので、反対党の者とは、一緒に飲食もしなければ話もしません。数ではトラメクサン、すなわち、高党の方が多数なのですが、実際の勢力は、われわれ低党の方が握っているのです。

ただ心配なのは、皇太子がどうも高党の方に傾いておられるらしいのです。その証拠には、皇太子の靴は、一方の踵が他の一方の踵より高く、歩く度に跛を引いておられるのです。

十八、外敵ブレフスキュ国との争い

ところが、こんな党派争いの最中に、われわれはまた、ブレフスキュ島からの敵に狙われ、脅かされているのです。ブレフスキュというのは、丁度、この国と同じぐらいの強国で、国の大きさから言っても、国力から言っても、殆ど似たり寄ったりなのです。

あなたのお話によると、何でもこの世界にはまだいろいろな国があつて、あなたと同じ

ぐらいの大きな人間が住んでいるようですが、わが国の学者は大いに疑っていて、やはり、あなたは月の世界か、星の世界から落ちて来られたものだろうと考えています。それというのも、あなたのような人間が百人もいれば、わが国の果実も家畜もすぐ食い尽くされてしまうではありませんか。それに、この国六千月の歴史を調べてみても、リリパットとブレフスキュの二大国の他に国があるなどは本に書いてありません。

ところで、この二大国のことですが、この三十六カ月間というものの、実にしつこく、実にうるさく、戦争を続けているのです。事の起りというのは、こうなのです。元々、われわれが卵を食べる時には、その大きい方の端を割るのが昔からのしきたりだったのです。ところが、今の皇帝の祖父君が子供の頃、卵を食べようとして、習慣通りの割り方をしたところ、小指に怪我をされました。さあ、大変だということで、時の皇帝は、こんな勅令を出されました。『……卵は小さい方の端を割って食べよ。これに背くものは、厳しく罰す』と、このことは、厳しく国民に命令されました。だが、国民は、この命令をひどく厭がりました。歴史の伝えるところによると、このために、六回も内乱が起り、ある皇帝は、命を落されるし、ある皇帝は、退位されました。

ところが、この内乱というのは、いつでもブレフスキュ島の皇帝が、おだててやらせたのです。だから内乱が鎮まると、いつも謀反人はブレフスキュに逃げて行きました。とにかく、卵の小さい端を割るくらいなら、死んだ方がましだと言って、死刑にされたものが一万一千人からいます。この争いについては、何百冊も書物が出ていますが、大きい端の方がいいと書いた本は、国民に読むことを禁止されています。また、大きい端の方がいいと考える人は、官職につくことも出来ません。

ところで、ブレフスキュ島の皇帝は、こちらから逃げて行った謀反人たちを非常に大切に、よく待遇するし、おまけに、こちらの反対派も、こつそりこれを応援するので、二大国の間に三十六カ月に渡る戦争が始まったのです。その間にわが国は、四十隻の大船と多数の小舟と、それから三万人の海陸兵を失いました。が、敵の損害は、それ以上だろうと言われています。

しかし、今また敵は新しく、大艦隊を整え、こちららに向けて攻め入ろうとしています。それで、皇帝陛下は、あなたの勇氣と力を非常に信頼されているので、このことをあなたと相談してみてくださいと言われ、私を差し向けられたのです」と。

*

*

宮内大臣の話が終わると、私は彼に向かって、「……どうか陛下にそう伝えてください。私はどんな骨折でも厭いません。しかし、私は外国人ですから、政党の争いの中には立ち入りたくありません。が、外敵に対してなら、陛下とこの国を守るために、命がけで戦いましょう」と言いました。

十九、大手柄を挙げる

さて、ブレフスキュ帝国というのは、リリパットの北東にあたる島で、この国とはわずかに八百ヤード（約七三二呎）の海峡で隔っていました。私はまだ一度もその島を見たことはなかったのですが、今度の話聞いてからは、敵の船に見つけられるといけないので、そちら側の海岸へは、出て行かないように努めました。戦争になって以来、両国の人

々は行き来してはいけないことになっており、船が港に出入りすることも皇帝の命令で止められていたので、私のことは、敵側にはまだ知られていないはずです。

私は一つの計略を皇帝に申し上げました。「……なんでも斥候の報告では、敵の全艦隊は、順風を待って出動しようとして、今、港に錨を下ろしているそうですから、これを全部取っ捕まえて御覧に入れましょう」と。

*

*

そこで、私は水夫たちに海峡の深さを聞いてみました。彼等は何度も測って見たことがあるので、よく知っていました。それによると、満潮の時は真中の深さが七十グラムグラム、「これはヨーロッパの尺度で約六フィート（約一・八メートル）にあたります」、その他の場所なら、まず五十グラムグラムだということです。

私はちやうど正面にブレフスキュ島が見える北東海岸に行きました。小山の陰に腹這いになりながら、望遠鏡を取り出して見ると、敵の艦隊は、約五十隻の軍艦と多数の運送船が碇泊しているのです。そこで、私は家に引返すと、リリパットの人民に丈夫な綱と鉄の棒を出来るだけ沢山持つて来るように言い付けました。綱は、まず荷造り糸ぐらいの太さ、鉄棒は凡そ編物針ぐらいの長さでした。だから、これをもつと丈夫にするために、綱は三つを撚り合わせて一つにし、鉄棒も、やはり三本を撚り合わせて一本にし、その端を鉤形に折り曲げ、こうして出来た五十の鉤を、一つ一つ五十本の綱に結びつけました。

それから、また海岸へ引返すと、満潮になる一時間ばかり前から、私は上衣と靴と靴下を脱いで、革チョッキのままジャブ水の中に入って行きました。大急ぎで海の中を歩き、真中の深いところを三十ヤード（約二十七メートル）ばかり泳ぐと、あとは背が立ちました。三十分も経たないうちに、もう私は敵の艦隊の前に現れたのです。

*

*

私の姿にびっくりした敵は、すっかり慌ててわれがちに海に跳び込んで、岸の方へ泳いで行きました。その人数は、三万人を下らなかつたでしょう。そこで、私は綱を取り出すと、軍艦の舳の穴に一つ一つ鉤を引っかけ、全部の綱の端を一つに結び合せました。こうしているうちにも、敵は、何千本という矢を一斉に射かけて来ました。

矢は、私の両手や顔に降り注ぎ、痛いのも痛いのですが、これでは全く仕事の邪魔になつて仕方ありません。一番、心配したのは目をやられることです。今に潰されはすまいかといらいりました。ところが、ふと、私は良いことを思いついたので、やつと助かりました。私にはあの身体検査の時に見せないで、そつとポケットに隠しておいた眼鏡がありました。その眼鏡を取り出すと、しつかり鼻に掛けました。これさえあれば、もう大丈夫、私は敵の矢など気にかけず、平気で仕事を続けました。眼鏡のガラスに当たる矢も大部ありますが、これは、眼鏡をちよつとグラつかせるだけで大したことはありません。どの船にもみんな鉤をかけてしまうと、私は綱の結び目を攪んで、ぐいと引張りました。

ところが、どうしたことか、船は一隻も動きません。見ると、船はみんな錨でしっかりと留めてあるのです。そこで、また、やつかない骨の折れる仕事が始まりました。鉤のかかつたままの綱を一旦手から放し、それから小刀を取り出して、錨の綱をズンズン切つて行きました。この時も、顔や手に二百本以上の矢が飛んで来ました。さて、私は鉤をかけた綱を手に取り上げると、今度はすぐ簡単に動き出しました。こうして、私は敵の軍艦五十隻を引張つて来ました。

* * *
ブレフスキュの人たちは、私が何をしようとしているのか、見当がつかなかったので、初めのうちは、ただ呆れているようでした。私が錨の綱を切るのを見て、船を流してしまふのか、それとも互いに衝突させるのかしら、と思っていました。が、いよいよ全艦隊が私の綱に引つ張られて、うまく動き出したのに気づくと、俄に泣き叫び出しました。彼等の嘆き悲しむ有様と言ったら、まあ、何と言っているのか分からないほどでした。

さて、私は一休みするため立ち停つて、手や顔に一杯刺さっている矢を引き抜きました。前に小人からつけてもらった矢の妙薬を、その疵跡に塗り込みました。それから、眼鏡を外して、潮が退くのをしばらく待ち、やがて荷物を引きながら海峡の真中を渡り、無事に、リリパットの港へ帰り着いたのでした。

* * *
海岸では、皇帝も廷臣も、みんなが私の戻つて来るのを今か今かと待っていました。敵の艦隊が大きな半月形を作つて進んで来るのは、すぐ見えました。私の姿は、胸のところまで水に浸かっていたので、見分けがつかないのです。私が海峡の真中まで来ると、首だけしか水の上には出ていなかった。彼等はしきりに気を揉んでいました。皇帝などは、もう私は溺れて死んだのだろう、そして、あれは敵の艦隊がいま押し寄せて来るところだと思ひ込んでいました。けれども、そんな心配はすぐ無用になりました。歩いて行くうちに、だんだんと海は浅くなり、やがて、人声の聞えるところまで近づいて来たので、私は、艦隊を括り付けている綱の端を高く持ち上げ、「……リリパット皇帝万歳！」と叫びました。

皇帝は、大喜びで私を迎えてくれました。すぐその場でナーダックの位を私にくれました。これは、この国で最高の位なのです。ところが、皇帝は、「……またそのうち、敵の艦隊の残りも全部持つて帰つてほしい」と、言い出されました。

* * *
王様の野心というものは、限りのないもので、陛下は、ブレフスキュ帝国を、リリパットの属国にしてしまい、反対派をみな滅し、人民どもにはすべて卵の小さい方の端を割らせる、そして、自分は全世界のただ一人の王様になろう、というお考えだったので。しかし、私は、「……どうもそれは正しいことではありません。それにきつと失敗します」と、いろいろ説いて、皇帝を諫めました。そして、私は、「……自由で勇敢な国民を奴隷にしてしまうようなやり方なら、私はお手伝い出来ません」と、はっきりお断りしました。そして、この問題が議会に出された時も、政府の中で最も賢い人たちは、私と同じ考えでした。ところが、私がいよいよ明け透けに陛下に申し上げたので、それが皇帝のお気に障つたらしいのです。陛下は、議会で私の考えをそれとなく非難されました。賢い人たちは、ただ黙っていました。けれども、密かに私を妬んでいる人たちは、この時から、私にケチをつけ出しました。そして、私を快く思っていない連中が何か企みを始めたようです。そのため、二カ月と経たないうちに、私はもう少しで殺されるところでした。

二十、敵国からの和睦

さて、私が敵の艦隊を引つ張つて戻つてから、二週間ばかりすると、ブレフスキュ国が

ら和睦を求めて、使いがやって来ました。この講和は、わが皇帝側に非常に都合のよい条約で結ばれました。使節は六人で、それに約五百人の従者が従いました。彼等が都に入つて来る時の有様は、いかにも君主の大切なお使いらしく実に壮観でした。

私も彼等使節のためには、何かと宮中で面倒を見てやりました。条約の調印が終わると、彼等は私のところへも訪ねて来ました。私が彼等に好意を持つていたことは、それとなく彼等も聞いて分かったのでしょう。彼等は、まず、私の勇氣と優しさを褒め、それから、「……われわれの皇帝もかねてから噂であなたのことを聞いています。あなたの力業を一つ実地に見せてもらいたいと言っています。どうかぜひ一度お出かけください」と言うのでした。

私も、すぐ承知しました。しばらくの間、私は使節たちをいろいろともてなしましたが、彼等もすっかり満足し、私に驚いたようです。そこで、私は彼等にこう言っておきました。

「……あなた方がお国へ帰られたら、陛下によりしくお伝えください。陛下の誉れは、世界中に知れ渡っていますから、私もイギリスに帰る前に、ぜひ一度お目にかかりたいと存じます」と。

そんなわけで、私はリリパット皇帝にお目にかかるのと、さっそくこんなお願いをしました。「……そのうち私はブレフスキュ皇帝に会いに行きたいと思つていますが、どうか行かせてくださいませ」と。皇帝は許してくれましたが、ひどく気の乗らない御様子でした。これはどうしたわけなのか、私にはその頃分からなかったのですが、間もなく、ある人から、こんなことを聞かされました。

私が使節たちと仲良くするのを見て、「……あれはああして、今にブレフスキュ国の味方になるつもりです」と、皇帝に告げ口した者がいたのです。大蔵大臣のフリムナップと海軍提督のボルゴラムの二人がそれです。

ここでちよつと断つておきますが、私と使節たちとの面会は通訳付きで行なわれたのです。なにしろ両国の言葉はひどく違つていたのでしたが、リリパットの方でも、ブレフスキュの方でも、自分の国の言葉こそ、一番、古くからあつて、美しく、立派な、力強い言葉だと自慢しているのです。そして、お互に相手の国の言葉は、野蛮だ、と軽蔑し合つていたのです。

しかし、リリパットの皇帝は、敵の艦隊を捕虜にしたのですから、鼻っばしが強かつたわけです。使節団には、書類も談判もみんなリリパット語を使わせました。もつとも、この両国は、絶えずお互に行ったり来たりしているので、両方の国語で話が出来る人も沢山いました。世間を見たり、人情風俗を理解するために、貴族の青年やお金持たちが互に行き来してましたから、貴族でも、商人でも、人夫でも、海岸に住んでいる人々なら、大概両方の言葉を知っているのです。

前に私が釈放してもらう時に、あの誓約書には、いろいろ情ない役目が決められていたものです。ところが、私は今この国の一番高い位のナーダックになったのですから、あんな仕事は私に似合いません。皇帝ももうそんなことは一度もお命じにならなかつたのです。ところが、間もなく、陛下に対して、大変な働きをしなければならぬ事件が起つたのです。

二一、宮殿が火事になる

ある真夜中のこと、私はすぐ門口で数百人の人が大声で何か叫んでいるのを聞きました。はつとして眼を覚めました。私も多少びつくりしました。外では、「……パーラム、パーラム」という言葉が絶えず聞えて来ました。と思うと、群衆を押し分けながら宮廷の人たちが私のところへやって来ました。「……火事です。宮殿が火事です。早く来てください」と言うのでした。

聞けば、皇后の御殿で、一人の女官が本を読みながらうたた寝していると、いつの間にか火がついて、大事になったと言うのです。私はすぐにはね起きました。私の通り路を開ける、という命令は前もって出ていました。月夜で路は明るかったし、私は一人も人を踏み付けないで、宮殿まで来ました。見ると、宮殿の壁には、もういくつも梯子が掛けられ、バケツが運ばれていました。

しかし、何分、水は遠くから運ばれているらしいのです。人々はどんどんバケツを私のところへ持つて来ますが、バケツと言っても、大きさは指袋ぐらいですから、これでは、ちよつとあの火は消せそうもありません。私は上衣さえあれば、すぐ消してしまうのですが、急いだったので、つい着て来るのを忘れたのです。着ているのは革チヨツキだけでした。これでは、もう駄目かなあ、ああ、あの立派な御殿がみすみす焼ける、と私は悲観しかけていました。

ところが、ふとこの時、私には素晴らしい考えが浮んで来ました。その晩、私はグリミグリムという非常に美味しいお酒をたんと飲んでいました。火事騒ぎで動きまわっていると、身体はカツカと火照って、お酒の効き目があらわれて来ました。私は今にもおしっこが出そうになったのです。そこで、私は思いきって火の上におしっこを振りかけて行きました。三分間もしないうちに火事はすっかり消えてしまいました。これでまず綺麗な宮殿は、丸焼けにならないで助かったのです。

火事が消えた時、もう夜は明けていました。私は皇帝に喜びの挨拶も申し上げないで、家に戻りました。私は消防夫として、非常な手柄を立てたのですが、しかし、皇帝が私のやり方をどう思われるか、心配でたまらなかつたのです。この国の法律では、たとえどんな場合でも、宮城の中で立小便をするような者は、死刑にされることになっていました。しかし、私はその後、皇帝から特別に罪を許すよう取りはからってやる、と、お手紙を頂いたので、これで少し安心していました。けれども、それもやはり駄目でした。皇后は私のしたことを大変御立腹になり、「……今にきつと思ひ知らせてやる」と、おそばの者に言われたそうです。そして、元の建物は、もう厭だから、修繕させないことにして、宮中の一番遠い端へと引越されたのでした。

二二、小人国の様々な風俗について

さて、私は、ここでリリパット国の風俗を少し説明しておきたいと思います。この国の住民の身長は、平均して、まず六インチ（約十五センチ）以下ですが、その他の動物の大きさも、これと正比例して出来ています。まず、一番大きい牛や馬でも、せいぜい四インチか五インチ（約十センチ〜十二センチ）ぐらい、羊なら一インチ半（約三・八センチ）ぐらい、鷺鳥なんかほとんど雀ぐらいの大きさです。だんだんこんなふうになくなって行きますが、

一番小さな動物など、私の眼ではほとんど見えません。

ところが、リリパット人の眼には、非常に小さなものでもちゃんと見えるのです。彼等の眼は、細かいものならよく見えませんが、あまり遠いところは見えません。また、雲雀は、普通の蠅はまほどでもない大きさですが、リリパットの料理人は、ちゃんとその毛を筆むしることが出来ます。それから私が感心したのは、若い娘が見えない針に見えない糸を通しているのです。この国で一番高い木は、セフィート(約二・一メートル)ぐらいで、その木は国立公園の中にありますが、私が握り拳こぶしを固めても、すぐにてっぺんに届きます。

ところで、この国では、学問も古くから非常に発達していますが、ただ、文字の書き方が実に風変わりなのです。ヨーロッパ人のように左から右へ書くのではなく、アラビア人のように右から左へ書くのでもなく、中国人のように上から下へ書くのでもなく、かと言って、下から上へ書くのでもありません。リリパット人は、紙の隅すみから隅へ、斜めに字を書いて行くのです。

リリパットでは、人が死ぬと、頭の方を下にして逆さまに土に埋めます。死人は、一万一千月経たつと生き返る、その時、世界はひっくり返っているから、逆さまにしておけば、ちゃんと立てる、と彼等は考えているのです。もともと、そんな馬鹿なことはない、学者たちは笑っています。

この国では、盗みよりも詐欺の方が悪いことになっています。詐欺をすれば死刑です。盗みは、こちらが馬鹿でなく用心さえしていれば、まず物を盗まれるということはありません。ところが、こちらが正直のために、不正直なものに騙されるのは、これはどうも防ぎようがない、だから、詐欺が一番いけないのだ、と、リリパットの人たちは考えているのです。それから忘恩ぼうおんも死刑にされます。恩に仇あだを以て報いるというようなことをする人は、生きる資格がないとされています。

人を官職に選ぶ場合、この国では、才能より徳義の方を重く見ます。政治というものは、誰にも必要なのだから、普通の才能があればいいとされています。けれども、徳義のない人は、いくら才能があっても、危険だから、そんな人に政治は任せられないと言うのです。私はこのリリパット国に九カ月と十三日間滞在していたのですが、ここでひとつ私があるの間どんなふうにして暮したか、それをお話ししてみましよう。

二三、この国でのガリバーの生活ぶり

私は、生まれつき手先は器用でしたが、どうしてもテーブルが一つ欲しかったので、帝室庭園の一番大きな木を何本か切つて、手頃なテーブルと椅子とを拵こしらえました。

それから、二百人の女裁縫師さいほうしが、私のためにシャツとシャツとテーブル掛を作ってくれました。それには出来るだけ丈夫な布を使ってくれたのですが、それでも一番厚いのが紗しゃよりまだ薄いのです。だから、何枚も重ねて縫い合わせねばなりませんでした。

女裁縫師たちは、私を寝転ばしておいて寸法を測りました。一人が私の首のところ立ち、もう一人は、私の足のところに立ち、そして、丈夫な綱ななを両方から二人が持つてピンと張ります。すると、さらにもう一人の裁縫師が、一インチ(約二・五センチ)さしの物差しで、この綱の長さを測って行くのです。私は自分の古シャツを地面に広げて見せてやったので、シャツはピッタリ私の身体に合うのが出来上りました。

私の服を拵えるには、また三百人の洋服屋が付き切りでやってくれました。今度もその寸法の取り方がまた振っていました。私が跪いていると、地面から首のところへ梯子をかけ、一人がこの梯子に登って、私の襟首から地面まで、錘の付いた綱を下ろす、それがちようど上衣の丈になるのです。腕と腰の寸法は、私が自分で測りました。いよいよ出来上つてみると、それは、奇切細工のように妙な服でした。

食事は、私のために三百人の料理人が付いていました。彼等はそれぞれ私の近所に小さな家を建ててもらって、家族諸ともそこで暮していました。そして、一人が二皿ずつ拵えてくれることになっていました。

私は、まず、二十人の給仕人をつまみ上げて、テーブルの上に乗せてやります。すると、下には百人の給仕が控えていて、肉の皿や葡萄酒や樽詰などをそれぞれ肩に担いで待っています。私が欲しいという品を上にいる給仕人がテーブルから綱を下ろして、うまく引き上げてくれるのです。肉の皿は一皿が一口になり、酒一樽が私にはまず一息に飲めます。ここの羊の肉はあまり上等でないが、牛肉はなかなか美味しかったです。三口ぐらいの大ききの肉はめつたにありません。

召使たちは、私が骨もろともポリポリ食べてしまうのを見て、ひどく驚いていました。それから、鷲鳥や七面鳥も大概一口で食べられますが、これはイギリスのよりずっといい味です。小鳥何かは一度に二十羽や三十羽は、ナイフの先で掬上げて食べるのです。

ある日、皇帝は私の食事振りを聞かれて、では自分も皇后、皇子、皇女たちと一緒に、私と会食がしてみたいと望まれました。そこで彼等が来ると、私はみんなテーブルの上の椅子に乗せて、丁度、私と向き合うように坐らせました。そのまわりには、見張りの兵も付いていました。

大蔵大臣のフリムナップも、この席に一緒に来ていましたが、どういうものか、彼は時々、私の方を見ては、苦い顔をします。しかし私は、そんなことは気にしないで、ひとつみんなを驚かしてやれと思つて、思いきり沢山食べてやりました。これはあとで気付いたのですが、大蔵大臣は、かねてから私に反感を持っていたので、この会食のあとで陛下に言つたらしいのです。「……あんなものを陛下が養つておられては、お金が掛かつて大変です。出来るだけ早く、いい折を見て、追放なさつた方が国家の利益でございます」と、こんなことを言つたものと見えます。

二四、弾劾への陰謀

私は、この国を去るようになったのですが、それを述べる前に、まず、二カ月前から、私を狙つていた陰謀のことを語ります。

私がちようどブレフスキュ皇帝を訪ねようと、準備している時のことでした。ある晩、宮廷のある大官がやつて来ました。(この大官が、以前、皇帝の機嫌を損じた時、私は彼のために大いに骨折つてやったことがあるのです)。彼は車でこっそり私の家を訪ねて来たのです。ぜひ、内証でお話ししたいことがあると言うので、従者たちは遠ざけました。私は彼を乗せた車をポケットに入れ、召使に命じて戸口をしつかり閉めさせました。それから、テーブルの上に車を置いて、その側に坐りました。

一通り挨拶を済ませてから、相手の顔を見ると、非常に心配そうな顔色をしているので

した。「……一体、どうしたのです。何か変わったことでもあるのですか」と私は尋ねました。「……いや、なにしろ、あなたの名誉と生命にかかわる問題ですから、これはどうかゆつくり聞いてください」と言つて、彼は、次のように話し出しました。「……まず、お知らせしたいのは、あなたのことで、近頃、秘密の会議が数回開かれましたが、陛下がいよいよ決心されたのは、つい二日前のことです。

御存知の通り、ボルゴラム提督は、あなたがこの国に到着以来、あなたを酷く憎んでいます。どうしてそんなに怨むのかは、私にはよく分からないのですが、あなたがブレフスキュで大手柄を立てられて以来、彼の提督としての人氣が減つたように考え、それからいよいよ憎み出したのでしよう。この人と大蔵大臣のフリムナツプ、それからまだあります、陸軍大将リムトック、侍従長ラルコン、高等法院長バルマツフ、これらの人々が一緒になつて、あなたを罪人にしようとして、弾劾文を書きました」と言うのでした。

ここまで彼の話を聞いてみると、私はむしろくしゃくしゃして来たので、「……何だつて、みんなは私を罪人にしようとするのか、私はそんなに……」と言いかけてました。「……まあ、黙つて聞いていてください」と、彼は私を黙らせました。「……私はいつかあなたの御恩になつたので、こんなことを打ち明けるのですが、もしかすると、そのために私まで罪になるか分かりません。が、それも覚悟でお知らせするのです。ここにその弾劾文の写しを手に入れていきますから、今、それを読み上げて見ましょう。

二五、人間山に対する弾劾文

第一条、カリン・デファー・プリューン陛下の御代に作られた法律によると、宮城の中で立小便をした者は、死刑にされることになつている。それなのに、人間山は皇后の御殿が火事の時、火を消すことを口実にして、不埒千万にも、小水で宮殿の火を消し止めた。

第二条、人間山はブレフスキュ国の艦隊を引張つて持つて帰つたが、その後、陛下は残りの敵も全部捕えて来いと命令された。陛下は、ブレフスキュ国を征服して属国にしてしまふお考えだった。すると人間山は不忠にも、陛下のお考えに反対し、その命令に従わなかつた。罪のない人民の自由や生命は奪えませんが、こんなことを言つたのである。

第三条、ブレフスキュ国から講和の使節がやって来た時に、その使節は敵国の皇帝の使であるを知つていながら、人間山は、まるで叛逆者のようにこれを助けたり慰めたりしたのである。

第四条、人間山は、近頃、ブレフスキュ国へ渡ろうとして航海の準備をしている。陛下は、ただ口先でちよつと許可されただけなのだ。それをいいことにして、彼は敵国の皇帝と会い、敵国を助けようと企んでいる。

この他にもまだあるのですが、主などころを今読み上げてみたのです。

*

*

ところで、あなたの罪状について、この弾劾文をめぐつて何度も議論が行なわれたのですが、陛下は、あなたがこれまで立派な手柄を立てていられるので、まあ、大目にみて罪は軽くしてやれ、と言われるのでした。しかし、大蔵大臣と提督の二人は、夜中にあなたの家に火をつけて、焼き殺してしまつた方がいと酷いことを言うのです。それから、陸軍大將は、その時には毒矢を持った二万の兵を率いて、あなたの手や顔を攻撃すると、こ

んなことを言うのです。それからまた、あなたの味方の宮内大臣レルドレザルも、殺すのは、どうもひど過ぎるから、ただあなたの両方の眼を潰すことにしたらどうでしょうかと、こんなことを陛下に申し上げたのです。すると、これには議員たちがみな反対しました。君は叛逆者の生命を助けようとするのか、と、ボルゴラムは怒鳴り出しました。皇后の御座所の火事を立小便で消すことの出来るような男なら、いつ大水を起して宮城を水浸しにしてしまうかも分からない、それに敵艦隊を引っ張って来たあの力では、一たん何か腹を立てて暴れ出したら大変なことになる、と、ボルゴラムは死刑を説くのです。

大蔵大臣も、あんな男を養つていては、間もなく国が貧乏になってしまうと言つて、死刑を主張しました。しかし、陛下は、どこまでもあなたを死刑にはしたくないお考えでした。両方の眼を潰しただけでは、刑が軽過ぎるというのなら、食物を減して、だんだん瘦せ衰えさせるといいでしょう、身体が半分以上も小さくなって死ねば、死骸から出る臭いだって、そう恐ろしくはないし、骸骨だけは記念物として残しておけます、と、宮内大臣は言いました。そんなわけで、とにかく、みんなの意見はまとまりましたが、この「あなたを餓死さす」計画は、ごくごく秘密にされているのです。

あと三日すると、あなたの味方の大臣がここへ訪ねて来るでしょう。そして、弾劾文を讀んで聞かせ、それから、陛下のお陰であなたの罪は両眼を失くするだけで済むことになった、と告げることになっています。陛下は、あなたが喜んでこの刑に服すだろうと思つておられます。そこで外科医二十名が立会の上で、あなたを地面に寝かせ、あなたの眼球に鋭く尖った矢を、何本も射込む手筈になっています。

私は、ただありのままをあなたにお知らせしたのですが、どうか、そのつもりでいてください。あまり長居をしていると、人から疑われますから、これで失礼いたします」と、そう言つて、大官は帰つて行きました。あとに残された私は、どうしたらいいのかしらと、いろいろ悩みました。とうとう私は逃げ出すことに決心しました。三日が来ないうちに、私は宮内大臣に手紙を送り、明日の朝ブレフスキュ島へ出発するつもりだ、と言つてやりました。もう返事など待つてはいられません。そのまま海岸の方へ歩いて行きました。

二六、ブレフスキュ島へ出発する

そこで大きな軍艦を一隻捕まえて、綱を結びつけて錨を上げると、裸になつて、着物は軍艦に積み込みました。それから、その船を引っ張つて、歩いたり泳いだりしながら、ブレフスキュの港に着きました。向うでは私の来るのを待ちかねていたところです。二人の案内者を付けて、首都まで案内してくれました。私は二人を両手に乗せて、城の近くまで行きましたが、ここで、誰か大臣に知らせて来てくれ、と頼みました。

しばらく待つていると、皇帝御自身が私を出迎えになるといふことでした。私は百ヤード(約九十一呎)ばかり歩いて行きました。皇帝とその従者たちは、馬から降りられませんでした。皇后は馬車から降りられました。みんな、少しも私を怖がっている様子はありません。私は地面に横になつて、陛下の手にキスをしました。それから、いつかの約束通り、リリパット皇帝の許しを得て、今この通りブレフスキュ大帝にお目にかかりに来ました、私の力で出来ることなら何でもいたします、と、私はこう申し上げました。

私がブレフスキュ島へ来てから三日目のことでした。島の北東の岸をぶらぶら歩いて行

つてみると、沖の方にボートのような物のひっくり返っているのが見えました。さっそく、靴を脱いで、二、三百ヤード（約一八二〜二七四メートル）海の中を歩いて行ってみると、その物は潮に乗って、だんだん近づいて来るように見えます。よく見ると、ほんとのボートです。多分、これは嵐にあつて本船から流されたのでしよう。

私はすぐ首府へ引返して、皇帝にお願ひして、二十隻の軍艦と三千人の水兵を借りて来ました。それから私は海に入つて、ボートのところへ泳いで行きました。水兵たちが軍艦から綱の端を投げてくれたので、それをボートの穴に結びつけ、もう一方の端は、軍艦に結びつけました。さらに私は泳ぎながらいろいろ骨を折つて、九隻の軍艦にボートの綱を結びつけました。ちようど風向きもよかつたので、私はボートを押し、水兵は引つ張り、こうして、とうとう海岸に来ました。

それから十日ばかりかかつて、オールを拵えて、それでやつとブレフスキユの港へ、ボートを漕いで入つたわけです。私が港へ着くと、大変な人出で、なにしろ、あんまり大きな船なので、すっかり仰天してしまいました。私は皇帝に向ひ、「……天の祐けで、ボートが手に入りました。これに乗つて行けば、私の故国へ帰れるところまで行けるでしょう。つきましては、出発の許可をいただいて、いろいろ準備することをお許しください」とお願いしました。

皇帝は思い止まつてはどうかと言われましたが、ついに喜んで許してくださいました。さて、リリパット国では、私がブレフスキユ国皇帝のところへ行つたのは、それは、ただ前の約束を果たすために行つたので、二、三日すれば帰つて来るだろう、と思つていました。ところが、何時まで経つても、私が戻らないので、とうとうやきもきして、大臣一同が会議を開きました。その相談の挙げ句、一人の使者がリリパット皇帝の手紙を持って、ブレフスキユ皇帝に会いにやつて来ました。その手紙は、私の手足を縛つて、リリパットへ送り返してくれと言うのでした。

その返事は、こうでした。私を縛つて送り返すことなど、とても出来ないことは、すでにリリパット皇帝も知られる通りだし、それに間もなく、私はブレフスキユ国を去ることになつていたので、御安心ください、と言うのでした。

とにかく、私はなるべく早く早く出発しようと思ひました。宮廷の方でも一日も早く行つてもらいたいののでいろいろ手助けをしてくれます。五百人の職人がかかつて、ボートにつける二枚の帆を拵えました。私の指図に従ひ、一番丈夫な布を十三枚重ねて縫ひ合わせました。私は一番丈夫な太い綱を、十本、二十本、三十本と、一生懸命に縫ひ合わせました。それから海岸を探しまわつて、錨の代りになりそうな大きな石を見つけました。ボートに塗つたり、そのほかいろいろなことに使うため、三百頭の牛の脂をもらいました。何より骨の折れたのは、オールとマストにするため、大きな木を伐り倒すことでした。しかし、これは陛下の船大工が手伝つてくれて、私がただ荒削りすれば、あとは大工が綺麗に仕上げてくださいました。

一月もすると、準備はすっかり出来上りました。私はいよいよ出発の許可の御命令がいただきたい、と陛下に願ひ出しました。陛下は皇族たちと一緒に宮殿から、わざわざ出て来られましたので、私は皇帝の手にキスしようとして、うつ伏せに寝ました。

陛下は快く手を貸して下さい、皇后も、皇子たちも、みな手にキスを許して下さいました。それから、皇帝は、二百スプラグ入りの金袋を五十箇と陛下の肖像画を私に下さいまし

したが、肖像画の方は、傷まないように、すぐ片一方の手袋の中にしまっておきました。私はボートの中に、牛百頭、羊三百頭の肉と、それに相当するパンと飲物を積み込みました。それから四百人のコックの手で整えてくれた肉なども積み込みました。それから、生きた牝牛六頭と牡牛を二頭、それから牝羊六頭と牡羊二頭を、これらは国へ持って帰って、飼ってみようと思いました。船の中で食べさせるために、乾草を一袋と麦を一袋、用意しました。

私は、この国の人間も十人ばかり連れて行きたかったのですが、これはどうしても陛下がお許しになりません。それどころか、私のポケットをすっかり調べられ、たとえ志願する者があっても、人民は決して連れて行かないと誓わされました。

二七、船を出帆させる

そんなふうには、出来る限りの準備を整えて、いよいよ一七〇一年九月二十日の朝六時、私は出帆しました。風は南東だったので、北へ向けて四リーグばかり行くと、丁度午後六時頃、小さな島の影が見えて来ました。ぐんぐん進んで行って、その島のそばで、ボートの錨を下ろしました。ここは誰も住んでいない無人島らしいのです。私は軽い食事を済ませ、ぐつぐつ眠りました。六時間も眠った頃、目が覚め、それから二時間ばかりすると、夜が明けました。日の出前に朝飯を済まし、錨を上げて、風向もよかつたので、羅針盤を頼りに、昨日と同じ進路を続けて行きました。私の考えでは、ヴァン・ディーメンズ・ランドの北東にある群島の、どれか一つに辿り着こうと思っていたのです。だが、その日は、ついに何も見えませんでした。

翌日、午後三時頃、ブレフスキュから二十四リーグばかりも来たかと思える海上で、一隻の帆船を見つけました。船は南西に向って進んでいます。私は大声で呼んでみましたが、返事してくれません。しかし、丁度、風が凩いだったので、私の船はだんだん向うへ近づいて行くのでした。私はありったけの帆を張りました。半時間もすると、向うの船でも気がついて、合図に旗を出し鉄砲を打ちました。

私は、もう一度、故国が見られ、あの懐かしい人たちとも会えるのかと思うと、嬉しさがこみ上げて来ました。船は帆を緩めました。それで私はその船に追いつきました。その時刻は九月二十六日の夕方の五時か六時頃でした。私はイギリスの国旗を見ただけで、胸がワクワクしました。牛と羊を上衣のポケットに入れると、私は食料の小さな荷物を抱えて、向こうの船に乗り移りました。

この船はイギリスの商船で、北海、南海を通って、日本から帰る途中でした。船長のジョン・ビデルは、デットフォッド生まれで大変親切な男でした。乗組員は五十人ばかりいました。その中に、私の以前の仲間のウィリアムがいたのです。このウィリアムが私のことを船長に大変よく言ってくれました。

船長は、私をよくもてなしてくれました。一体、どこから来て、どこへ行くつもりだったか、話してくれと言うので、私は今までのことをごく簡単に話しました。だが、船長は、私の頭がどうかしていると思ったようです。いろんな危険に会ったので、気が変になつたと思つて、ほんとしてくれません。そこで私はポケットから黒い牛や羊を出して見せてやりました。これには船長も非常に驚いて、私の言うことが嘘でないと納得したようです。

それから私は、ブレフスキュ皇帝からもらった金貨や肖像画や、その他いろいろ珍しい品を取り出して見せました。私は二百スプラグ入りの金袋かねぶくろを船長にやりました。

船は無事におだやかに進み、一七〇二年四月十日、私たちはダウンスに着きました。ただ、途中でちよつと不幸な事件が起きました。それは船にいる鼠ねずみどもが、私の羊を一頭、引いて行ってしまったことです。きれいに肉をむしり取られた羊の骨は、穴あなの中で見つかりました。残りの家畜は、みんな無事にイギリスへ持って帰りました。私はそれをグリニッジの球場の芝生に放してやりました。この草でも食べるかしら、と心配でしたが、放してみると、家畜たちは、この草が綺麗きれいなので、喜んで食べるのでした。

私が長い航海の間、この家畜を無事に飼かったのは、全く船長のお陰かげでした。私は船長から特別製のバスケットを分けてもらい、それを粉こなにして水でこねて、家畜に食べさせていたのです。イギリスにしばらく滞在している間あいだに、私はこの家畜を見世物にして、かなりお金を儲もけました。が、また、私は航海に出ることになって、六百ポンドで売り払いました。

私が妻子と一緒に暮したのは、たった二カ月でした。もつともつと外国を見たいという気持がうずうずして、どうしても私は家にじつとしていられなくなりました。そこで、私は商船『アドベンチュア号』乗組員になりました。この航海の話は、次の『大人国たいじん』を読んでください。(第一部・完)

*

*

第二部、
大人国たいじんこく
(ブロブデンナグ国)
渡航記

ガリバー旅行記

第二部、大人国（ブロブデインナグ国）渡航記

一、新たな船出

私は、イギリスに戻って二カ月もすると、また故国を後に、ダウンスを船出しました。私の乗った船は、『アドベンチユア号』でした。

船がマダガスカル海峡を過ぎる頃までは、無事な航海でしたが、その島の北あたりから、海が荒れ出しました。そして二十日あまりは、難儀な航海を続けました。が、そのうち風も止むし、波も穏やかになったので、私たちは大変喜んでいました。ところが、船長は、この辺の海のことをよく知っている男でした。暴風雨が来るから、すぐその用意をするようにと命令しました。果たして、次の日から暴風雨がやって来しました。

船は、荒れ狂う風と波に揉まれて、私たちは一生懸命に奮闘しましたが、なにしろ恐ろしい嵐で、海はまるで気が狂ったようでした。船はずんずん押し流されて、どこに自分たちがいるのかも、もう見当がつかなくなりました。私たちの船は、何処とも知れない海の上で陸を求めて進んでいました。まだ、船には食糧も充分あるし、船員はみんな元気でしたが、ただ困るのは水でした。ある日、マストに上っていた少年が、「……陸が見える！」と叫びました。それが一七〇三年六月十六日のことでした。翌日になると、何か大きな島か陸地らしいものが、みんなの目の前に見えて来しました。その南側に小さな岬が海に突き出ていて、浅い入江が一つ出来ていました。

私たちは、その入江から一リーグばかり手前で、錨を下ろしました。みんな水を欲しがっていたので、船長は十二人の船員に水桶を持たせて、ボートに乗せて、水探しに出しました。私もその国が見たいのと、何か発見でもありはしないかと思ったので、一緒にそのボートに乗せてもらいました。

二、島に上陸する

ところが、上陸してみると、川もなければ、泉もなく、人一人住んでいる様子もないのでした。船員たちは、どこか清水がないかと、海岸をあてもなく歩きまわっていました。が、私は別の方角へ一マイル（約一・六km）ばかり一人で歩いてみました。だが、あたりは石ころばかりの荒地でした。面白そうなものも別に見つからないし、そろそろ疲れて来たので、私は入江の方へぶらぶら引返して行きました。海が一目に見渡せるところまで来てみると、船員たちは、もうちゃんとボートに乗り込んで、一生懸命に本船めがけて漕いでいるのです。

おい待ってくれ、と私は大声で呼び掛けようとして、ふと気がつきました。恐ろしく大きな人間がグングン海を渡って、ボートを追っかけているのです。膝のあたりしかない海の中を、その男は恐ろしい大股で歩いて行きます。だが、ボートは半リーグばかりも先に進んでいたし、あたりは鋭い岩だらけの海だったので、この怪物も、ボートに追いつくことは出来なかったのです。

もつとも、これは後から聞いた話なのです。その時の私は、そんなものを見ているどころではありません。元来た道を夢中で駆け出し、それから私は、とにかく、峻しい山の中をよじ登りました。山の上に登ってみると、あたりの様子がいくらか分かりました。土地は見事に耕されていますが、何より私を驚かしたのは、草の大きいことです。そこらに生えている草の高さが二十フィート（約六メートル）以上もありました。

やがて、私は国道へ出ました。国道と言っても、実は、麦畑の中の小路なのでしたが、私にはまるで国道のように思えたのです。しばらく、この道を歩いてみましたが、両側とも、ほとんど何も見えないのでした。取り入れも近づいた麦が、四十フィート（約十二メートル）からの高さに伸びています。一時間ばかりも掛かって、この畑の端へ出てみると、高さ百二十フィート（約三十六メートル）もある垣で、この畑が囲まれているのが分かりました。だが、樹木などはあんまり高いので、私には見当がつきませんでした。

三、畑の中を逃げまわる

この畑から隣りの畑へ通じる段々があり、それが四段になっていて、一番上の段まで行くと、一つの石を跨ぐようになっていました。一段の高さが六フィート（約一・八メートル）もあって、上の石は二十フィート（約六メートル）以上もあるもので、とても私には、そこは通れませんでした。——どこか垣に破れ目でもないかしらと探していると、隣りの畑から、一人の人間がこちらの段々の方へやって来ました。人間と言っても、これは、さつきボートを追っかけていたのと同じくらい大きな怪物です。背の丈は、塔の高さくらいはあり、一歩歩く幅が、十ヤード（約九・一メートル）からありそうです。私は胆を潰し、麦畑の中に逃げ込んで身を隠しました。

そこから見ていると、その男は段々の上に立ち上って、右隣りの畑の方を振り向いて、何か大声で叫びました。その声のもの凄いこと、私は初め雷かと思っただけでした。すると、手に手に鎌を持った同じような七人の怪物が、ぞろぞろと集って来るではありませんか。鎌と言っても、普通の大鎌の六倍からあるのを持っています。が、この七人は、あまり身なりもよくないので、召使らしく思えました。初めの男が何か言いつけると、彼等は私の隠れている畑を刈り出しました。

私は、出来るだけ遠くへ逃げようと思いましたが、この逃げ路がなかなか難儀でした。なにしろ、株と株との間が一フィート（約三十センチ）しかないところもあります。これでは、私の身体でもなかなか通りにくいのでした。どうにかこうにか進んでいるうちに、麦が風雨で倒れてしまっているところへ出ました。もう、私は一歩も前進出来ません。茎がいくつも絡み合っていて、潜り抜けることも出来ないし、倒れた麦の穂先は、ナイフのように尖っていて、それが洋服越しに私の身体を突き刺しそうなのです。

そうこうしているうちに、鎌の音は、百ヤード（約九十一メートル）とない後から近づいて来ます。私はすっかりへたばって、もう立っている力もなくなりました。畝と畝との間に横になると、いつそのまま死んでしまいたいと思いました。私は、残して来た妻や子供たちのことが眼に浮んで来ました。みんなが止めるのも聞かないで、航海に出たのが今になって無念でした。ふと私はリリパットのことも思い出しました。あの国の住民たちは、この私を驚くべき怪物として尊敬してくれたし、あの国でなら、一艦隊をそっくり引きずつ

て帰ることだって出来たのです。

だが、ここではこんな途轍もない大きな連中に会っては、この私はまるで芥子粒みたいなものです。今に誰かこの大きな怪物の一人に捕まったら、私は一口にパクリと食われてしまうでしょう。しかし、この世界の果てには、リリパットよりもっと小さな人間だっているかも知れないし、また、その世界の果てには、今ここにいる大きな人間よりもっともっと大きな人間だっているかも知れないと、私は恐怖で気が遠くなっているながら、こんなことを思い続けていました。

四、巨人につまみ上げられる

そのうちに、刈手の一人が私の寝ている畝から、十ヤード（約九・一呎）のところまで近づいて来ました。もう、この次には足で踏み潰されるか、鎌で真二つに切られるかも知りません。その男が動きかけると、私は大声で喚き散らし、助けを求めました。

巨人は、立ち止まって、しばらくあたりを見まわしていましたが、ふと地面にひれ伏している私を見つけました。この小さな危険な動物を騒がれないように、噛まれぬように捕まえるには、どうしたらいいのかしらといった顔つきで、彼はしばらく考えていました。私もイギリスで鼯鼠や鼠を捕まえる時には、ちよつとこんなふうにしたものです。

とうとう彼は思いきって、人差指と親指で私の腰の後の方をつまみ上げると、私の形をもっとよく見るために、目から三ヤード（約二・七呎）のところへ持って行きました。私は、彼のしていることがよく分かったので、安心して落ち着いていました。こうして地上から六十フィート（約十八呎）の高さにつまみ上げられている間は、じつとしていようと思いました。ただ、苦しかったのは、私を指から滑り落すまいとして、酷く脇腹を締め付けられていることでした。

私は、ただ天を仰ぎ両手を合せながらお願いするように、哀れっぽい調子で何かと尋ねてみました。というのは、私たちが厭な虫など殺す場合、よく地面にパツと叩きつけるものですが、あれを今やられはすまいかと心配でならなかったのです。

だが、幸いなことに、彼には私の声や身振りが気に入ったようでした。私のはつきり言葉話すので、その意味は彼には分からなかったのですが、ほう、ものが言えるのか、と驚いたような顔つきで、彼は珍しげに私を眺めるのでした。私は、彼の指で脇腹を締めつけられているのが苦しくなったので、呻いたり、泣いたりして、一生懸命、そのことを身振りで知らせました。すると、彼にもその意味が分かったらしく、上衣の垂れをつまみ上げて、その中にそつと私を入れました。それから大急ぎで主人のところへ駆けつけて行きました。主人というのは、私が最初に畑で見た男でした。

その主人は、召使が話すのをじつと聞いていましたが、杖ほどもある藁すべ（稲の穂の芯）を取って、それで、私の上衣の垂れをめぐり上げました。この洋服は、私の身体に生れつきくっ付いているものと思っただけでしょう。それから、私の髪の毛にフーと息を吹きかけて髪を分けると、顔を上げしげ眺めました。それから、（これは後になつて分かったのですが）、召使たちを呼び集めると、これまでこんな小さな動物を畑で見たことがあるかと、みんなに尋ねました。それから、私をそつと四つ這いのままの恰好で地面に下ろしてくれました。

私はすぐに立ち上って、逃げ出すつもりのないことを見せるために、ゆるゆるとあたりを歩きまわりました。すると、みんなは、私の動きぶりをよく見ようとして、私を囲んで入り込んでしまいました。私は帽子を取って、百姓に丁寧にお辞儀をしました。それから跪いて、両手を高く差し上げ、天を仰いで大声で二言、三言話しかけました。そして、ポケットから金貨の入った財布を取り出して、うやうやしく彼のところへ持って行きました。彼はそれを掌で受け取ってくれましたが、目のそばへ持って行って、何だろるか眺めていました。袖口からピンを一本抜き取って、その先で何度も掌の上の財布をひっくり返していましたが、やはり何だか分からないようでした。そこで、私は手真似でその掌の財布を下に置いてくれ、と言いました。財布が下に置かれると私はそれを手に取って、中を開いて、金貨をみんな彼の掌の上にはらまきました。四ピストルのスペイン金貨が六枚と、ほかに小銭が二、三十枚ありました。見ると彼は小指の先を舌で濡しては、大きい方の金貨を一枚一枚つまみ上げていましたが、やはりそれが何だかさっぱり分からないらしいのです。

彼は、手真似で、私にもう一度これを財布に収めてポケットに入れておけ、と言うのでした。私は何度もそのお金を彼に差し出してみました。やはり彼の言う通りに収めておきました。そのうちに、もう百姓には私が理性的な生物（人間）だということが分かっていったのです。彼は何度も私に話しかけましたが、その声は、まるで水車の響きのようで、私の耳は破れそうでした。私も知っている限りのいろんな外国語を使って、力一杯の大声で話しかけてみました。すると向うは、耳をすぐ私のそばに持って来て、聞いてくれるのですが駄目でした。私たちの言い合っている言葉は、お互に意味が通じないのでした。

召使たちは、また麦刈に取りかかりましたが、主人はポケットからハンカチを取り出しては二つ折りにして、左手の上に広げ、その掌を地面の上に差し出して、この中に入ってくる来いと手真似で私に合図をしました。その掌の厚さは一フィート（約三十センチ）ぐらいでしたから、私も楽に登れるのです。今はとにかく主人の言う通りにしていようと思いました。

それで、私は、落っこちないように用心しながらハンカチの上に長くなって寝転びました。すると、彼は、ハンカチの端で私の頭のところを大切そうに包んでしまい、そのまま家に持って行きました。

五、家に連れて帰る

さて、家に帰ると、彼は、早速、細君を呼んでハンカチの中のものを見せました。丁度、イギリスの女性が蟻蛙や蜘蛛などを見た時のように、「……キヤア」と叫んで、細君は跳び退きました。しかし、しばらく側で見ているうちに、主人の手真似で私がいゝんなことをするのを見て、細君はすっかり感心してしまいました。そして今度は、だんだんと私に優しくしてくれるようになりました。

正午頃になると、一人の召使が食事を持って来ました。それは、いかにもお百姓の食事らしく、肉をたっぷり盛った皿がただ一つだけ出されたのでした。しかし、それは直径が二十四フィート（約七・四メートル）もある大きなお皿でした。食堂には主人と細君と子供が三人それに年寄のお祖母さんがやって来ました。みんながテーブルに着くと、主人は、私

をテーブルの上に挙げて、少し彼から離れたところに置きました。そのテーブルは、高さ三十フィート(約九・一メートル)もあるのですから、私は怖くてたまらないのです。落っこちないように、出来るだけ真中の方へ寄って行きました。細君は、肉を少し小さく刻んで、それからパンを粉々に砕くと、それを私の前に置いてくれました。そこで私は細君に向って、丁寧にお辞儀をして、ポケットからナイフとフォークを取り出して、食べ始めました。みんなは、私の有様が面白くてたまらないようでした。

細君は、女中を呼んで、小さなコップを持って来させました。小さいと言っても、三ガロン(約五升)は入りそうなコップですが、それに飲物を注いでくれました。それを私はやつと両手で抱え上げると、まず、英語で出来るだけ大きな声を張り上げて、細君の健康を祝しました。それから、うやうやしくコップを頂戴しました。すると、みんなはお腹を抱えて笑い出しましたが、その笑い声のもの凄さ、私は耳がつんぼになるばかりでした。

この飲物は、サイダーのような味なので、私は美味しく頂きました。しばらくすると、主人は、私を手真似で彼の皿のところへ来いと招きました。しかし、なにしろ私はテーブルの上をビクビクしながら歩いているのでしたから、パンの皮に躓くと、うつ伏せにペタンと倒れてしまいました。けれども、怪我はなかったのです。すぐに起き上がりましたが、みんながひどく心配してくれるので、私は小脇に抱えていた帽子を手に取り、頭の上で振りながら「万歳！」と叫びました。これは、転んでも怪我はなかったということを、みんなに知ってもらうためでした。

六、息子の悪戯と猫への対応

その時、主人の隣りに坐っていた一番下の息子で、まだ十ばかりのいたずら児が、私の方へ手を伸したかと思うと、いきなり私の両足を掴まえて、宙に高くぶら下げました。私は、手も足もブルブル震え続けました。しかし、主人は息子の手から私を取り上げ、同時に彼の左の耳をピシヤリと殴り付けました。それは、ヨーロッパの騎兵なら、六十人ぐらい叩きつけてしまいそうな殴り方でした。それから主人は息子に、向うへ行ってしまうと命令するのです。

しかし、私は、この子供に怒まればしいかと心配でした。私は、イギリスの子供たちも、雀や兎或いは小猫や小犬などによく悪戯をするのを知っています。そこで、私は主人の前に跪いてその息子を指さしながら、どうか許してあげてください、と手真似で、私の気持を伝えました。私は息子のところへ行き、その手にキスしました。主人はその息子の手を取って、私を優しく撫でさせました。

丁度、この食事の最中に、細君の飼っている猫がやって来て、細君の膝の上に跳び上りました。私はすぐ後の方で、何か十人あまりの職人が仕事でも始めたような物音を聞きました。振り返ってみると、この猫が咽喉をゴロゴロ鳴らしているのです。細君が食物をやつたり、頭を撫でている間に、私はそつとその猫を眺めてみましたが、その大きさは、まず、牡牛の三倍はありそうでした。私は五十フィート(約十五メートル)も離れて、猫から一番遠いところに立っていたのですが、そして、細君は、猫が私に跳びかかったり、爪を立てたりしないように、しっかりと猫を押えてくれたのですが、それでも、私はそのもの凄い顔が恐ろしくてならなかったのです。しかし、危険なことは起らなかったのです。

主人は、わざと私を猫の鼻の先ヤード（約二・七呎）もないところに置きました。しかし、猫は見向きもしませんでした。猛獣というものは、こちらが逃げ出したり、怖がるのと、かえって追っかけて来て跳びかかるものだ、ということを私は前に人から聞いて知っていました。それで、私は今、いくら恐ろしくても知らん顔をしていよう、と決心しました。私は、猫の鼻先をわざと五、六回行ったり来たりしてやりました。それから、ずっと側まで近づいて行ってみました。と、かえって猫の方が怖そうに後ずさりするのでした。その時から、私はもう猫や犬を怖がらなくなりました。犬も、この家には三、四頭ばかりいたのです。それが部屋の中に入って来ても、私は平気でした。一匹はマステイフで、大きさは象の四倍ぐらいありました。もう一匹は、グレイハウンドで、これはとても背の高い犬でした。

七、赤ん坊と乳母の乳房の大きさ

食事がしまい頃になると、乳母が赤ん坊を抱いてやって来ました。赤ん坊は、私を見つけると、玩具にと欲しがって泣き出しました。その赤ん坊の泣き声は、何とももの凄いな声でした。母親は私をつまみ上げて、赤ん坊の傍に置きました。赤ん坊は、いきなり私の腰のあたりを引っつかんで、頭を口の中に持って行きました。私がワツと大声で喚くと、赤ん坊は吃驚して手を離しました。その時、細君が前掛けを広げて、うまく受けてくれたので、私は助かりました。でなかったら、首の骨ぐらい折れたでしょう。

乳母は、ガラガラを持って来て、赤ん坊の機嫌を取ろうとしました。そのガラガラというのは、空罐に大きな石を詰めたたようなもので、それを綱で子供の腰に結びつけるのでした。でも、赤ん坊はまだ泣き続けていました。それで、とうとう乳母は胸を広げて、乳房を出し、赤ん坊の口に持って行きました。私はその乳房を見て、びっくりしました。

大きさといい、形といい、色合いといい、とても気味の悪いものでした。なにしろ、六フィート（約一・八呎）も突き出ているので、まわりは十六フィート（約四・八呎）ぐらいあるでしょう。乳首だって、私の頭の半分ぐらいあります。それに、乳房全体があざやそばかすまたおできなどでもみだらなのです。見ていると、気持が悪くなるくらいでした。乳母は乳を飲みたいような姿勢で、赤ん坊を抱いていますが、私はテーブルの上にいるので、その乳房は、すぐ目の前にはつきりと見えるのでした。

それで、私はふとこんなことが分かりました。イギリスの女が美しく見えるのは、それは私たちと身体の大きさが同じだからなのでしょう。もし虫眼鏡で覗いて見れば、どんな美しい顔にも凸凹やしみが見えるに違いありません。そう言えば、リリパットに私がいた頃、あの小人たちの肌の色は、とても美しかったのを私はよく覚えています。リリパットの友達も、この私の顔が小人の目から見ると、どんなに見えるか教えてくれたことがあります。私の顔は、地上からはるかに見上げている方が美しいそうです。私の掌に乗せられて近くで見ると、私の顔は大きな孔だらけで、髯の根は猪の毛の十倍ぐらいも堅そうで、顔の色の気味の悪いことと言ったらないそうです。

ところで、今、このテーブルに坐っている巨人たちは、何も片輪などではないのです。顔だけはみんなよく整っています。ことに主人など、私が六十フィート（約十八呎）の高さから眺めてみると、なかなか立派な顔つきでした。

八、広い部屋で一人寝る

食事が済むと、主人は仕事に出かけて行きました。彼は細君に私の面倒をみてやれ、と命令しているようでした。その声や身振りで、私にはそれが分かったのです。私は大変疲れて、睡くなりました。すると細君は、私の睡そうな顔に気がつき、自分のベッドに寝かして、綺麗な白いハンカチを私のの上にかけてくれました。ハンカチと言っても、軍艦の帆よりまだ大きいくらいでゴツゴツしていました。

私は、二時間ばかりも眠りました。私は国へ帰って妻子と一緒に暮している夢をみていました。ふと目が覚めて、あたりを見まわすと、私は、広さ二、三百フィート（約六十〜九十一呎）、高さ二百フィート（約六十呎）以上もある、がらんとした大きな部屋に、たった一人、幅二十ヤード（約十八呎）もある大きなベッドで寝ているのに気が付きました。すると、私は何だか悲しくなっていました。

細君は家事の用で外に出て行ったらしく、姿が見えませんでした。私は錠を下ろした部屋に一人閉じ込められているのです。このベッドは、床から八ヤード（約七・三呎）もあります。私は下へ降りたかったのですが、声を出して叫ぶ元気もなくなっていました。しかし、たとえ呼んでみても、とても私の声では、この部屋から家族のいる台所までは届かなかったでしょう。

九、鼠との格闘

ところが、その時、鼠が二匹、ベッドの帷をのぼって来ると、ベッドの上をあちこち嗅ぎまわって、ちよろちよろ走り出しました。一匹などは、もう少して私の顔に這いのぼろうとしたのです。私はびっくりして跳び起ると、短剣を抜いて、身構えました。だが、この恐ろしい獣どもは、左右からドタドタと襲いかかって来て、とうとう一匹は私の襟首に足をかけました。しかし、私は幸運にも、彼に噛みつかれる前に、彼の腹にプスリと短剣を突き刺していました。

たちまち、彼は私の足許に倒れてしまいました。もう一匹の方は、仲間が殺されたのを見ると、慌てて逃げ出しました。逃げようとするところを、私は肩に一刀浴せかけたので、タラタラ血を流しながら行ってしまいました。この大格闘のあとで、私はベッドの上をあちこち歩きながら息を鎮め、元気を取り戻しました。鼠と言っても、大きさはマステイフ種の犬ぐらいあって、それにとでもすばしこくて、獐猛な奴でした。もし私が裸で寝ていたら、きつと八つ裂きにされて食べられたでしょう。

死んだ鼠の尻尾を測ってみると、二ヤード（約一・八呎）ぐらいありました。まだ血を流して横になっている死骸を、ベッドから引きずり下ろすのは、実に厭なことでした。それに、まだ少し息が残っているようでしたが、これは、首のところへ深く剣を突き刺して、息の根を止めてしまいました。

それから間もなく、細君が部屋に入って来ました。私が血まみれになっているのを見て、細君は駆け寄って、抱き上げてくれました。私は鼠の死骸を指さし、そして、笑いながら怪我はなかったと手真似で教えました。細君は大喜びでした。女中を呼ぶと、死骸を火箸

で挟んで窓から捨てさせました。それから、彼女は私をテーブルの上に乗せてくれました。私は、血だらけの短剣を見せてから、上衣の垂れで拭いて鞆に収めました。

十、世話係の九歳の娘

この家には九つになる娘がいました。年のわりにはとても器用な子で、針仕事も上手だし、赤ん坊に着物を着せたりすることもうまいものでした。この娘と母親の二人が相談して、赤ん坊の揺籃を私の寢床に作り直してくれました。私を入れる揺籃を箆笥の小さな引出に入れ、鼠に食われないように、その引出を吊るし棚の上に置いてくれました。私がこの家で暮している間は、いつもこれが私の寢床でした。もともと、私がこの国の言葉が分かるようになり、ものが言えるようになると、私はいろいろと頼んで、もっと便利な寢床に直してもらいました。

この家の娘は、大変器用で、私が一、二度その前で洋服を脱いでみせると、すぐに私に着せたり脱がせたりすることが出来るようになりました。もともと、娘に手伝ってもらわない時は、私は自分一人で着たり脱いだりしていました。彼女は私にシャツを七枚と、それから下着などを拵えてくれました。一番やわらかい布地で拵えてくれたのですが、それでも、ズックよりもっとゴツゴツしていました。そして、その洗濯も彼女がしてくれるのでした。

彼女は、私の先生になって言葉を教えてくれました。何でも私が指さすものを、この国の言葉で言ってくれます。そんなふうにして教えられたので、二、三日もすると、私にも欲しいものを口で言えるようになりました。

彼女は、大変気立てのいい娘で、年のわりに小柄で四十フィート（約十二呎）しかなかったのです。彼女は私にグリルドリッグという名前をつけてくれました。やがて、家の人々もこの名を使うようになり、後には国じゅうの人たちがみな私のことをそう言っていました。このグリルドリッグという言葉は、イギリスで言えば、マニキン（小人）という言葉と同じ意味でした。

私がこの国で無事に生きていられたのは、一つには、この娘のお陰でした。私たちはここにいる間中は、決して離れなかったものです。私は彼女のことをグラムダルクリッチ（可愛いお乳母さん）と呼びました。彼女が私に尽くしてくれた親切の数々は、特にここに書いておきたいと思います。私は、ぜひ折があったら、彼女に恩返ししたいと心から願っているのです。

十一、私を見世物にする相談

さて、私の主人が畑で不思議な動物を見つけたという噂は、だんだん広がって行きました。その動物の大きさは、スプラクナク（この国の綺麗な動物で、長さは凡そ六フィート《約一・八呎》ぐらいで、形はまるで人間と同じ形だし、動作も人間とそっくり、何だか可愛い言葉をしゃべるし、それにこの国の言葉も今は少し覚えたようだし、二本足でまっすぐ立って歩くと、大人しくて素直で呼べば来るし、言いつけたことは何でもするし、とても華奢な手足を持っていて、顔色は、三つになる貴族の娘よりもっと綺麗だなどと、

私の評判は、だんだん広まっていました。

ところで、主人の親友の農夫がこのことを聞くと、ほんとにかどうか見にやっ来て来ました。私はさっそく連れ出されて、テーブルの上に乗せられました。私は言いつけ通りに歩いて見せたり、短剣を抜いたり、収めたりして見せました。それから、お客に向って、うやうやしくお辞儀をして、「……よくいらつしやいました。御機嫌はいかがですか」と、可愛い乳母さんから教えられた通りの言葉で言ってやりました。

そのお客は、年寄で目がよく見えないので、もつとよく見ようと眼鏡をかけました。それを見ると、私は腹を抱えて笑わないではいられなくなりました。というのは、彼の目が、二つの窓から射し込む満月のように見えたからです。みんなは、私のおかしがるわけが分かるかと、一緒になって笑い出しました。すると、老人はムツとして顔色を変えました。

この老人は、けちん坊だとの評判でしたが、やはりそうでした。そのため、私はとんだ目に会うことになりました。ここから二十二マイル（約三十五km）ばかり、馬でなら半時間かかる隣の町の市日（市が立つ日）に私を連れて行って、一つ見世物にするがいいと、彼は主人に勧めたのです。主人とその男は、時々、私の方を指さして、長い間、ひそひそと囁き合っていました。私はそれを見て、これは何か悪いことを相談し合ってるなど思いました。じつと気をつけていると、時々、洩れて聞える二人の言葉は、何だか私にも分かるような気がしました。しかし、ほんとのことは、次の朝、グラムダルクリッチが私に話してくれたので、それですっかり分かったのです。

十二、私が見世物にされるということ

私が見世物にされるということを、グラムダルクリッチは、母親から聞き出したのでした。彼女は私と別れることを大変悲しがり、私を胸に抱きしめて泣き出しました。「……見物人たちは、どんな乱暴なことをするか分かりません。あなたを押しつぶしてしまうかも知れないし、もしかすると、手を取って、あなたの手足を一本ぐらい折ってしまうかも知りません」と、彼女は私のことを心配してくるのです。「……あなたは遠慮深い、大人しい、そして、気位の高い人でしょう。それなのに、見世物なんかにされて、お金のために卑しい連中の前で慰みにされるなんて、ほんとうに口惜しいことでしょう。お父さんもお母さんも、私にグリルドリッグをあげると言って約束したくせに、今になって、こんなことをするなんて。去年も子羊をあげると言っておきながら、その羊が肥えてくと、すぐ肉屋に売り払ってしまった、あれと同じようなことをしようとしてるのだから、彼女は私のことを嘆くのです。」

しかし、私は、この乳母さんほどには心配していませんでした。いつかはきっと自由の身になってみせると、私は強い希望を持っていました。それに私が怪物としてあちこちで見世物にされても、私はこの国には知人一人あるわけではなし、私がイギリスに帰ってからも、何もこのことは非難されるはずがないと思えました。イギリスの国王でも、今の私と同じようなことになったら、やはりこれくらいの苦勞はするだろうと私は思いました。

十三、隣りの町で見世物に……

主人は、友だちの意見に従って、私を箱に入れて、次の市日（市が立つ日）に隣りの町まで運んで行きました。私の可愛い乳母さん（娘）も、父親の後に乗って一緒について来ました。私の入れられた箱は、四方とも塞がれていて、ただ、出入口の小さな戸口の他には、空気抜きのため錐の穴が二つ三つ付けてありました。娘は私が寝られるように、箱の中に赤ん坊の蒲団を敷いてくれました。

この箱の旅は、たった半時間の旅行でしたが、身体がひどく揺られたので、私はくたたくたになっしまいました。なにしろ、馬は一步に四十フィート（約十二メートル）も飛んで、しかも非常に高く跳ねるので、私の箱は、まるで暴風雨の中を船が上ったり下ったりするようなものでした。

さて、町に着くと、主人は、行きつけの宿屋の前で馬を降り、しばらく宿の亭主と相談していました。それからいろんな準備が出来上ると、東西屋（ひろめ屋）を雇って町じゅうに触れ歩かしました。「……さあ、いらつしやい、いらつしやい、世にも不思議な生物、身の丈はスプラクナク（この国の綺麗な動物で約六フィート《約一・八メートル》）のもので、頭のとっぺんから足の先まで身体は、人間にそっくりそのまま言葉が話せて面白い芸当もいたします」と、こんなふうなことをしゃべらせたのです。

私は宿屋で、三百フィート（約九十一メートル）四方もありそうな大広間に連れて行かれ、テーブルの上に乗せられました。私の乳母は、テーブルのそばの腰掛の上に立って、私の面倒をみたり、いろいろと指図をしてくれるのでした。そのうちに、見物人がぞろぞろと押しかけて来ましたが、あまり混雑するので、主人は一回に三十人だけ見せることに決めました。——私は、乳母の言いつけ通りにテーブルの上を歩きまわったり、私にものを言わそうとして、彼女がいろいろ質問をすると、私は力一杯の声で、それに答えるのでした。それから、何度も見物人の方を振り向いて、丁寧にお辞儀をして、「……よくいらつしやいました」と言ったり、その他、教わった通りの挨拶をします。そして、コップがわりにグラムダルクリッチが呉れた指貫きに酒を注いでもらい、私はみんなのために乾盃をしたり、やります。かと思えば、短剣を抜いて、イギリスの剣術使の真似をして振りまわしたり、また、私の乳母が藁の切れっぱしを渡してくれると、私はそれを槍のつもりにして、若い頃習った槍の術をして見せました。

その日の見物人は、十二組あったので、私は十二回もこんなくだらない真似を繰り返さねばならなかったのです。そうそう、私は疲れて腹が立って、すっかりへばってしまいました。私を見た連中が、これは素晴らしいという評判を立てたものですから、見物人はどつと押しかけて大入満員でした。主人は、私の乳母以外には、誰にも私に指一本触らせませんでした。その上、危険を防ぐために、テーブルの周りをぐるりとベンチで取り囲んで、誰の手にも届かないようにしました。

それでも、悪戯の小学生が私の頭を狙って榛の実を投げつけたものです。当たらなかつたので助かりましたが、もし当たったら、私の頭は滅茶苦茶にされたでしょう。なにしろ榛の実と言っても、南瓜ぐらいの大きさだし、それに猛烈な勢いで飛んで来たのです。しかし、この悪戯小僧は、殴られて部屋から追い出されてしまいました。

市日（市の立つ日）が済んで、私たちは家に戻りましたが、主人は、この次の市日にもまたこの見世物をやるという広告を出しました。そして、それまでに私のためにもっと便利な乗り物を用意してくれました。だが、それは当たり前前で、何分この前の旅行で

私は非常に疲れた上、八時間もぶつ通しに見世物にされたので、ヘトヘトになってしまいました。私が元気を取り戻すには、少くとも三日は掛かりました。

十四、街から街へと見世物旅

ところが、私の評判を聞いて、あちこちの紳士たちが、百マイル（約百六十km）も先からも、今度は主人の家に押しかけて来ました。私は家でも休めなくなりました。毎日毎日、私はほとんど身体からだの休まる暇ひまはなかったのです。

これは、儲もちかりそうだと主人は、今度は私を街から街へ連れ歩いて見世物にすることを思い付きました。長い旅行に必要な支度したくを整え、家の始末をつけると、細君に別れを告げて、一七〇三年の八月十七日、（これは私がこの国へ着いてから丁度二カ月目でしたが）、に出發しました。主人は、この国のほぼ真中まんなかにある首都をめざして行くのですが、家からそこまでは三千マイル（約四八二八km）の道程みちのりでした。

主人は、娘のグラムダルクリッチを自分の後に乗せました。私は箱に入れられ、その箱は娘の腰に結び付けてありました。彼女は箱の内側を一番柔らかい布地ぬめじですっかり張つてくれ、下には厚い敷物しきものを入れて、その上に赤ん坊の寝台を置いてくれました。私の下着やシャツなんかも、みんな彼女が整えてくれ、何不自由なくしてくれました。私たちの後から、家の小僧ひじりが一人荷物を持ってついて来ました。

主人の考えでは、この旅は途中の町で見世物を開き、客のありそうな村や、貴人の家には、五十マイル（約八km）や百マイル（約一六〇km）ぐらいは、寄り道してもよいつもりだったらしいのです。私たちは毎日わずかに百四、五十マイル（約二二五〜二四一km）ぐらいつつ進み、大変楽な旅をしました。グラムダルクリッチが私を庇かばうために、馬の揺れですぐ自分の方が疲れてしまうと云ってくれたからです。私が頼むと、彼女は、たびたび箱から出しては、外の空気を吸すわせてくれたり、景色けしきを見せてくれました。そんな時、彼女は紐ひもでしっかりと私を引っ張ひっていてくれるのです。

私たちは、ナイル河やガンジス河よりも何倍も大きな河を五つ六つ越したのです。ロンドンのテムズ河みたいな小さな川は一つもないのです。この旅行は、十週間かかりました。私たちは十八の大都市に立ち寄り、それから村々や貴人の家で、何十回となく見世物になりました。

十月二十六日に、いよいよ私たちは首都に着きました。その首都の名は、ローブラルグラットと言われ、これは『世界の誇り』という意味でした。主人は、宮殿から程遠くない目抜きの大通りに宿を取りました。そして、この私のことを詳しく書いたビラをあちこちに貼り出しました。それから、方三、四百フィート（約九十二〜一二二ft）もある大きな部屋を借りて、そこに私の舞台として、直径六十フィート（約十八m）ばかりのテーブルを置きました。そして、私が落っこちないようにテーブルの縁ふちから三フィート（約九十cm）入ったところに、高さ三フィート（約九十cm）の柵さくをめぐらしました。

私は毎日、十回ずつ見世物みせものにされましたが、人々はすっかり感心して大満足のようにでした。私はこの頃ころ、もうかなりうまく言葉が使えて、話しかけられる言葉なら、何でも分かるようになっていました。その上、家にいる時も、旅行中もいつもグラムダルクリッチが私の先生になってくれたので、この国の文字も覚え、ちよつとした文章なら説明すること

が出来るようになりました。彼女はポケットに小さな本を入れていました。それは若い娘たちによく読まれる本で、宗教のことが簡単に書いてあります。その本を使って、彼女は私に字を教えたり、言葉を説明してくれるのでした。

十五、王妃との出遭い

私は、毎日、忙しく動きまわらされたので、二、三週間もすると、とうとう身体からだの調子が変になりました。主人は私のおかげで、儲ければ儲けるほど、ますます欲ばりになりました。私は、まるで食事も欲しくなくなり、骸骨がいこつのように痩せ細りました。主人はそれを見ると、これは死んでしまふに違いないと考え、これが生きているうちに出来るだけ儲けておこうと決心したようです。

丁度、彼がこんなことを考えているところへ、宮廷から一人の使者がやって来ました。王妃と女官たちのお慰みにするのだから、すぐ私を連れて来い、という命令なのです。これは、女官たちの中にもう私を見物したものがあつて、私の振舞いの美しいこと賢いことなどを、いろいろ珍しい話を申し上げていたからです。

さて、宮廷に私が引き出されると、王妃や女官たちは、私の物腰や態度を見て、大変面白がりました。私はさつそく、跪ひざまずいて、王妃の御足みあしにキスすることをお願いしました。しかし、慈めぐみ深い王妃は、手の小指を差し出されました。私はテーブルの上に置かれていたので、その小指を両腕で抱えて、その先にうやうやしく唇くちびるを当てました。

王妃は、まず、私の国や旅行について、いろいろ質問されました。私はできるだけ簡単にはつきりとお答えしました。それから王妃は、宮廷に来て住む気はないかと聞かれました。そこで、私はテーブルに頭をすりつけて、「……只今ただいまは主人の奴隷でございますが、もしお許しが出るのでしたら、私は陛下に一身を捧げてお仕えしたいと存じます」と答えました。すると、王妃は、主人に向つて、これをいい値段で売つてはくれないかとお尋ねになりました。主人の方では、私がとてもあと一月とは生きていまいと思つていたところですから、「……それでは、お譲りいたしますが、金貨一千枚頂戴ちやうたいいたしたいと存じます」と言うのでした。

王妃は、その場ですぐお金を渡されました。その時、私は王妃に次のようにお願いしました。「……これから陛下にお仕えするにつきまして、お願いしたいことがございます。それは、今日まで私のことをよく気をつけて面倒めんどうを見てくれたいたグラムダルクリッチのことです。あの人も一つ宮廷でお召し使いになり、これからもずっと私の乳母うぼと教師にさせていただけないでしょうか」と。

王妃は、この私の願いをすぐ許されました。が、父親の方もこれはわけなく承知しました。自分の娘が宮廷に召し出されることは、彼には願つてもない喜びでした。娘の方も、嬉しさを隠かくしきれない様子ようすでした。そこで旧主人は私に別れを告げ、「……よい御奉公をするのだよ」と言いながら出て行きました。

私は、軽くお辞儀じぎしただけで返事もしてやらなかったのです。王妃は、私のこの冷淡さに気がつかれ、どうしたのか、とお尋ねになりました。そこで、私はありのままを申し上げました。「……私は、あの主人に畑なかの中で見つけ出されたのですが、その時、頭を打ち砕くだかれなかったことだけが、まあ有り難がたかったです。主人は私を見世物みせものにしたりして、さ

んざ大儲けしたのですから、私は主人の恩には充分報いているはずです。これまで私の送ってきた生活は、私より十倍強い動物でも死んでしまいそうな、そんな酷いものでした。毎日続け様の骨折りのため、私の身体は非常に弱ってしまいました。主人はもう私が長生きしないと買ったからこそ、陛下に売り払ったのです。

けれども今では、大自然の花、世界の愛人、人民の喜び、天地の不死鳥であらせられる陛下に保護されましたので、もう私は悪い扱いをされる心配もなくなりました。陛下のお顔を眺めさせていただくだけでも、私はもうひとりで元気の湧いて来る気がいたしません」と、私は、ぎつとこんなふうにご王妃に申し上げました。王妃は私の挨拶を聞かれると、とにかく、こんな小さな動物に、こんな智恵と分別があるのをすっかり驚かれました。そこで、王妃は掌の中に私を入れて、国王陛下の部屋のところへ連れて行かれました。

十六、国王陛下と私

国王陛下は、非常に厳めしく、重々しい顔付きの方でしたが、初めは、私の恰好がよくお分かりにならなかったらしく、「……いつからスプラクナクなど可愛がつてるのだね」と、王妃にお聞きになりました。これは、私が王妃の右手の中にうつ伏していたので、国王は、てっきり私をスプラクナク（この国の動物）だと思われたのでしよう。

ところが、王妃は非常に気の利いた面白いことの好きな方でした。私をそつと書きもの机の上に置くと、一つ国王に身の上話をしてあげなさい、と仰せられるのです。私はごく簡単に話しました。その時、戸口までついて来て、私から目を離さなかったグラムダルクリツチが部屋の中に入って来ました。彼女は、私が彼女の父の家に来てから以来のことを、全部残らず、陛下に説明して聞かせました。

国王は、この国一番の学者で、哲学や数学に詳しい方でした。初め、私がまだものを言わないで、まっすぐに立って歩いているのを御覧になった時には、これは誰か器用な職人が工夫をして作ったぜんまい仕掛の人形だろう、とお考えになりました。けれども、私の声を聞き、私の言うことが一つ一つ道理に合っているのを御覧になると、さすがに吃驚されたようでした。

しかし、国王は、どうして私がこの国へ来たか、それだけは、私の説明ではどうも満足されなかったようです。これはグラムダルクリツチと父親がでっち上げた作り話だろう、よい値段で売りつけるために、二人で言葉を教え込んだのだろう、というふうにお考えになりました。それで陛下は私に向って、まだいろいろと質問をされました。私は筋道の立つ返事を申し上げました。ただ、私の言葉には詭計があり、農家で覚えたのですから、宮廷の上品な言い方ではなかったわけです。

十七、三人の大学者

この国では毎週、三人の大学者が陛下のところに来るようになっていました。陛下は、その三人の学者を呼んで、この私を研究させられました。これは一体何だろうか、学者たちは、しきりに首をひねって私の形を調べていましたが、みんなまちまちのことを言うのでした。これは、どうも自然の正しい法則から生まれたものではない、こんな身体では

木によじ登ることも、地面に穴を掘ることも出来ないから、さぞ困るだろう、ということだけは、三人とも意見が合いました。

彼等は、私の歯をよく調べてみた上で、これは肉食動物だと言い出しました。ところが、大概の獣は私より強いのです。野鼠でも私より敏捷でした。これでは、蝸牛か虫でも食べるのでなければ、生きて行けるとは考えられないのです。ところが、いろいろやってみても、とてもそんなものは食べないということが分かりました。

学者の一人は、もしかすると、これはまだ産まれない前の子供だろう、と言い出しました。だが、それには二人の学者がすぐ反対しました。これには手も足もちゃんとついている、それに髯まである、髯は虫眼鏡で見なければ分からないが、とにかく、これは数年間は生きて来たものに違いない、と二人の学者は言うのでした。

学者たちは、また首をひねって言います。これは侏儒でもない、侏儒なら、王妃のお気に入りのこの国第一の侏儒でも、身の丈三十フィート（約九・一メートル）はあるが、これはもっと小さいから、侏儒とも言えない、と不思議がるのでした。そんなふうにして、いろいろ議論をした挙げ句、三人はとうとうこう決めてしまいました。これは、つまり、自然が悪戯をして作り出したものだろう、ということになって、私のことを、『自然の戯れ』だと彼等は言うのでした。

こんなふうには学者たちが私を、『自然の戯れ』だと決めてしまったので、私はそれがひどく不服でした。そこで、私は国王陛下に申し上げました。「……どうか私の申し上げることも少しお聞きください。私はこう見えても、これでも故国に帰りさえすれば、私と同じような背丈の人間が、何百万人といえるのです。そしてそこでは、動物も樹木も家も、みんな私の身体と同じ割合で小さくなっています。ですから、私でも、その国でなら、充分自分で身を守ること出来るし、ちゃんと立派に生きて行けるのです」と。

私はこう言って、学者たちの見当違いを正してやったつもりなのです。しかし、彼等はただニヤニヤ笑うばかりで、「……あんなうまいこと言うが、農夫から教え込まれたのだろう」と言うのでした。——しかし、陛下はさすがに賢いお方でした。それで、学者たちを帰らすと、もう一度、私の旧主人の農夫を呼びにやられました。私の旧主人がやって来ると、陛下はまず御自身で、彼にいろいろとお尋ねになりました。それから、その旧主人と私と娘と三人に目の前で話させて御覧になりました。そして、これは私たちの言っていることが、ほんとも知れない、というふうにお考えになりました。

十八、王妃のお気に入りとなって

陛下は、王妃に私の面倒をよく見るように言いつけられました。また、私とグラムダルクリッチが非常に仲好しなのを御覧になって、私の世話はこの娘にやらせようと、お考えになりました。そこで彼女は宮中に便利な部屋を一つあてがわれました。そして、彼女の世話をするために、家庭教師の婦人が一人、それから着物の世話をする女中が一人、いろんな雑用をする召使が二人、それだけが彼女に付き添うことになりました。けれども、私の世話は全部、グラムダルクリッチ一人がしてくれるのでした。

王妃は、お附きの指物師に言いつけて、私の寝室になるような一つの箱を作らせになりました。これを作るには、私とグラムダルクリッチがいろいろ意見を言ったのですが、指

物師は、とても器用な職人でしたから、三週間もすると、私の指図した通りに、縦横十六フィート(約四・八メートル)、高さ十二フィート(約三・六メートル)、それに窓と戸口と二つの小部屋のある、木造の室を作り上げました。それはまるでロンドンの寝室そっくりでした。

この寝室の天井の板は、二つの蝶番で開けたり出来るようになっていて、家具師が持つて来た寝台を、その天井のところから入れました。寝台は、毎日、グラムダルクリッチが取り出して日に当て、ちゃんと自分で整えては、晩になると中に入れて、天井に錠を下ろすのでした。

それから、小さい骨董品などを拵えるので有名な一人の職人が、象牙みたいなもので凭っかかりのついた椅子を二つ、引出付きのテーブルを二つ作ってくれました。部屋は壁も床も天井も蒲団が張りつめてありました。それは、この寝室を提げて持ち歩く時に、中にいる私が怪我をするといけなし、また、馬車に乗せる時に揺れるのを防ぐために、こうしてあるのです。

私は、鼠などの入って来ないように扉に鍵を付けてほしいと言いました。鍛冶屋は、いろいろ工夫してみた上で、これまでに類のないほど小さな鍵を作ってくれました。イギリスにだって紳士の家の門などには、もっと大きなものがあるはずですが、私はこの鍵は自分のポケットにしまっておくことにしました。あんまり小さいので、グラムダルクリッチに持たせては、失くすかも知れないと思ったからです。

王妃は、一番薄い絹地で、私の洋服を作らせてくださいました。が、これはイギリスの毛布ぐらいの厚さで、馴れるまでにはずいぶん着心地の悪い服でした。仕立はすっかりこの国の型でしたが、ペルシャ服のようなところもあれば、支那服にも似ていて、非常にきちんとしていて重々しいものでした。

王妃は、私がすっかりお気に入り入りで、私がいないと食事も召し上らないほどになりました。私は、王妃の食卓の上に、丁度、その左腕のあたりに、私のテーブルと椅子を置いてもらうのでした。グラムダルクリッチは、私のテーブルの近くの、床の上の腰掛の上に立って、私の面倒をみてくれるのです。

私のためには、銀の皿が一揃い、その他いろんな品がありました。これも大きさは、王妃御自身のものに比べると、丁度、玩具屋にある人形のお家の食器類のようなものでした。私の食器はちゃんと銀の箱に入れて、乳母さんがポケットにしまっていて、食事の時になつて、欲しいと言くと、必ず自分で綺麗に拭いて、それから私に渡してくれます。王妃と一緒に食事するのは二人の王女だけで、姉の方は十六歳、妹は十三歳と一カ月でした。

王妃が肉を切つて、私の皿に入れてくださると、私は、自分でさらにそれを小さく切つて食べます。このままごとのような私の食べ方が、王妃にはとても面白かったのです。というのは、王妃は、(少食の方でしたが)、なにしろ、イギリスの百姓が十二人も食べられるほどのものを一口に召し上るのです。実際この有様には、私も、時々、やりきれない気持がしました。

王妃は、雲雀の翼を骨ごとポリポリ噛み砕いてしまわれますが、その翼の大きさは、七面鳥の翼の九倍からあるのです。それに、パンの一口分も驚くほど大きなものでした。

王妃は、黄金の盃で大樽一箇分以上の飲物を、一息にお飲みになります。それから、王妃のナイフの大きさは、大鎌の二倍もあります。スプーンもフォークもそれぞれみな実に必要なものです。私は、いつかグラムダルクリッチが面白半分宮廷の食卓に連れて行って

くれたのを覚えていますが、こういう巨大なナイフやフォークが十余りも並んだ有様、こんな恐ろしい光景は、全く見たことがないと思いました。

十九、国王といろいろ話をすると

この国では、毎週、水曜日がお休みの日なので、この日には、両陛下はじめ、王子王女殿下も、国王陛下のお部屋で一緒に食事をされることになっています。私は今では国王陛下にもすつかりお気に入りになっていたので、この会食の時には、いつも私の椅子と食卓が陛下の左手の塩壺の前に置かれました。

陛下は、私と話をするのがお好きで、ヨーロッパの風俗、宗教、法律、政治、学問などについていろいろお質問になります。私も出来るだけよくお答え申し上げますのでした。陛下は頭のいい方ですから、私の申し上げることがすぐにお分かりです。そして、なかなか賢いことをおっしゃるのでした。

けれども、一度こんなことがありました。私がイギリスのことや貿易のこと或いは戦争や政党のことなどを、あまりいい気になってしゃべりましたところ、陛下は、右手に私をつまみ上げて、左の手で静かに私を撫でながら大笑いされました。それから、陛下の後、大きな白い杖を持って控えている首相をかえりみて、こう言われました。「……人間なんていくら威張ったところで、つまらないものではないか。このちっぽけな虫けらでさえ、真似が出来るのだからな。どうだ、こんな奴等にでも位とか称号があると言うし、家とか市とか呼ぶちっぽけな巢や穴なども作るらしい。それに、お洒落を試してみたり、戦争してみたり、喧嘩したり、欺いたり、裏切ったりするといふのだからな」と。

大体、こんなふうな調子で言われましたので、自分の祖国がこんなに軽蔑されるのを聞いては、私は腹が立って、顔が真赤になってしまいました。しかし、よくよく考え直してみると、私は陛下に恥をかかされたのかどうか、あやしくなりました。というのは、私はこうして幾月か、この国民の姿や話しぶりに馴れ、見るものがみな、この国では人間の大きさに比例して大きい、ということが分かって来たので、今では、もう初めのようにその大きさに驚いたり恐れたりしなくなりました。ですから、今では、もしイギリスの貴族たちが晴着を着て、さも上品らしく気取った恰好で歩いたり、お辞儀をしたり、おしゃべりしているのを見たら、私はかえって噴き出すかも知れません。ちようど、今この国の陛下や貴族が私を笑ったように、私もまた、彼等を大いに笑ってやりたい気になるでしょう。また実際、王妃がよく私を掌に乗せて鏡の前に連れて行き、私たち両方の全身を一緒に映して見せる時など、われながら苦笑させられました。全くこの滑稽な比較には、私は何だか自分の実際の身体が、ずっと小さく縮まって来るような気がしました。

二十、侏儒との争い

私が一番癪にさわり、悩まされたのは、王妃のところの侏儒でした。彼は、国じゅうで一等背が低いので、「実際、三十フィート（約九・一呎）に足りないようでしたが」、自分よりさらに小さなものを見ると、急に高慢になって、例えば、私が王妃の次の間で貴族たちと話をしていると、彼はひどくふんぞり返って、私のテーブルのそばを通って行く

のです。そして、彼は、いつも私の小さいことを一言二言いわねば気がすまないのです。私は彼に向って、「……おい、兄弟、相撲を取ってみようか」と言つてやったり、口でなるとかやり込めて、そんなことで仇討かたきうちをしてやるのです。

ある日、食事の時、この意地悪小僧は、何か私の言つたことにかつと腹を立てると、王妃の椅子の上に跳び上り、私の腰のあたりをつかんで、まるで見境もなく、いきなりクリームの入った銀の鉢はちの中に放り込むと、そのまま一目散いちもくさんに逃げ出しました。私はまっ逆さまに落されましたが、あの時、もし泳げなかったら大変でした。丁度、グラムダルクリッチは、その時、部屋へやの向うの方に行つていましたし、王妃は驚きのあまり、私を助けることを忘れておられました。私がしばらく鉢の中で泳ぎまわっていると、乳母さんが駈けつけて救い出してくれましたが、その時はもうクリームをずいぶん飲んでいました。

私はさっそくベッドに寝かされました。まあ損害と言つたら、着物一着がすっかり駄目になったことぐらいでした。侏儒は酷く鞭で打たれ、罰として鉢の中のクリームを全部飲まされることになりました。そしてその後、侏儒は王妃から愛想をつかされ、間もなく他の貴婦人にやつてしまわれました、だから、それっきり二度と彼の顔を見なくて済んだので、私はほっとしました。

二一、蠅におびえて

私は臆病者だと言つて、王妃からよくからかわれました。そして、王妃は、お前の国の方は、みんなそんなに臆病なのとよくお聞きになります。それには、ちよつと訳があるのです。この国では、夏になると、蠅が一杯出ます。ところが、その蠅というのが、雲雀ほどの大きさですし、この厭いやつたらしい虫が食事中もぶんぶん耳許で唸り続けるので、私はちつとも落ち着けません。時によると、食物の上に止まって、汚い汗や卵を残して行きます。ところが、この国の人たちの目にはそれが一向に見えないのですが、私の目には実によく見えるのです。時々、蠅は、私の鼻や額ひたいに止まって痛く刺したり、厭いやな臭いを出したりします。

蠅の足の裏側には、ねばねばしたものがくっ付いているので、それで天井を逆さまに歩くことが出来るのだ、と、博物学者たちは言っていますが、私の目には、あのねばねばしたもので実にはつきり見えるのです。私は、この憎にくつたらしい動物から身を守るのに、大変閉口しました。顔などに止まられると、思わず跳び上ったものです。ところが、侏儒の奴はいつもこの蠅を五、六匹、ちよつと小学生がよくやるように手につかんで来ては、いきなり私の鼻の先に放すのです。これは、私を驚かして、王妃の御機嫌を取るつもりなのでした。私は飛んで来る奴をナイフで斬りつけるばかりでした。この私の腕前は、みんなから褒められました。

今でもよく覚えていますが、ある朝、グラムダルクリッチは、私を箱に入れたまま、窓口に載せておいたのです。これは天気の良い日なら、私を外気に当てるために、いつもそうしていました。そこで、私は箱の窓を一枚開けて、食卓について朝食のお菓子を食べていました。その匂いに誘われて二十四ばかりの地蜂が部屋の中に飛び込んで来ると、てんで大きな唸りを立てました。

中には、私のお菓子をつかんで、粉々にしてさらって行く奴もいるし、私の頭や顔の近

くにやって来て、ゴーゴーと唸^{うな}って脅^{おど}す奴もいます。しかし、私も剣を抜いて彼等を空中に斬^きりまくりました。四匹は打ち止めましたが、あとはみんな逃げ去ったので、私はすぐ窓を閉めました。この蜂^{はち}は鷓鴣^{しやこ}ぐらいの大きさでした。針を抜き取って見ると、一インチ半（約三・七センチ）もあって、縫針^{ぬいばね}のように鋭いものでした。私はそれを大事にしまつておいて、その後、いろいろの珍品と一緒にイギリスに持って帰りました。

二二、この国の様々な有様

ここで、私はこの国の有様^{ありさま}をちよつと簡単に説明しておきたいと思ひます。まず、この国は大きな半島になつていて、北東の方に高さ三十マイル（約四十km）の山脈があります。が、それらの山は頂上がみな火山になつていて、そこから向うへ越すことは出来ないのです。だから、その向うには、どんな人間がいるのか、はたして人が住んでいるのかどうか、それはどんな偉い学者にも分からないのです。国の三方は海で囲まれています。海が荒い港というものは一つもないのです。海岸には尖^{とが}つた岩が一面に立ち並んでいて、海が荒いので舟で乗り出す人はいません。この国の人は他の国と行き来することはまるでないので。大きな川には舟が一杯浮んでいて、魚類は沢山^{たくざん}います。この国の人たちは海の魚はめつたに取りません。というのは、海の魚はヨーロッパの魚と同じ大きさなので、取つてもあまり役に立たないからです。しかし、時々、鯨^{くじら}が巖^{いわ}にぶつつかつて死ぬことがあります。これは捕^{とら}えて、みんな喜んで食べています。

この国は非常に人口が多くて、五十一の大都市と百近くの町や村落があります。国王の宮殿の建物は不規則に並^{なら}んでいて、その周囲は七マイル（約十km）あります。

グラムダルクリッチと私には馬車が許されたので、これに乗つて、市内見物に出たり、店屋^{みせや}に行つたものです。私はいつも箱のまま連れて行かれるのですが、街の家々や人々がよく見えるように、彼女はたびたび私を取り出して手の上に乗せてくれました。ある日、たまたま馬車^{みせき}をある店先^{みせさき}に停^{とど}めると、それを見て乞食^{こじき}の群^{むれ}が、一斉に馬車の両側に集つて来ました。これは実にもの凄^{すご}い光景でした。胸におできの出来た女が一人いましたが、とても大きく脹^{ふく}れ上つていて、一面に孔^{あな}だらけなのです。その孔^{あな}というのが、私の身体など潜^{ひそ}り抜けることができそうな奴です。だが何よりたまらなかつたのは、彼等の着物を這^{ちぢ}いまわつている虱^{しらみ}でした。それが、丁度^{ちやうど}、あのヨーロッパの虱^{しらみ}を顕微鏡で見る時よりも、もっとはつきり肉眼で見えるのです。そして、あの豚^{ぶた}のように嗅^かぎまわっている鼻^{はな}など、こんなものを見るのは初めてでした。

いつも私を入れて歩いていた箱^{はこ}の他に、王妃^{おうひ}は、旅行用として、小さい箱を一つ作らせてくれました。今までののは、グラムダルクリッチの膝^{ひざ}には少し大き過ぎたし、馬車で持ち運ぶにも少しかさばり過ぎたからです。この旅行用の箱は、正方形で、三方の壁^{かべ}に一つずつ窓^{まど}があり、どの窓^{まど}にも外側から鉄の針金^{はりかね}の格子^{こうし}がはめてありました。一方の壁^{かべ}には窓^{まど}がなくて、二本の丈夫な留金^{とめかね}がついています。私が馬車で行く時には、乗り手がこれに革帶^{かわおび}を通して、しっかりと腰に結びつけるのです。

こんなふうにして、私は国王の行列に加わつたり、宮廷の貴婦人や大臣を訪問したりしました。というのも、両陛下のおかげで、私は急に大官たちの間で有名になつて来たからです。旅行中もし馬車に飽^あきると、召使^{めしつかい}が彼の前の蒲団^{ふとん}の上に箱を置いてくれます。そ

ここで、私は三つの窓から外の景色を眺めるのでした。この箱には、折り畳みの出来るベッドが一つ、ハンモックが一つ、椅子が二つ、テーブルが一つ、それぞれ床板にねじで留めて、馬車が揺れても動かないようにしてありました。私は長い間、航海に馴れていたので、馬車の揺れるのにも割と平気でした。

二三、林檎の実が霰のように

私は身体が小さいために、時々、滑稽な出来事に会いました。グラムダルクリツチは、よく私を箱に入れて庭に連れ出し、そして、時には箱から出して手の上に乗せてみたり、地面を歩かせてみたりしていました。ある時、それはまだあの侏儒が宮廷にいた頃のことですが、彼が庭までついてやって来たのです。丁度、彼と私のすぐ傍に盆栽の林檎の木がありました。この盆栽と侏儒を見比べていると、何だかおかしくなったので、私はちよつと彼を冷やかしてやりました。すると、この悪戯小僧は、私が林檎の木蔭を歩いている隙を狙って、頭の上の木を揺さぶり出しました。たちまち十余りの林檎が頭の上に落ちかかりましたが、これがまた酒樽ほどもある大きさであり、屈もうとするところへ、その一つが背中当たり、私は前へのめつてしまいました。しかし幸いに怪我はなかったのです。

ある日、グラムダルクリツチは、私を芝生の上を下ろして、一人遊ばしておき、自分は家庭教師と一緒に少し離れたところを歩いていました。すると、にわかにも猛烈な霰が降って来て、私はたちまち地面に叩きつけられました。霰はまるでテニスの球でも投げつけるように、全身に打ち込んで来るのです。しかしやつと四這いになって、レモンの木蔭に這い込み、私は顔を伏せていました。だが、頭のとっぺんから足の先まで傷だらけになって、十日ばかりは外出も出来なかったのです。

しかし、これは少しも驚くことではないのです。この国では、何もかも同じ割合に大きいのですから、霰粒一つでもヨーロッパの霰の千八百倍はあります。これは、私がわざわざ秤にかけて計ってみたのですから確かです。

二四、園丁の犬に啜えられて

しかし、もっと危険な事がこの庭園で起ったことがあります。私は一人で考え事をしたので、時々、一人にしてくれと頼むのですが、乳母さんは私を安全な所へ置いたつもりで、ほかの人たちと一緒に庭園のどこか別のところへ行っていました。丁度、その留守中のことでした。園丁(庭師)が飼っているスパニエル犬が、どうしたはずみか庭園に入り込んで来て、私の寝ている方へやって来たのです。私の匂いを嗅ぎつけると、たちまち飛んで来て、私を啜えると、尻尾を振りながらドンドン主人のところへ駆けつけて行って、そつと私を地面に置きました。運よくその犬は、よく仕込まれていたもので、齒の間に啜えられながらも、私は怪我一つせず、着物も破れなかったのです。

だが、園丁(庭師)はすっかり吃驚してしまい、私をそつと両手に抱き上げて、怪我はなかったかと尋ねました。彼は私をよく知っていて、前から私にはいろいろ親切にしてくれていた男です。けれども、私は驚きで息切れがしてしまっているもので、まだなかなか口が利けません。それから、二、三分して、やつと私が落ち着くと、彼は乳母のところへ私

を無事に届けてくれました。乳母は、先ほど私を残しておいた場所に戻ってみると、私がないし、いくら呼んでみても返事がないので、気狂のようになって探しまわっていたところでした。それで、今、園丁（庭師）を見つけると、「……そんな犬飼っておくのがいけないのです」と、ひどく彼を叱りつけました。

二五、小鳥に啄かれて

これは面白かったとも、癩に触ったとも言えることなのですが、私が一人で歩いていると、小鳥でさえ私を怖がらないのです。まるで人がいない時と同じように、私から一ヤード（約〇・九メートル）もないところを、平気で虫や餌を探して跳びまわっていました。ある時など、一羽の鶇が、実にずうずうしい鶇で、私がグラムダルクリツチからもらった菓子を、ひよいと私の手からさらって行ってしまいました。捕えてやろうとすると、相手はかえって私の方へ立ち向かって来て、指を啄こうとします。それで、私が指を引く込めると、今度は、平気な顔で、虫や蝸牛をあさり歩いているのでした。

だが、ある日、とうとう私は太い棍棒を持ち出して、一羽の紅雀めがけて力一杯投げつけると、うまく命中して、相手は伸びてしまいました。でさっそく、首の根っ子を捕まえ、乳母のところへ喜び勇んで持って行こうとしました。

ところが、鳥はちよつと目をまわして気絶していただけなので、じきに元気を取り戻すと、両方の翼で私の顔をポカポカ殴り出しました。爪で引つ搔かれないように、私は手をずっと前へ伸して捕まえていたのですが、よっぽどのことで、もう放してしまおうかと思っただけです。しかし、そこへ召使の一人が駆けつけて来て、鳥の首をねじ切っていました。そして、翌日、私はそれを料理してもらって食べました。

二六、水槽でボート漕ぎ遊び

王妃は、私から航海の話を知りたり、また私が陰気にしていると、いつもしきりに慰めてくださるのでしたが、ある時、私に帆やオールの使い方を知っているか、少し舟でも漕いでみたら、健康によくはあるまいか、とお尋ねになりました。

私は、普通の船員の仕事もしたことがあるので、帆でもオールでも使えますとお答えしました。だが、この国の船では、どうしたものか、それはちよつと分かりませんでした。一番小さい舟でも、私たちの国の第一流の軍艦ほどもあるので、私に漕げるような船は、この国の川に浮べられそうもありません。しかし王妃は、私がボートの設計をすれば、お抱えの指物師にそれを作らせ、私の乗りまわす場所もこさえて上げる、と言われました。

そこで、器用な指物師が私の指図に従って十日かかって、一艘の遊覧ボートを作り上げました。船具も全部揃っていて、ヨーロッパ人なら、八人は乗れそうなボートでした。それが出来ると、王妃は非常に喜び、そのボートを前掛に入れて、国王のところへ駆けつけました。国王は、まず試しに、私をそれに乗せて、水桶に水を一杯張って浮かせてみよ、と命じられました。しかし、その水桶では狭くて、うまく漕げませんでした。

ところが、王妃は、ちゃんと前から別の水槽を考えておられたのです。指物師に命じて、長さ三百フィート（約九十一メートル）、幅五十フィート（約十五メートル）、深さ八フィート（約二

・四郎)の、木の箱を作らせ、水の漏らないようにうまく目張りして、宮殿の部屋の壁際に置いてありました。水は、二人の召使が、半時間もかればすぐ一杯にすることが出来ました。そして、その箱の底には栓があつて、水が古くなると抜けるようになっていたのです。

*

*

私は、その箱の中を漕ぎまわって自分の気晴しをやり、王妃や女官たちを面白がらせました。彼女たちは、私の船員姿を大変喜びました。それに、時々、帆を上げると、女官たちが扇で風を送ってくれます。私はただ舵を取つていればいいわけです。彼女等が扇ぐのに疲れると、今度は侍童たちが口で帆を吹くのです。すると、私はおも舵を引いたり、とり舵を引いたりして、思うままに乗りまわすのです。それが済むと、グラムダルクリツチは、いつも私のボートを自分の部屋に持って帰り、釘に掛けて乾かすのです。

この水箱は、三日おきに水を替えることになっていましたが、ある時、水を替える役目の召使がうっかりしていて、一匹の大蛙を手桶から一緒に流し込んでしまいました。初め、蛙はじっと隠れていたのですが、私がボートに乗り込むと、うまい休み場所が出来たとばかりに、ボートの方に這い上つて来ました。船はひどく一方へ傾くし、私はひっくり返らないようにその反対側に寄つて、うんと力を入れていなければなりません。

いよいよボートの中に入り込んで来ると、いきなりボートの半分の高さをひよいと跳び越し、それから私の頭の上を前や後へしきりに跳び越えるのです。そしてその度に、蛙はあの厭な粘液を私の顔や着物に塗りつけるのでした。その顔付きの大きなことと言つたら、こんな醜い動物が世の中にいたかと驚かされます。しかし、私がオールの本を取つて、しばらく打ちのめしてやっていると、蛙はどうとうボートから跳び出してしまいました。

二七、猿にかかわれる

私がこの国で一番危ない目に会つたのは、宮廷の役人の一人が飼つていた猿が、私にいたずらした時のことです。ある日、グラムダルクリツチは、用足しに出かけて行くので、私の箱を自分の部屋に入れて、鍵を下ろしておきました。大変暑い日でしたが、部屋の窓は開け放しになっており、私の住まっている箱の戸口も窓も開け放しになっていました。私が机に向つて静かにものを考えていると、何か窓から跳び込んで、部屋の中をあちこち歩きまわるような音がするので、私はひどく驚きましたが、じっと椅子に坐つたまま見えていました。

今、部屋に入つて来た猿は、いい気になつて、跳ね回つていたのでした。そのうちに、とうとう猿は私の箱のところへやつて来ました。彼は、この箱がよほど気に入つたのか、さも面白く珍しそうに戸口や窓から、いちいち覗き込むのでした。

私は箱の一番奥の隅へ逃げ込んでいましたが、猿が四方から覗き込むので怖くてたまりません。すつかり慌てていたので、ベッドの下に隠れることにも気がつかなくなつたのです。猿は、覗いたり歯を向き出したり、ムニヤムニヤしゃべつたりしていましたが、とうとう私の姿を見つけると、丁度、それは猫が鼠にするように戸口から片手を伸して来ました。私はうまく避け回つていたのですが、とうとう上衣の垂れを掴まれて、引きずり出さ

れてしまったのです。

彼は、私を右手で抱き上げると、一度、あの乳母が子供に乳房をふくませるような恰好で私を抱えました。私が足掻けば足掻くほど猿は強く締め付けるので、これは、じつとしていた方がいいと思いました。一方の手で、猿は何度も優しく私の顔を撫でてくれました。てっきり私を同じ猿の子だと感違いしてるのでしょうか。こうして、彼がすっかりいい気持ちになっているところへ、突然、誰か部屋を叩く音がしました。すると、彼は急いで窓の方へ駆けつけ、二本足でとつと歩きながら、一本の手では私を抱いたまま樋を伝わって、とうとう隣りの大屋根までよじ登ってしまいました。

猿が私を連れて行くのを見ると、グラムダルクリツチは「キヤッ」と叫びました。彼女は気狂のようになってしまいました。それから間もなく、宮廷は大騒ぎになったのです。召使は梯子を取りに駆け出し、一方、猿は屋根の上に腰を下ろすと、まるで赤ん坊のように片手に私を抱いて、顎の袋から何か吐き出して、それを私の口に押し込もうとします。

そして、今、屋根の下では数百人の人々がこの光景を見上げているのです。私が食べまいとすると、猿は母親が子をあやすように私を軽く叩くのです。それを見て、下の群衆はみんな笑い出しました。実際、これは誰が見ても馬鹿馬鹿しい光景だったでしょう。なかには猿を追うつもりで石を投げるものもいましたが、これはすぐ禁じられました。

やがて、梯子をかけて数人の男が登って来ました。猿はそれを見て、いよいよ囲まれたと分かると、三本足では走れないので、今度は私を瓦の上に残しておいて、一人でさつと逃げてしまいました。私は地上三百ヤード（約二七四メートル）の瓦の上に止まったまま、今にも風に吹き飛ばされるか、目が眩んで落ちてしまうか、まるで生きた心地はしませんでした。が、そのうちに召使の一人が私をズボンのポケットに入れて、無事に下まで下ろしてくれました。

二八、国王に猿のことを聞かれて

私は、あの猿が私の咽喉に無理に押し込んだ何か汚い食物のため、息がつまりそうでした。しかし、私の乳母が小さい針で一つ一つそれをほじくり出してくれたので、やっと楽になりました。だが、酷く身体が弱ってしまい、あの動物に抱き締められていたため、両脇が痛くてたまりません。私はそのため二週間ばかり病床につきました。王、王妃、その他、宮廷の人たちが、毎日見舞いに来てくれました。猿は殺され、そして今後こんな動物を宮廷で飼ってはならないことになりました。

病気が治ると、私は王にお礼を申し上げに行きました。王は嬉しそうに今度のことをさんざおからかいになるのです。猿に抱かれていた間どんな気持ちでしたか、あんな食物の味はどうだったか、どんなふうにして食べさすのか、などお尋ねになります。そして、あんな場合、ヨーロッパではどうするのか、と言われます。そこで、私は、「……ヨーロッパには猿などいません。いてもそれは物好きが遠方から捕まえて来たもので、そんなものは実に可愛らしい奴です。そんなのなら十二匹ぐらい束になってやって来ても、私は負けません。なに、この間のあの大きな奴だって、あれが私の部屋に片手を差し込んだ時に、あの時も私は平気だったのです。私がほんとに怖いと思ったら、この短剣で叩きつけます。そうすれば、相手に傷ぐらい負わせて、手を引込めさせたでしょう」と、私はきつぱり

申し上げました。

けれども、私の言うことにみんなはどっと噴き出してしまいました。これで私はつくづく考えました。初めから問題にならないほど差のある連中の中で、いくら自分を立派に見せようとしても駄目だということが分かりました。

二九、国王と色々な話をする

国王は、非常に音楽が好きで、だから、よく宮廷では音楽会がありました。私も、時々、連れて行かれて、テーブルの上に箱を置いてもらって聞いたものですが、なにしろ大変な音で曲も何も分からないのです。軍隊の太鼓と喇叭をみんな持って来て耳許で鳴らすよりもっと凄い騒がしさでした。ですから、私はいつも一番遠いところに箱を置いてもらい、扉も窓もすっかり閉めて、カーテンまで下ろします。そうすると、それでまずどうにか聞けるのです。

国王は、また非常に賢い方でしたが、よく私を箱のまま連れて来て、陛下のテーブルの上に置かれます。私は椅子を一つ持って箱から出て来ると、陛下の近くの箆笥の上に坐ります。そこで、私の顔と陛下の顔が向い合いになります。こんなふうにして、私たちは何度も話し合いましたが、ある日、私は思いきって、こんなことを申し上げました。「……一体、陛下がヨーロッパやその他のことを軽蔑なさるのは、どうも賢い陛下に似合わぬことのようにです。智慧は何も身体の大きさによるものではありません。いや、あべこべの場合だつてあるようです。蜜蜂とか蟻とかは、ほかのもっと大きな動物たちよりも遙かに勤勉で、器用で利口だと言われています。私なども、陛下は取るに足りない人間だとお考えでしょうが、これでもいつか素晴らしいお役に立つかも知れません」と。

陛下は、私の話を一心に聞いておられました。前よりよほど私をよく分かってくださるようでした。そして、「……それでは、一つ、イギリスの政治について出来るだけ正確に話してもらいたい」と仰せになりました。

そこで、私はわが祖国の議会のこと、裁判所のこと、人口について、宗教について、或いは歴史のことまで、いろいろとお話し申し上げることにになりました。私は王に何回もお目にかかって、毎回数時間、この話をお聞かせしたのですが、王はいつも非常に熱心に聞いてくださいました。そして、ノートには、一つ一つ後で質問しようと思われるところや、私の話の要点を書き込んでおられました。

三十、国王に火薬の話をする……

ある日、私は王の御機嫌を取るつもりで、こんなことを申し上げました。「……実は私は素晴らしいことを知っています。というのは、今から三、四百年前に、ある粉が発明されましたが、その製造法を私はよく知っています。まず、この粉というのは、それを集めておいて、これにほんのちよつぴりでも火を付けてやると、たとえ山ほど積んである物でも、たちまち火になり、雷よりもっと大きな音を立てて、何もかも空へ高く吹き飛ばしてしまいます。

で、もし、この粉を真鍮か鉄の筒にうまく詰めてやると、鉄や鉛の玉を恐ろしい力と

速さで遠くへ飛ばすことが出来るのです。こういうふうにして、大きな奴を打ち出すと、一度に軍隊を全滅させることも、鉄壁を破ったり、船を沈めてしまうことも出来ます。また、この粉を大きな鉄の球に詰めて、機械仕掛で敵に向って放つと、舗道は砕け、家は崩れ、かけらは八方に飛び散って、その傍に近づくものは、誰でも脳味噌を叩き出されます。

私は、この粉をどういうふうにして作ったらいいか、よく心得ているのです。で、職人たちを指図して、この国で使えるぐらいの大きさにそれを作らせることも出来ます。一番大きいので長さ百フィート（約三十メートル）あればいいでしょうが、こうした奴を二、三十本打ち出すと、この国の一番丈夫な城壁でも、二、三時間で打ち壊せます。もし首都が陛下の命令に背くような場合は、この粉で首都を全滅させることだって出来ます。とにかく、私は陛下の御恩に報いたいと思っているので、こんなことを申し上げる次第です」と、私がこんなことを申し上げると、国王はすっかり仰天してしまわれたようです。そして呆れ返った顔付きで、こう仰せになりました。「……よくもよくもお前のようなちっぽけな虫けらのような動物が、そんな鬼、畜生にも等しい考えを抱けるものだ。それにそんなむごたらしい有様を見ても、お前はまるで平気で何ともない顔をしていられるのか。お前はその人殺し機械をさも自慢げに話すが、そんな機械の発明こそは、人類の敵か、悪魔の仲間やることに違いない。そんな穢らわしい奴の秘密は、たとえこの王国の半分をなくしても、余は知りたくないのだ。だから、お前もし生命が惜しければ、二度ともうそんなことを申すな」と、王御自身は、科学に興味を持たれ、自然に関する発見など非常に喜ばれたのですが、このことばかりは、頑として許されないのでした。

三一、驚にさらわれて

私は、いつかは自由の身になりたいという気持をいつも持っていました。しかし、どうしたら自由になれるのか、それはまるで分かりませんでした。私に出来そうな工夫はてんで見つからないのです。この国の海岸に吹きつけられた船は、後にも前にも、私の乗って来た船の他に誰も見たことはありません。しかし国王は、もし万一またほかの船が現れたら、すぐ海岸へ引っ張って来て、船長や乗客を手押車に乗せて連れて来るようにと、言い渡されていました。

国王は、私に私と同じ大きさの女を妻にさせて、私たちの子供を殖やしてみたい、と熱心に望まれています。しかし私は、馴れたカナリアのように籠の中で飼われたり、国じゅうの貴族たちの慰みに売られるために子供をつくるくらいなら、そんな恥かしい目に会うよりか、死んだ方がましだと思っていました。それに、国に残してきた家庭のことも忘れることが出来ませんでした。もう一度、気楽に話の出来る人間の中に帰り、街や野を歩く時も、蛙や犬の子みたいに踏みつぶされる心配なしに歩きたかったです。しかし私は、たまたま思いがけないことから、全くうまくこの国を離れることが出来たのです。それを次にお話ししたいと思います。

それは、私がこの国へ来て二年が過ぎ、丁度、三年目の初め頃のことでした。グラムダルクリッチと私は、国王と王妃のお供をして、南の海岸の方へ行きました。私はいつものように旅行用の箱に入れられていました。ハンモックを天井の四隅から絹糸で吊し、旅行中はよくこれで眠ることにしました。

いよいよ海岸に着くと、国王はその海岸からあまり遠くないところにある離宮で数日間、お過しになることになりました。グラムダルクリッチも私も、へとへとに疲れていました。私も少し風邪を引いていましたが、グラムダルクリッチは非常に加減が悪いので、部屋で休んでいなければならなかったのです。私は何とかして海へ行ってみたいと思いました。海へ行けば、この国から逃げ出す工夫が見つかるかも知れません。そこで、私は身体工合の悪いことを訴えて、ひとつ海岸へ行つていい空気が吸いたいのですが、行かせてくださいと頼みました。そして、私と一緒に侍童がついて行つてくれることになりました。しかし、グラムダルクリッチは、私が海へ行くのを喜びませんでした。別れる時、彼女は何か虫が知らせるのか、しきりに涙を流していました。

侍童は、私を箱に入れて、宮殿から半時間ほどの道を歩いて、海岸の岩のところへ来ました。私は頼んで下に下ろしてもらうと、窓を一枚開けて、海の方をじっと眺めていました。そのうち、少し気分が悪くなったので、ハンモックの中で昼寝してみたい、と侍童に言いました。すると、彼は寒気の入らないように窓を閉めてくれました。私はハンモックの中ですぐ眠りに陥りました。

ところで、侍童は私が眠っている間に、まさか危険も起るまいと思って、岩の間へ鳥の卵でも探しに出かけたらしいのです。というのは私が眠る前から、彼は卵を探しまわっていたし、岩の割目から一つ二つ拾い上げていた姿を、私は窓から見ていたからです。それはともかくとして、私がふと箱の中で目を覚まして見ると、驚きました。箱の上についている鉄の環を誰かがぐいぐい引つ張つて見ると、驚きました。箱の上につき上げられ、猛烈な速さで前へ走つて行くような気がしました。初め、私は、ハンモックがひどく揺れて落つちそうになりましたが、その後はずっと静かになりました。二、三度声を張り上げて叫んでみましたが、誰も答えてくれません。窓の方へ目をやってみると、目に映るものは雲と空ばかり、そして私のすぐ頭の上で何か羽ばたきのような物音が聞えるのでした。

三二、海に墮ちてしまふ

で、私は自分がどんなことになっているのか分かりかけました。今、一羽の鷺が私の箱を啜えているのですが、これは、丁度、あの亀の子を捕まえた時するように、やがて箱を岩の上に落して割り、私の身体をほじくり出して食うつもりなのでしょう。というのは、鷺はよく臭いを嗅ぎつける鳥ですから、たとえ獲物が上手に隠れていても、すぐ見つけ出すので、私が箱の中にいることもちゃんともう知つてに違ひありません。

しばらくして、羽音が烈しくなつたかと思うと、箱はまるで風の中の看板のように酷く揺れ出しました。と今度は何かズシンと鷺にぶつつかる音がして、突然、私はまっ逆さまに落ちて行くのを感じました。恐ろしい速さでほとんど息も出来ないくらいでした。それから一分ぐらい経つと、私の耳にはゴーゴとナイヤガラのような音がして、何か凄なものに箱がぶつかつているように思えました。ふと、落ちて行くのが止んだかと思うと、あたりは真暗になりました。

それから一分もすると、今度は箱がどんどん上にあがつて行き、窓の方から光が見え出しました。それで海の中へ落ちたことが初めて分かりました。箱は私の身体や家具などの重

みで、水の中に浸りながら浮いているのでした。

私は、その時、こう思いました。これは、たぶん箱をさらって逃げた鷺が、仲間の二、三羽に追っかけられたのでしよう。そして、お互に箱の獲物を争い合っているうちに、思わず鷺は箱を放したのでしよう。この箱の底には鉄が張つてあるため、海に落ちても壊れなかつたのです。部屋はびったり閉まつていたので、水にも濡れなかつたのです。そこで、私はハンモックから降りると、まず天井の引窓を開けて空気を入れ替えました。

私の箱は今にもバラバラになるかも知れないのでした。大きな波一つで箱はすぐひっくり返るかも知れないし、窓ガラス一つ壊れただけで駄目になるかも知れない。こんな危うい状態で、私の箱は四時間ばかり漂っていました。ところが、この箱の窓のない側に、その時、ふと何か軋むような音が聞えました。それから間もなく、何か私の箱が海の上を引つ張られているような気がしました。時々、グイと引かれたかと思うと、窓の上あたりまで波が見えて、部屋の中が暗くなります。これは助かるのかしらと、ふと私は希望が湧いて来しました。そこで、私は出来るだけ口を窓に近づけて大声で助けを叫んでみしました。それからステッキの先にハンカチを結んで、穴から出して振ってみました。もし船でも側にいるのなら、この箱の中に私がいることを知ってもらいたかつたからです。

三三、船に助けられる

しかし何の手応えもなかったのでした。ただ、部屋がドンドン動いて行っていることだけはつきり分かります。それから一時間ばかりして、突然、私の箱に何か固いものが突き当たりました。と、箱の屋根の上に綱を通すような物音が聞えてきました。それから、そろそろ箱は引き上げられるようでした。私はステッキの先のハンカチを振り、声を限りに叫んでみました。すると、それに答えて大きな叫び声が二、三度繰り返されて来ました。やがて頭の上で足音がしたかと思うと、誰か穴の口から大声で、「……誰かいるなら返事をしろ」と怒鳴りました。相手は英語で言ってくれています。「……私はイギリス人です。今ここで酷い目に会っているのです。何とかうまく助け出してください」と、私は一生懸命、頼みました。「……もう大丈夫だ。箱は本船にくくりつけたし、今すぐ大工が屋根に穴を開けて出してやるから」と外では言っています。「……そんなことしなくてもいいのですよ。それより早く誰かチョイとこの箱を指でつまみ上げて、船長室へ持って行ってください」と、私がこう答えると、船員たちは私を気狂だと思つたらしく、大笑いしていました。大工がやつて来て、箱に穴を開け、そこから私は救い出され、本船に移されました。船員たちはみな驚いて、いろんなことを尋ねますが、私はもう答える気もしないのです。こんな大勢の小人を見て、私の方も驚いてしまったのです。なにしろ長い間、あの大きな人間ばかり見続けて来たので、船長たちが小人のように思えるのです。私が今にも気絶しそうな顔をしているので、船長は気つけ薬を飲ませてくれました。それから船長室に私を連れて行き、「……まあ一寝入りしなさんですな」と言ってくれました。

私は、数時間眠つて、すっかり元氣を取り戻しました。起きたのは夜の八時頃でした。船長は、私が長い間食事をしていないだろうと思つて、すぐ晩食を言いつけてくれました。私がもう気狂じみた目つきをしたり、変なことをしゃべらなくなつたのを見ると、彼は大変親切にしてくれました。一体、どこへ行つたのか、またどうしてあんな大きな箱に入れ

られて流されたのか、一つ話してくれと言いました。

* *
船長の話では、正午頃、望遠鏡を覗いていると、あの箱が眼に映ったので、最初は船だと思つたそうです。それからボートを出して近づいてみると、家が泳いでいるというので、みんなびっくりしました。本船の方へ引つ張り上げようとしていると、丁度、その時、ハンカチの付いた棒を穴から突き出す者があるので、これはきっと誰か不幸な人間が閉じ込められているに違いないと思つたのだそうです。「……それでは一番はじめ私を見つけようか」と私は尋ねてみました。「……あ、あの時、鷺が三羽北を指して飛んでいました。でも別に普通の鷺と変つたところはなかつたようです」と、一人の船員が答えました。

だが、それは非常に高く飛んでいたの、小さく見えたのでしよう。どうも私の尋ねたり言つたりすることは、みなに合点がいかないようでした。私はイギリスを出発した時から、今までのことをありのまま話して聞かせました。それから、あの国で集めた珍しい品を見せてやりました。王の髻で作つた櫛や王妃の親指の爪の切り屑に毛を植えて作つた櫛、また、一フィート（約三十センチ）もある縫針や一インチ（約二・五センチ）半の地蜂の針、さらに、王妃の金の指輪やその他、いろいろのものを取り出して見せてやりました。

三四、イギリスへと帰る

この船は、トンキンに行つて、いまイギリスへ帰る途中なのでした。航海は無事に進み、一七〇六年六月三日に故国の港に戻りました。そこで、私は船長に別れを告げると、家の方へ向いました。途々、小さな家や木また家畜や人間たちを見ると、何かリリパットへでも来たような気がしました。行き会う人ごとに何だか踏みつけそうな気がして、私は、「……退け！ 退け」と怒鳴りつけました。

私の家へ帰ってみると、召使の一人が戸を開けてくれましたが、私は何だか頭をぶつかけそうな気がして、身体を屈めて入りました。妻が飛んでやつて来ましたが、私は彼女の膝より低く屈んでしまいました。娘もそばへやつて来ましたが、なにしろ長い間、大きなものばかり見慣れた眼には、ヒョイと片手で娘をつかんで持ち上げたいような気がしました。召使や友人たちも、みんな私には小人のように思えるのでした。こういう有様ですから、初め、人々は、私を気が違ったものと思ひました。しかし間もなく、私もここに馴れて、家族とも友人ともお互に分かり合うことが出来ました。（第二部・完）

*

*

第三部、飛島とびしま（ラピユータ）、バルニバービ、ラグナグ、
グラブダブドリツプおよび日本への渡航記

ガリバー旅行記

第三部、飛鳥（ラピユータ）その他日本への渡航記

一、再び、航海に出る

私が家に戻ると間もなく、ある日、『ホーププウェル号』の船長が訪ねて来ました。それからたびたび彼はやって来るようになりましたが、いろいろ話し合っているうちに、私はまた、船に乗ってみたくなったのです。これまで私はずいぶん苦しい目にも会いましたが、それでも、まだ海へ出て外国を見たいという気持ちが強かったのです。

そこで、私は一七〇六年八月五日に出帆し、翌年の四月十一日にフォート・セン・ジョージ（インドの港）に着きました。それから、トンキンに行つたのですが、ここで、私は船長と別れて、別の船に乗り、十四人の船員をつれて出帆しました。

出帆して三日も経たないうちに、暴風雨に遭い、船は北へ東へと流されて行きました。その後、天氣が良くなつたかと思うと、私たちの船は、二隻の海賊船に見つかり、たちまち追いつかれてしまったのでした。

海賊どもは、両方の船から一斉に乗り込んで来ました。海賊どもは、恐ろしい剣幕で手下の先頭に立つて入って来ましたが、私たちが大人しくひれ伏しているのを見ると、丈夫な縄で一人残らず縛り上げ、番人を一人付けておいて、そのまま彼等は船中を探しに行きました。海賊の中に一人のオランダ人がいましたが、私たちが今に海の中に放り込んでやるぞと言っていました。海賊船の一隻の方は、日本人が船長でした。その男は私のところへやって来て、いろんな質問をするので、私は一つ一つ丁寧に答えました。すると彼は、命だけは助けてやると言いました。やがて、私は小さな舟に一人乗せられて、八日分の食物を与えられ、そして、どこへでも一人で勝手に行くがいと海へ放されました。

海賊船を離れて、しばらく行くと、私は望遠鏡で島影を五つ六つ見つけました。そこでとにかく一番近い島へ漕ぎ着けるつもりで帆を張りました。すると三時間ばかりで、その島へ着きました。見ると、海岸は岩だらけなのです。だが、鳥の卵がたくさん見つかったので、火を起こして枯草を燃やし、卵を焼いて食べました。その晩は、岩の陰に木の葉を敷いて寝ましたが、よく眠れました。

二、新たな島に上陸する

翌日は、次の島へ渡りました。それからまた、次から次へと渡って行き、そして、五日目に、私はまだ見残していた島の方へと向いました。

その島は、思ったより遠く、渡るのに五時間もかかりました。私はぐるりと島を一まわりして見て、上陸するのに都合のいい所を見つけました。上つてみると、あたりは岩だらけで、ただ、ところどころに雑草や香のいい菓草などが生えていました。私は食物を取り出して、腹拵えをすると、残りは洞穴の中にしまつて置きました。それから岩の上で卵を拾ったり、乾いた枯草を集めたりしました。私は明日は一つこれに火を付けて、卵を焼いてやろうと思いました。その夜は、食物を仕舞い込んだ洞穴に入って、拾い集めた枯草

の上で寝ました。けれども、私は心配でなかなか眠れなかったのです。

こんな無人島で、どうして生きて行けるでしょう。いずれ私はみじめな死に方をしなければならぬのです。こんなことを考えていると、私はぐったりしてしまつて、立ち上る元氣も出なかつたのです。それでも、氣を取り直して、やつと洞穴から這い出しましたが、その時には、もう日が高く昇っていました。私は、しばらく岩の間を歩きまわりました。

空には雲一つなく、太陽がギラギラ照りつけるので、眩しくて顔を背けていました。その時でした。突然、あたりが暗くなったのです。しかも、これは太陽が雲に遮られた時の暗さとは違つていました。振り返つて見ると、これはまたどうしたことでしょう。今、私と太陽との間に、何か途方もなく大きなものが、ずんずん島の方へ向つて進んで来るのです。高さは二マイル(約三・二km)ばかりありそうでした。そして、六、七分間というものは、すっかり太陽を隠してしまいました。

三、空を飛ぶ島と遭遇

やがて、その物は私の真上に来ましたが、見ると、どうもそれは固い塊りのようで、底の方が平たくなつて居るのです。丁度その時、私は二百ヤード(約一八二呎)ばかりの高い丘の上に立つていたのですが、やがて、その大きな物はずんずん下に下がつて来ました。そして、私から一マイル(約一・六km)とは離れていない眼の前に見えて来たのです。私は、さっそく望遠鏡を取り出して眺めました。その物体の斜面には、たくさんの人間が上下に動きまわつて居るのです。その姿がはつきりと見えるのです。ただ何をして居るのかは分かりませんでした。

私は、今、空に浮んで居るその島が、どちら側へ動き出すかとじつと眺めていました。が、間もなく、島はこちらの方へ近づいて来たのです。見ると、その側面には、通路が何段にも分れていて、ところどころに階段があつて、上り下り出来るようになっていました。一番下の通路では、数人の男が長い釣竿で魚釣をして居るし、それをそばから眺めている男もいます。

私は、その島に向つて、帽子とハンカチを振りましたが、いよいよ近づいて来たので、声を限りに叫んでみました。そのうちに、向うでは私の一番よく見える側へと人々がぞろぞろ集つて来ました。そして、彼等は今しきりに私の方を指さしながら、互に顔を見合せて居るのです。と、四、五人の男が階段を駆け上つて行つたかと思うと、そのまま見えなくなりしました。これはきつと誰か偉い人のところへ私のことを告げに行つたのだろう、と私は考えました。そして、それはその通りでした。

人の数が次第に増えて来ました。それから半時間ばかりすると、島は上の方へ上つて行き、一番下の道路が、私の立つて居る丘から百ヤード(約九十一呎)ぐらゐのところを真正面に見えて来ました。私は一生懸命に救いを求めるように話しかけてみましたが、何とも答えてくれません。私のすぐ前に立つて居る人々は、その身なりで偉い方らしく思われました。私の方を見ては、何かしきりに相談して居るようでしたが、ついに、その一人が上品な言葉で何か呼びかけました。私もさっそく返事しました。が、どちらも言葉はまるで通じません。ただ、私がひどく困つて居ることだけは、身振りで分かつてくれました。

相手は、私に岩から降りて海岸の方へ行け、と合図しました。で、私はその通りにしま

した。すると、その飛ぶ鳥は、丁度、私の頭の上にその縁が近づいて、一番下の通路から一本の鎖がするすると降りて来ました。鎖の先には腰掛が一つ付いていて、私がそれに乗ると、鎖はそのまま巻き上げられて行きました。

四、奇妙な人たちの様子

私とその島へ降りると、すぐ大勢の人々が私を取り囲みました。見ると、一番前に立っているのが、どうも上流の人々のようでした。彼等は私を眺めて、ひどく驚いている様子でしたが、私の方もすっかり驚いてしまったのです。なにしろ、その恰好も服装も容貌も、こんな奇妙な人間を私はまだ見たことがなかったからです。

彼等の頭は、みんな左か右かどちらかへ傾いています。目は、片方は内側へ向き、もう一方は真上を向いているのです。上衣は、太陽、月、星などの模様、提琴(フィドル)、横笛(フルート)、豎琴(ハープ)、喇叭(トランペット)、六弦琴(ギター)、その他、いろんな珍しい楽器の模様を交えています。それから、召使の服装をした男たちは、短い棒の先に膀胱を膨らませたものをつけて持ち歩いています。そんな男たちも大分いました。これは後で知ったのですが、この膀胱の中には、乾いた豆と小石が少しばかり入っているのです。

ところで、彼等は、この膀胱で傍に立っている男の口や耳を叩きます。これは、この国の人間は、いつも何か深い考え事に熱中しているので、何か外からついついてやらねば、ものも言えないし、他人の話を聞くことも出来ないからです。そこで、お金持は、叩き役を一人、召使として雇っておき、外へ出る時には、必ずついて行きます。召使の仕事というのは、この膀胱で主人やお客の耳や口を静かに代る叩くことなのです。また、この叩き役は主人に付き添って歩き、時々、その目を軽く叩いてやります。というのは、主人は考え事に夢中になっていきますから、うっかりして崖から落ちたり、溝にはまり込んで死にることがあるかも知れないからです。

五、国王に会う

ところで、私はこの国の人々に案内されて、階段を上り、島の上の宮殿へ連れて行かれたのですが、その時、私は、みんなが何をしているのかさっぱり分かりませんでした。階段を上って行く途中でも、彼等は考え事に熱中してぼんやりしてしまふのです。その度に、叩き役が彼等を突いて気をはつきりさせてやりました。

私たちは、宮殿に入って、国王の間に通されました。見ると、国王陛下の左右には、高位の人たちがずらりと並んでいます。王の前にはテーブルが一つあって、その上には、地球儀やその他、種々様々の数学の器械が一杯並べてあります。なにしろ今、大勢の人がどこかどかどか入ったので騒がしかったはずですが、陛下は一向、私たちが来たことに気がつかれません。陛下は、今、ある問題を一心に考えておられる最中なのです。私たちは、陛下がその問題をお解きになるまで、一時間ぐらい待っていました。

陛下の両側には、叩き棒を持った侍童が、一人ずつ付いています。陛下の考え事が終ると、一人は口許を、一人は右の耳を、それぞれ軽く叩きました。

すると、陛下は、まるで急に目が覚めた人のようにハツとなって、私たちの方を振り向かれました。それでやっと私たちの来たことを気づかれたようです。陛下が、何か一言二言言われたかと思うと、叩き棒を持った若者が、私の傍へやって来て、静かに私の耳を叩き始めました。私は手真似でそんなものは要らないということを伝えてやりました。

陛下は、しきりに何か私に質問されているらしいのでした。で、私の方もいろんな国の言葉で答えてみました。けれども、向うの言うことも分からなければ、こちらの言うこともまるで通じません。

それから、私は陛下の命令で宮殿の一室に案内され、召使が二人、私に付き添いました。やがて、食事が運ばれて来ました。そして、四人の貴族たちが、私と一緒にテーブルに着きました。食事中、私はいろんな品物を指さして、何という名前なのか聞いてみました。すると、貴族たちは、叩き役の助けを借りて喜んで答えてくれました。私は、間もなく、パンでも、飲物でも、欲しいものは何でも言えるようになりました。

食事が済むと、貴族たちは帰りました。そして今度は、陛下の命令で来たという男が、叩き役を連れて入って来ました。彼は、ペンやインクまた紙それに三、四冊の書物を持って来て、言葉を教えに来たのだと手真似で言い、私たちは、四時間一緒に勉強しました。私は沢山の言葉を縦に書き、それに訳を書いて行きました。短い文章も少し覚ええました。

それには、まず先生が、召使の一人に、「……何々を持って来い」、「……あつちを向け」、「……お辞儀」、「……坐れ、立て」というふうに命令をします。すると私は、その文章を書き付けるのでした。それから今度は本を開いて、日や月や星や、その他、いろんな平面図や立体図の名を教えてくれました。先生は、また、楽器の名前と音楽の言葉いろいろ教えてくれました。こんなふうにして二、三日すると、私は大体彼等の言葉がどんなものであるか分かって来たのです。この島は『ラピュータ』と言います。私はそれを『飛島』『浮島』などと訳しておきました。

私の服がみすばらしいというので、私の世話人が、翌朝、洋服屋を呼んで来ました。ところが、その洋服屋のやり方が、ヨーロッパの寸法の取り方とは、まるで違うのでした。彼は定規とかコンパスで私の身体を測り、いろんな数学上の計算を紙の上に書き留めました。そして、服は、六日目に出来上りましたが、その恰好はてんでないものでした。何でも計算の数字を間違えたのだそうです。しかし、そんな間違いはいつもあることで、誰も気にするものはないというので、私も少し安心しました。

私は、病気で五、六日引き籠もっていましたが、その間に、だいぶこの国の言葉を勉強しました。それで、その次に宮廷へ行った時には、国王の言うことも分かれば、いくらか返事をすることも出来ました。

六、首都（ラガード）へと向かう

陛下は、この島を北東々に進ませて、ラガード（下の大地にある、この国の首都）の上に乗って行くようお命じになりました。ラガードは約九十リーグほど離れていたのですが、この旅行には四日半かかりました。旅行中、この島が空中を進行しているような気配はちつとも感じられないのでした。三日目の朝、十一時頃、国王、自ら貴族、廷臣、役人どもを従えて、それぞれ楽器の調子を整えると、それから三時間、休みなしに演奏されました。

騒々しくて、私はもう耳がつんぼになりそうでした。

首都ラガードへ行く途中、陛下は、ところどころの町や村の上に、この島を停めるようにお命じになりました。これは、それぞれ人民の訴え事をお聞きになるためでした。小さい鍾のついた紐が、この島から下ろされると、下にいる人民は、それに手紙をくり付けます。そして、紐はすぐまた吊り上げられます。丁度、子供が凧の糸の端に紙切れを結び付けるようなものです。時には、下から持って来る酒や食料が、滑車でこの島へ引き上げられることもありました。

七、この国の特徴は……

この国の人たちは、家の作り方が非常に下手です。壁はゆがみ、どの室も直角になっていないのです。彼等は、定規や鉛筆でする紙の上の仕事は大変もつとらしいのですが、実地にやらしてみると、この国の人間ぐらい下手で不器用な人間はいません。彼等は数学と音楽には非常に熱心ですが、そのほかの問題になると、これくらいもの分かりの悪い、でたらめな人間はありません。理窟を言わせれば、さっぱり筋が通らないし、むやみに反対ばかりします。彼等は頭も心も数学と音楽しか分からないのです。

それに、この国の人たちは、いつも何か心配していて、そのために一分間も心は安らかでないのですが、他の人間から見たら、それは何でもないことを心配しているのです。——その心配の種というのは、天に何か変わったことが起きはすまいかということ。例えば、地球は絶えず太陽に向かって近づいているのだから、今に吸い込まれるか飲み込まれてしまふだろうか、あるいは、太陽の表面にはガスがだんだん固まって来て、今に日が射さなくなる時が来るだろうか、この前の彗星の時は、地球は星の尻尾になでられないで助かったが、今度、三十一年後に彗星が現われると、たぶん、われわれはいよいよ滅ぼされるだろうと言うのです。そうかと思えば、太陽は毎日光線を出しているので、やがては蠟燭のように溶けてなくなるだろう、そうすると、地球も月もみんななくなってしまうだろう、などという心配でした。

彼等は、朝から晩まで、こんなふうなことを考えてビクビクしています。夜もよく眠れないし、この世の楽しみを味おうともしないのです。朝、人に会って、第一にする挨拶は、「……太陽の工合はどうでしょう。日の入り日の出に変わりはないませんか」、「……今度、彗星がやって来たたら、どうしたものでしょうか。何とかして助かりたいものですか」と、こんなことを言い合うのです。それは、丁度、子供が幽霊やお化けの話が怖くて眠れないくせに聞きたがるような気持でした。

私は、一月も経つと、この国の言葉がかなり上手になりました。国王の前に出ても、質問は大概答えることが出来ました。陛下は、私の見た国々の法律、政治、風俗などのことは、少しも聞きたがりません。その質問と言えば、数学のことばかりでした。私が申し上げる説明を、時々、叩き役の助けを借りて聞かれながら、いかにもつまんなそうな顔つきでおられました。

八、浮き島の構造

私は、この島のいろいろ珍しいものを見せてもらいたいと、陛下にお願いしました。さつそく、お許しが出て、私の先生と一緒に行くことになるました。私は、この島の様々の運動が何の原因によるものなのか、それが知りたかったのです。

この飛島は、直径約四マイル(約六・四哩)半の真円い島です。面積は、一万エーカー、島の厚さは、三百ヤード(約二七四呎)あります。島の一番底は、滑らかな石の板になっていて、その上に、鉱物の層があり、そのまた上に土がかぶさっています。

島の中心には、直径五十ヤード(約四十五呎)ばかりの裂け目が一つあり、ここから天文学者たちは、洞穴へ降りて行きます。その洞穴の中には、二十箇のランプがいつも灯つていて、そこには、望遠鏡や天体観測器その他などの天文学の器械が備えてあります。

この島の運命を司っているのは、一つの大きな(天然)磁石です。磁石の真中には心棒があつて、誰でもぐるぐる廻すことが出来るようになっていきます。

この(天然)磁石の力によつて、島は、上つたり下つたり一つ場所から他の場所へ動いたりするのです。(天然)磁石の一方の極は、島の下の領土に対して、遠ざかる力を持ち、もう一方の極は、近寄ろうとする力を持っています。

もし近寄ろうとする力を下にすれば、島は下つて行きます。その反対にすれば、島は上つて行きます。斜めにすれば、島は斜めに動きます。そして、磁石を土面と水平にすれば、島は停まっています。この(天然)磁石を預かっているのは、天文学者たちで、彼等は王の命令で、時々、磁石を動かすのです。

もし、下の都市が謀叛を起したり、税金を納めない場合には、国王は、その都市の真上に、この島を持って来ます。こうすると、下では日も当たらず雨も降らないので、住民たちは苦しんでしまいます。また場合によつては、上からどしどし大石を都市めがけて落します。こうされては、住民たちは、地下室に引込んでより他はありません。

だが、それでもまだ王の命令に従わないと、最後の手段を取ります。それは、この島を彼等の頭の上に落してしまうのです。こうすれば、家も人も何もかも一遍に潰されてしまいます。しかし、これはよくよくの場合で、滅多にこんなことにはなりません。王もこのやり方は喜んでいません。それにもう一つ、これには困ることがあるのです。つまり、都市には高い塔や柱などが立ち並んでいるので、その上に島を落とすと、島の底の石が割れる恐れがあります。もし底の石が割れたりすると、磁石の力がなくなつて、たちまち島は地上に落っこちてしまうことになるのです。

九、この国を去ることに

私は、この国で別に苛められたわけではないのです。だが、どうも何だかみんなから馬鹿にされているような気がしました。この国では、王も人民も数学と音楽のことのほかは、何一つ知ろうとしないのです。だから、私なんかどうも馬鹿にされるのです。

ところが、私の方でも、この島の珍しいものを見物してしまうと、もうこの人間たちには飽き飽きしてしまいました。彼等は、いつも何か我を忘れてぼんやり考え事に耽っているのです。付き合う相手として、これほど不愉快な人間はありません。で、私はいつも女や商人や叩き役侍童などとばかり話をしました。ものを言つて、筋の通つた返答をしてくれるのは、こういう連中だけでした。

私は、勉強したので、彼等の言葉は大分話せるようになっていました。で、私はこうしてほとんど相手にもしてもらえないような国にじっとしているのが、たまらなくなつたのです。一日も早く、この国を去ってしまいたいと思いました。

私は陛下にお願いして、この国から出られるようにしてもらい、二月十六日に、王と宮廷に別れを告げました。丁度、その時、島は首府から二マイル（約三・二km）ばかり郊外の山の上を飛んでいましたので、私は、一番下の通路から、鎖を吊り下げてもらって地上に降りました。

十、新しい大陸・バルニバービ

その大陸は、飛島の国王に属していて、バルニバービと言われていました。首府はラグードと呼ばれています。私は地上に降ろされて、とにかく満足でした。服装は飛島のと同じだし、彼等の言葉も私はよく分かつていたので、何の気もかりもなく町の方へ歩いて行きました。私は飛島の人から紹介状をもらっていましたので、それを持って、ある偉い貴族の家を訪ねて行きました。すると、その貴族は、彼の邸の一室を私に貸してくれて、非常に厚く持てなしてくれました。

翌朝、彼は、私を馬車に乗せて、市内見物に連れて行ってくれました。街はロンドンの半分くらいですが、家の建て方がひどく奇妙で、そして、ほとんど荒れ放題になっているのです。街を通る人は、みな急ぎ足で妙にもうい顔つきで、大概ポロボロの服を着ていました。

それから私たちは、城門を出て、三マイル（約四・八km）ばかり郊外を歩いてみました。ここでは、沢山の農夫たちがいろいろの道具で地面を掘り返していましたが、どうも何をしているのやら、さっぱり分からないのです。土はよく肥えているのに、穀物など一向に生えそうな様子はありません。

こんなふうには、田舎も街もどうも実に奇妙なので、私は驚いてしまいました。「……これは一体どうしたわけなのでしょう。町にも畑にも、あんなに沢山の人がとても忙しそうに動きまわっているのに、ちつとも良くないようですね。私はまだ、こんなでたらめに耕された畑や、こんなむちゃくちゃに荒れ放題の家や、みじめな人間の姿を見たことがないので」と、私は案内役の貴族に尋ねてみました。

すると、彼は、次のような話してくれました。今から凡そ四十年ばかり前に、数人の男がラピュータへ上って行ったのです。彼等は五カ月ほどして帰って来ましたが、飛島で覚えて来たのは、数学の端くれでした。しかし、彼等は、あの空の国のやり方にとってもひどく被れてしまったのです。帰ると、さっそく、この地上のやり方を厭がりはじめ、芸術も学問も機械も何もかも、みんな新しくやり直そうということにしました。

それで、彼等は国王に願ひ出て、このラグードに学士院を作りました。ところが、これがついに全国の流行となつて、今ではどこの町に行つても学士院があるのです。この学士院では、先生たちが農業や建築の新しいやり方とか商工業に使う新式の道具を、考え出すとしています。先生たちはよくこう言います。「……もし、この道具を使えば、今まで十人でした仕事がたった一人で出来るし、宮殿はたった一週間で建つ。それに一度建てたら、もう修繕することが要らない。果物は、いつでも好きな時に熟れさせることが出

来て、今までの百倍ぐらい沢山取れるようになる」と、その他、いろいろ結構なことばかり言うのでした。

ただ残念なのは、これらの計画が、まだどれもほんとに出来上ってはいないことです。だから、それが出来るまでは、国じゅうが荒れ放題になり、家は破れ、人民は不自由が続けます。が、それでも彼等は元氣は失わず希望に燃え、半分やけくそになりながら、五十倍の勇氣を振るって、この計画を成し遂げようとするのです。彼はこんなことを私に説明してくれたのです。そして、「……ぜひ、一つあなたにもその学士院を御案内しましょう」と、つけ加えました。

十一、学士院での様々な発明家

それから数日して、私は、彼の友人に案内されて学士院を見物に行きました。この学士院は、全体が一つの建物になっているのではなく、往來の両側に建物がずらつと並んでいました。私が訪ねて行くと、院長は大変に喜んでくれました。私は何日も何日も学士院へ出かけて行きました。どの部屋にも、発明家が一人か二人いました。私は凡そ五百ぐらいの部屋を見て歩きました。

最初に会った男は、手も顔も煤だらけで、髪はぼうぼうと伸び、それに、ところどころ焼け焦げがありました。そして、服もシャツも皮膚と同じ色なのです。彼は、胡瓜から日光を引き出す計画をやっているのだそうです。何でももう八年間このことばかり考えているのだそうです。それは、つまり、この胡瓜から引き出した日光を塩詰にしておいて、夏はじめ始める日に、空気を温めるために使おうというのです。「……もうあと八年もすれば、これはきつとうまく出来るでしょう」と、彼は私に言いました。「……しかし困るのは、胡瓜の値段が今非常に高いことです。どうか一つこの発明を助けるために、いくらか寄附して頂けないでしょうか」と彼は手を差し出しました。私はいくらからお金をやりました。

次の部屋に入ると、悪臭がむんと鼻をつきました。びっくりして私は跳び出したのですが、案内者が引き止めて、小声でこう言いました。「……どうか先方の氣を損ねるようなことをしないでください。ひどく腹を立てますから」と。それで、私は鼻をつまむわけにもゆかず困ってしまいました。この室の発明家は、顔も鬚も黄色になり、手や着物は汚れた色が付いています。彼の研究というのは、人間の排泄したものを、もう一度元の食物に直すことでした。

それから、別の部屋に入ると、氷を焼いて火薬にすることを工夫している男がいました。それから、非常に器用な建築家もいました。彼が思いついた新しい考えによると、家を建てるには、一番初めに屋根を作り、そして、だんだん下の方を作って行くのがいいと言うのです。その証拠には、蜂や蟻などこれと同じやり方でやっているではないか、と彼は言うていました。

ある部屋には、生れながらの盲人が盲人の弟子を使っていました。彼等の仕事は、画家のために、絵具を混ぜることでした。この先生は、指と鼻で絵具の色が見分けられるというのです。しかし、私が訪ねた時は、先生はほとんど間違つてばかりいました。また別の部屋には、鋤や家畜の代りに、豚を使って土地を耕すことを発見したという男がいました。

それは、こうするのです。まず、一エーカーの土地に、六インチ（約十五センチ）おきに八インチ（約二十センチ）の深さに、どんぐり、なつめ、やし、栗、その他、豚の好きそうなものを沢山埋めておきます。それから、六百頭あまりの豚をそこへ追い込むのです。すると、三日もすれば、豚どもは食物を探して隅から隅まで掘り返すし、それに、豚の糞が肥料になるので、あとはもう種を蒔けばいいばかりです。もともと、これは、お金と人手がかかるばかりで、作物はほとんど取れなかったということです。

さて、その次の部屋に行くと、壁から天井から蜘蛛の巣だらけで、やつと人一人が出入り出来る狭い路が付いていました。私が入って行くと、「……蜘蛛の巣を破っては駄目だ」と、いきなり大声で怒鳴られました。それから、相手は私に話してくれました。「……そもそも蜘蛛というものは、蚕などよりずっと立派な昆虫なのだ。蜘蛛は糸を紡ぐだけでなく、織り方までちゃんと心得ている。だから、蚕の代りに蜘蛛を使えば、絹を染める手数が省けることになる」と、そう言って、彼は、非常に美しい蠶を沢山取り出して見せてくれました。つまり、蜘蛛にこの美しい蠶を食べさせると、蜘蛛の糸にその色が付くのだそうです。それに彼は、いろんな色の蠶を飼っていました。この蠶の餌として、何か糸を強くするものを研究してはいたのです。

それから私は、もう一人、有名な人を見ました。この人は、もう三十年間というものは、人類の生活を改良させることばかり考え続けているのです。彼の部屋は、奇妙な品物で一杯でしたが、五十人の男たちが彼の指図で働いていました。ある者は、空気を乾かして塊りにすることを研究していました。また、ある者は、石をゴムのように柔らかくして、枕を拵えようとしていました。生きた馬の蹄のところに石をすることを考えている者もいました。それから、これは私にはどうもよく分からないのですが、この有名な学者は、畑に糶を蒔くことと羊に毛の生えない薬を塗ることを、目下しきりに研究しているのだそうです。

十二、学問の様々な発明家

私は道を横切つて、向う側の建物に入りました。この学士院には、学問の発明家がいるのでした。私が最初に会った教授は、広い教室にいました。そこには四十人ばかりの学生が集っていました。教授は、一つの便利な機械を考えていました。その機械を使えば、どんな無学な人でも何でも書けるようになります。例えば、哲学、詩、政治学、数学、神学、その他、そのようなものが誰にでも楽に書ける機械でした。教授は、その機械についていろいろ私に説明してくれました。

私は続いて、国語学校を訪ねました。ここでは、三人の教授が国語の改良をいろいろと熱心に考えていました。一つの案は、言葉を全部しゃべらないことにしたらいい、と言うのでした。その方が簡単だし健康にもよい、ものをしゃべれば、それだけ肺を使うことになるから生命を縮めることになる、と言うのです。

そこで、その代りに、こんなことが発明されました。言葉というものは、物の名前だから、話をしようとする時には、その物を持って行って見せつこをすれば、しゃべらなくても意味は通じると言うのです。しかし、これにも一つ困ることがあります。それはちよつとした話なら、道具をポケットに入れて持って行けばいいのですが、話が沢山ある場合だ

と大変です。その時は、力の強い召使が大きな袋にいろんな品物を入れて、背負って行かなければなりません。

私は、二人の男が丁度あの行商人のような恰好で、大きな荷物を背負っているのを見たことがあります。二人の男が往来で出会うと荷物を下ろして、袋を解き、中からいろんな品物を取り出します。こうして、かれこれ一時間ぐらい話が続きたかと思うと、品物を袋に収めて、荷物を背負って立ち上りました。

私は、その次に数学教室を見物しました。ここでは、ヨーロッパなどでは、思いつくことも出来ない珍しい方法で教えられていました。まず、数学の問題と答案を薄い煎餅の上に、特別製のインキで清書しておきます。学生たちにお腹を空っぽにさせておいて、この煎餅を食べさせます。その後、三日間は、パンと水しか与えません。そうすると、煎餅が消化されるに連れて、それと一緒に問題は頭の方へ上って行くというのです。

しかし、これは実際には一度も成功していません。というのは、この煎餅を食べると、酷く胸が悪くなるので、みんなこつそり抜け出して吐き出してしまふからです。私は続いて政治の発明家たちを訪ねましたが、この教室では、あまり愉快な気持にはなれなかつたのです。この教室で、一人の医者がこんなことを言っていました。一体、大臣などというのは、どうも物忘れが酷くて困るとは誰もが言う苦情ですが、これを防ぐには、次のようにすればいいと言っています。つまり、大臣に面会した時には、出来るだけ分かりやすい言葉で用件を伝えておいて、別際に一つ大臣の鼻を摘まむとか、腹を蹴るとか、腕をつねるとか、何とかして約束したことは忘れないようにさせるのです。そしてその後も、面会する度に同じことを繰り返して、約束したことは実行してもらうようにするのです。

また、この医者は、政党の争いをうまく停める方法を発明していました。それは、まず両方の政党から百人ずつ議員を選んで来て、これを二人ずつ頭の大きさの似たもの同士の組にしておきます。それから、それぞれ両方の頭を鋸で引いて、二つに分けます。こうして切り取った半分の頭を、それぞれ取り換えっこして、反対派の頭にくっ付けるのです。

私は、二人の教授がしきりに議論しているのを聞きました。どうしたら人民を苦しめないで、税金を集めることが出来るかという議論でした。一人の教授の意見では、悪徳や愚行に税金を掛けるがいいと言っていました。ところが、もう一人の教授の意見では、人がその自惚れている長所に税金を掛けたらいいと言っていました。

十三、魔法使いの島

私は、学士院を見物すると、もうこれ以上、この国にいても仕方がないと思い、また、イギリスへ帰りたくなりました。私はヨーロッパへの帰り途に、一つラグナグ島へ寄ってみようと考えていました。それから、さらに日本へも寄ってみたいと思いました。

私は荷物を運ばせるために、驃馬を二頭それに案内人を一人雇いました。あの貴族には、いろいろ世話になったのですが、私がいよいよ出発することになると、大変な土産物までくれました。ところが、マルドナーダという港に着いてみると、生憎、ラグナグ島行きの船は当分出そうもないということが分かりました。そこで、私はその港町にしばらく滞在することになりました。そのうち二、三の知合いも出来て、みんな私に親切にしてくれました。ラグナグ島行きが出るまでにはまだ一月はあると聞いて、私は、そこから五リ

「グバかりのところにある、グラバダブドリブという島を訪ねることにしました。この町の一流の紳士が、小帆船を一隻仕立てて、私と一緒に往つてくれました。」

ところで、この『グラバダブドリブ』という名前は、『魔法使いの島』という意味なのでした。この島は酋長がいて治めていましたが、住民は一人残らず魔法使いでした。島で一番年長者が酋長になることになっていて、酋長は立派な宮殿に住んでいました。その庭園の中には、家畜、穀物、園芸などのために、小さな区切りが作ってありました。

酋長とその家族が使っている召使というのが実に奇妙なものでした。酋長は、魔法を使って、死人の中から誰でも好きな者を選び出すことが出来ます。そして、二十四時間限り、(それ以上は駄目でしたが)、呼び出した死人を召使として使います。だが、一度呼び出して使ったら、まずその召使は、三ヶ月間は呼び出せないことになっていました。

私たちがこの島へ着いたのは、朝の十一時頃でしたが、連れの紳士は、さつそく酋長のところへ行つて、「……実は外国人が一人、閣下にお目にかかりたくて、わざわざやつて来たのですが、一つ会つてやつてくさいませんか」と頼みました。さつそく、それは許されたので、私たちは宮殿の門をくぐつて行きました。門の両側には、鎧、兜を着た兵士がズラリと並んでいます。そして、その兵士たちは何とも言えない恐ろしい顔付きをしているので、私は思わずゾッと寒気がしました。私たちは部屋を二つ三つ通り抜けましたが、どの部屋にも、同じような無気味な恰好の兵士が並んでいました。

やがて、酋長の室に来ると、私たちは三度頭を下げてお辞儀をしました。それから、挨拶が済むと、酋長の席から一番下の段のところにある椅子に、私たちは腰を下ろしました。この酋長は、飛鳥の言葉をよく知っていました。それで私に旅行の話をし聞かせて欲しいと言いました。そして、彼は、「……うん、召使たちはいない方がいいな」と言いながら、ヒョイと指を動かしました。すると、今まで酋長のまわりにいた召使たちが、一遍にすーつと消えてしまいました。私は、吃驚してしばらくは口も利きませんでした。「……いや、何でもないのですよ。怖がることはありません」と酋長は言つてくれました。

見ると、私の連れの紳士は、度々こんなことには馴れているらしく、まるで平気な顔をしていました。それで私もやつと安心して旅行の話を手短かに話しました。それでも、私は話しながら時々どうも気になって、あの召使たちが消えてしまったあたりを振り返つて見ていました。それから私たちは、酋長と一緒に食事をしました。すると、今度はまた別の幽霊どもが食事を運んで来て、給仕してくれるのでした。それを見ても、私はもう最初ほどビクビクしなくなっていました。夕方まで私たちは酋長のところにいました。彼は泊つて行けと勧めましたが、私たちは無理に帰りました。私たちは、島の民家に泊り、翌朝になると、また酋長のところへ訪ねて行きました。

こんなふうにして、私たちは十日間、この島にいました。毎日、大概酋長のところへ行つて、夜は、民家の宿へ戻るのです。私は幽霊にも馴れてしまったので、もう三、四回目から平気になりました。いや、怖いのはまだ少し怖かったです。酋長は私にこんなことを言ひ出しました。「……私は、誰でも死人の中からあなたの好きな人間を選び出してあげます。そして、何でもあなたが聞きたいと思うことを聞けば、死人に返事させます。世界が始まつて以来、今日までどんな死人でも呼び出すことが出来ます」と言うのでした。

私は、曾長の厚意を大変有り難く思いました。丁度、私たちのいた部屋からは、庭園がすっかり見渡せるようになっていました。私は、まず最初に、何か雄大なものが見たいと思いました。「……それでは一つ、アレキサンダー大王が戦場に立っている姿を見せてください」と私は言いました。

酋長は、指先をちよつと動かして合図しました。すると、私たちのいる窓の下の庭園に、戦場の光景が現われました。それから、アレキサンダー大王は、私たちの部屋へ呼ばれてやって来ました。しかし、彼の話すギリシヤ語は、私にはどうもよく通じませんでした。また、次には、ハンニバルがアルプスの山を越すところを見せてもらいました。その次には、シーザーとポンペイがそれぞれ陣地に立って、戦争を始めようとしているところを見せてもらいました。そして、シーザーが大勝利をするところも見ました。

私は、次に一つ最も偉い学者たちを見たいものだと思います。そこで、酋長にこう頼みました。「……どうか、ホームーとアリストテレスと、それから、その註釈家たちを全部見せてください」と言いました。すると、これはまた大変な人数で何百人という人間が、ぞろぞろと現われて来ました。私は、一目見て、ホームーとアリストテレスの顔はすぐ分かりました。

ホームーの方が背も高く、好男子でした。歩き方もしゃんとしているし、それに、目はまるで人を突き刺すような鋭い眼光でした。アリストテレスの方は、だいぶん腰が曲って、杖をついていました。それに髪も薄くなっているし、声にも力がないのでした。しかし、この二人の学者とまわりの群衆とは、まるで何の縁故もないのだということは、私にもよく分かりました。

私はまる五日間、まだまだいろんな人間や学者たちと会いました。ローマの皇帝たちにも、大抵会いました。

十四、ラグナグ島へ行く

さて、いよいよ出発の日が来たので、私はグラブダブドリブの酋長と別れて、連れのお紳士と一緒にマルドナーダーへ帰りました。そして、この港で二週間ばかり待っていると、いよいよラグナグ島行きの船が出るようになりました。この町の人たちは、大変親切にしてくれて、私をわざわざ船まで見送ってくれました。

航海は、一カ月かかりました。一度は暴風雨に会ったりしましたが、一七一年四月二十一日に私たちの船はクルメグニグ河に入りました。ここは、ラグナグ国の東南にある港です。船は、この町から一リーグばかり手前で錨を下ろし、水先案内に合図をしました。半時間もしないうちに、水先案内は二人連れでやって来ました。

ところが、船員の二、三の者が私のことを外国人で大旅行家だと水先案内に話してしまつたのです。するとまた、水先案内は、税関吏に私のことを話しました。そのために、私は上陸すると、さつそく厳しい検査を受けました。

この税関吏は、バルニバービ語で私に話しかけました。この国とバルニバービとは互に往来しているので、港町では大抵言葉が通じるのでした。私は出来るだけ簡単に分かりやすく話してやりましたが、私の国はオランダだと一つ嘘をつきました。これは、私が日本へ寄ってみようと思つていたからです。その日本では、オランダ人のほかは一切ヨーロッパ

パ人を上陸させないということを、私は知っていました。「……私はバルニバービの海岸で船が難破して岩に打ち上げられたのです。すると、ラピュータ（飛島）に見つかって、救われました。今は、これから日本へ行くこうとしているところです。日本へ行きさえすれば、船があるので故国へ帰れます」と、私は役人に向って言ってやりました。

すると、役人は、「……では、さっそく宮廷へ手紙を書いてあげる。二週間もすれば返事が聞けるだろうから。しかし、それまでは一応あなたをこちらで捕えておくことにする」と言いました。そこで、私は宿へ引つ張って行かれましたが、門口には、番人がちゃんと一人立っていました。しかし、庭の中を歩きまわることだけは許されました。それに、私は国王の費用で随分よくもてなされました。また方々から、私を珍しがって招いてくれました。私のことが、まだ話にも聞いたことのない遠い遠い国からやって来た男だと、人々の噂になっていたからです。

十五、宮廷で陛下と会う

私は同じ船で来た一人の青年を、通訳に雇いました。この通訳を使って、私は訪ねて来る人たちと話をすることが出来ました。

宮廷からの返事を待っていた頃、使者がやって来ました。それは、私と私の連れを十頭の馬で、この通訳を使って、私は訪ねて来る人たちとトラルドラグダカまで案内してくれると言うのです。私は通訳の青年のほかに連れはなかったので、彼と一緒に行ってくれるように頼み、二人の乗り物として、騾馬を一頭ずつもらいました。いよいよ出発する前に、まず、使者を一人先に発させることにしました。「……陛下の御足の前の塵をなめさせていただきたいのですが、いつお伺いしたらいいか、御都合をお知らせくださいませ」と、私の使者は、王にこう申し上げました。

はじめ私は、『塵をなめる』というのは、ただ、この国の宮廷の言いまわしで、『お目にかかる』という意味だろうと思っていました。ところが、その後、これはほんとに塵をなめるのだということが分かりました。

宮廷に着いて二日目に、私はいよいよ陛下の前に呼び出されました。すると、私は腹這いになれ、と命じられました。そして、陛下の前まで進んで行き、床の塵をペロペロなめろ、と言われました。もつとも私は外国人なので、特別の扱いをされて、床は綺麗にしてありましたので、塵も大したことはなかったのです。しかし、これは全く特別扱いで、この国の一番偉い人と同じように扱ってくれたわけです。酷いになると、宮廷で気に入らない人がやって来ると、わざわざ塵をまき散らしておくのです。

私は、この宮廷である大官が口の中を塵だらけにして、ものも言えず困っているところを見ました。もしこんな場合、相手が陛下の前で唾を吐いたり、口を拭いたりしたら、すぐ死刑にされてしまいます。それから、この宮廷では、もう一つ、面白くない慣習があります。それは、もし王が誰か家来をそつと死刑にしてやろうと思われると、この床の上に、毒の粉をまき散らすようにお命じになります。それを家来がなめれば、二十四時間で死んでしまうと言うのです。しかし、こうして死刑が済むと、あとは必ず床についている毒を綺麗に洗い落しておくようにと、お命じになりました。

ある時、私は一人の侍童がひどく叱られているのを見ました。それは、床に撒いた毒を後

で綺麗に掃除しておかなかったからです。そのため、一人の立派な青年が、陛下の前で毒をなめて死んでしまいました。その時、陛下は、彼を殺そうとはちっともお考えにならなかったのです、ひどく残念がられました。

王は、私との会見が大変お気に召されました。私と通訳に宮中の部屋を貸してくださいって、毎日、食事とお小遣を与えてくれました。私は王に勧められて、この国に三ヶ月間滞在しました。ラグナグ人は、礼儀正しい国民でした。私は上流貴族と主に付き合いました。通訳付きで話をしたのですが、気まずいものではなかったのです。

十六、死なない人間

ある日のことでした。一人の紳士がふと私にこんなことを尋ねました。「……あなたはこの国のストラルドブラグというものを見ましたか。それは『死なない人間』という意味なのですが」と聞くので、「……あいにくまだ見ていません。しかし、死なない人間なんて、一体、どうしてそんな名前をつけるのですか。そのわけを教えてください」と、私は尋ねてみました。すると、彼は、次のようなことを教えてくださいました。

それは、ごく稀なことですが、この国には、額の左の眉毛の上に赤い円いあざの付いた子供が生れるのです。このあざがあると、この子供はいつまで経っても死なないという印しなのです。このあざは年とともに、大きくなり、色が変わって行きます。十二歳になると、緑色になり、二十五歳になると、紺色に変わり、それから四十五歳になると、真黒になります。それが、それからもう変りません。こんな子供が生れるのは、非常に稀で、全国を探しても男女合せて千百人ぐらいしかいません。そしてそのうち、五十人ぐらいがこの首府に住んでいます。その中には三年前に生れた女の子も一人います。この死なない人間が生れるのは、全く偶然で血統のためではないのです。だから、ストラルドブラグを親に持つていても、その子供は普通の子供なのです。

私は、紳士からこの話を聞いて、何とも言えないほど嬉しかったので、思わずこう口走りました。「……ああ、そんな人たちは、どんなに幸いでしょう。みんな人間は、死ぬことが恐ろしいからいつも苦しんでいるのに、その心配がない人なら、ほんとに幸いなことでしょう」と。しかし、一つ不思議に思ったのは、ストラルドブラグが宮廷に一人も見当たらなかったことです。とにかく私は、一つストラルドブラグたちに会って話してみたいと思いました。そこで私は、紳士を通訳に頼んで、一度彼等と引き合せてもらいました。まず紳士は、私がストラルドブラグを大変羨ましがっていることを彼等に話しました。するとストラルドブラグたちは、しばらく自分たちの言葉でガヤガヤ話し合っていました。が、それから通訳の紳士は、私にこう言いました。「……もし、仮にあなたがストラルドブラグに生れてきたら、どんなふうにして暮すつもりか、それをあの人たちは聞かせてくれと言っています」と言うのでした。

そこで、私は喜んで次のように答えました。「……もし私が幸いにストラルドブラグに生れたとすれば、私はまず第一に、大いに努力して金儲けをしようと思います。そして、節約と整理をよくして行けば、二百年ぐらいで私は国内第一の金持になれます。

第二に、私は子供の時から学問を励みます。そうすれば、やがて國中第一の学者になります。それから最後に、私は社会のいろんな出来事を何でも詳しく書いておきます。風習

や言語や流行や服装や娯楽などが移り変わるたびに、それらを一つ一つ書き留めておきます。こうしておけば、私はやがて活字引きとして皆から重宝がられます。

六十を過ぎたら、私は規則正しい安楽な生活をしたと思います。そして、有望な青年を導くことを私の楽しみにします。私の記憶や経験からいふようなことを彼等に教えてやりたいと思います。しかし、絶えず交わる友人には、やはり私と同じような死なない仲間を十二人ほど選びます。そして、もし彼等のうちに生活に困っているようなものがあれば、私の土地のまわりに便利な住居を作つてやります。それから食事の時には、彼等のうちから数人招きます。もつともその時には、普通の人間も二、三人ずつ立派な人を招くことにします。なにしろあまり長く生きていると、普通の人間がどんどん死んで行くことなど、別に惜しくも何ともなくなるでしょう。孫が出来れば、私はその孫を招いたりするでしょう。こうなると、丁度、あの庭のチューリップが毎年人の目を楽しませて、前の年に枯れた花を悲しまさないと同じことです。

それから私は死なないので、まだまだいろいろなものを見ることが出来ます。昔、栄えた都が廃墟となったり、名もない村落が都となったり、大きな河が涸れて小川となつてしまつたり、文明国民が野蛮人となつたり、昨日の野蛮人が今日の文明人になつていたり、そんなふうな移り変わりをすることが出来るのです。そして、まだ人間の知識では解けないいろいろな問題も解ける日が来るのを、それも見ることが出来るでしょう」と。

私がこんなふうに答えると、紳士は、私の言つたことをストラルドブラグたちに通訳して聞かせました。すると、彼等にはわかにかやガヤと話し始めました。中には、失礼にも何かおかしそうに笑い出したものもありました。しばらくして通訳の紳士は、私にこう言いました。「……どうもあなたは、ストラルドブラグというものを考え違ひしておられるようだと、彼等はそう言っています。

なにしろ、このストラルドブラグなるものは、この国にしかないもので、バルニバービにも日本にも見ることは出来ません。前に私も使節として、バルニバービや日本へ行ったことがあります、その国の人たちは、てんで、そんなものがあるとは考えられないと言っていました。私は、バルニバービや日本の人たちといろいろ話し合つてみて、長生ということが、すべての人間の願ひであることを発見しました。片足を墓穴に突つ込んだような人間でさえ、もう一方の足では出来るだけ入るまいと足掻きます。たとえどんなに年を取つていても、まだ一日でも長生するつもりらしいのです。

ところが、このラグナグの国では、絶えず眼の前にストラルドブラグの例を見せつけられていたためか、この国の人たちは、やたらに長生を望まないのです。あなたは人間の若さとか健康とか元気とかいうものが、いつまでもいつまでも続くと、とんでもない考え違いをしていられますが、ストラルドブラグの辛いところは、年を取つて衰えながらいるんな不便に耐えて、まだ生き続けているということなのです」と、そう言つて、彼はこの国のストラルドブラグの有様を次のように詳しく話してくれました。

十七、不死の様子

彼等は、三十歳頃までは普通の人間と同じことなのですが、それからあとは次第に元気が衰えて行く一方で、そうして八十歳になります。この国では八十歳が普通、寿命の終

りとされていきますが、この八十歳になると、彼等は老人の愚痴と弱点をすっかり身につけてしまいます。おまけに決して死なないという見込みから、まだまだ沢山の欠点が増えてきます。頑固、欲張り、気むずかし屋、自惚れ、おしゃべりになるばかりでなく、友人と親しむことも出来なければ、自然の愛情というようなものにも感じなくなりします。

ただ嫉妬と無理な欲望ばかりが強くなります。彼等は青年が愉快そうにしているのを見ては、嫉妬します。それは、彼等がもうあんなに愉快にはなれないからです。それから彼等は、老人が死んで葬式が出るのを見ると、やはり嫉妬します。ほかの人たちは安らかに休息の港に入るのに、自分たちは死ねないからです。

彼等は、自分たちが若かった頃に見たことのほかは、何一つ覚えていません。しかも、その覚えているということも、酷くでたらめなのです。だから、ほんとのことを詳しく知ろうとするには、彼等に聞くより、世間の言い伝えに従う方がまだましなのです。すっかり記憶がなくなってしまうのは、まだいい方です。これはほかの連中とは違って、もう多くの欠点もなくなっているのです、多少人から憐んでもらえます。

彼等は、満八十歳になると、この国の法律ではもう死んだものと同じように扱われ、財産はすぐ子供が相続することになっています。そして、国からごく僅かの手当が出されて、困る者は国の費用で養われることになっています。

九十歳になると、齒と髪の毛が抜けてしまいます。この年になると、もう何を食べても味なんか分からないのですが、そのくせ、ただ手あたり次第に食べたくもないのに食べます。しかし彼等はやはり病気には罹るのです。かかる病気の方は、増えもしなければ減ることもありません。話一つしても、普通使うありふれた物の名まで忘れていきます。人の名前など覚えてはいません。どんな親しい友達や親類の人と会っても顔が分からないのです。本を読んでも、ぼんやり一つページを眺めています。文章の初めから終りまで読んで意味を辿る力がなくなっているのです。ですから、何もかも一向面白くはないのです。

それに、この国の言葉は絶えず変わっています。だから甲の時代のストラルドブラグと、乙の時代のストラルドブラグが出会ったのでは、少しも言葉が通じません。その上、二百年も経てば、友人と会っても話一つ出来ない有様ですから、彼等は自分の国に住みながら、まるで外国人のように不便な生活をしているのです。私が紳士から聞いた話は、大体、こんなふうなものでした。

その後、私はいろいろの時代のストラルドブラグを、度々家に連れて来て会ってみましたが、中で一番若いのは、まだ二百歳になったかならないくらいでした。彼等は、私が大旅行家で、世界中を見てきた人間だと聞いても別に珍しがりもせず、何の質問もしません。ただ、何か記念品をくれと手を差し出しました。

ストラルドブラグは、みんなから厭がられています。もしストラルドブラグがこの国に生れて来ると、これは不吉なこととして、その誕生が詳しく書き残されることになっています。だから、その記録を見れば、彼等の年齢は分かるわけですが、しかしこの記録も千年くらい前のものしか残っていません。

実際、ストラルドブラグほど不快なものを私は見たことがないのです。ことに女の方が男よりもっと酷いのです。形が醜いばかりでなく、その年齢に比例して、何とも言えないもの凄さがあるのです。私は彼等が六人ばかり集っているのを見て、年は百か二百くらいしか違わないのに、誰が一番年上かすぐ分かりました。

私はストラルドブラグのことを知ったために、やたらに長生したいという烈しい欲望もすっかり冷めてしまいました。以前、心に描いていた楽しい夢が、今は恥かしくなったのです。たとえどのような恐ろしい死でも、あのように厭らしい生よりは、まだましだと思ふようになりました。こんなことを私が王に話したところ、王は大変面白がられました。そして、私をおからかいになって、「……一つストラルドブラグを二人ばかり、イギリスへ連れて行って見せてやっつてはどうか」とおっしゃいます。だが、実際はこの国の法律で、彼等を国外に連れて行くことは厳しく禁止されているようでした。

ストラルドブラグのこの話は、諸君にもいくらか興味があるだろうと思います。というのは、少し普通とは変った話ですし、私のこれまで読んだどの旅行記にも、まだ、これは出ていなかったと思います。

このラグナグ国と日本国とは、絶えず行き来しているのですから、このストラルドブラグの話も、もしかすると、日本の人が本に書いているかも知れません。しかし、なにしろ私が日本に立ち寄ったのは、ほんの短い間でし、その上、私は日本語をまるで話せなかつたので、そのことを確かめてみることも出来なかつたのです。

ラグナグ国王は、私を宮廷で何かの職につけようとされました。けれども、私がどうしても本国へ帰りたがっているのを見て、快く出発をお許しになりました。そして、わざわざ日本皇帝にあてて推薦状を書いてくださいました。その上、四百四十枚の大きな金貨と赤いダイヤモンドを私にくださいました。このダイヤモンドの方は、私はイギリスに帰ってから、売ってしまいました。

一七〇九年五月六日、私は陛下や知人一同に、うやうやしく別れを告げました。王はわざわざ私に近衛兵を付けて、グラングエンスタルドという港まで送ってくださいました。そこで、六日ほど待っていると、丁度、日本行きの船に乗れました。それから日本までの航海が十五日かかりました。

十八、日本へ

私たちは、日本の東南にあるザモスキという小さな港町に上陸しました。私は上陸すると、まず税関吏に、ラグナグ王からこの国の皇帝にあてた手紙を出して見せました。すると、その役人は、ラグナグ王の判をちゃんとよく知っていました。その判は、私の掌ほどの大きさで、王がびっこの乞食の手を取って立たせているところが図案になっているのです。町奉行は、この手紙のことを聞いて、すっかり私を大切にしてくれました。馬車やお付きをつけて、私をエド（江戸）まで送り届けてくれました。

私は、エドで皇帝にお目にかかるかと手紙を渡しました。すると、この手紙はひどく厳かな作法で開封され、それを通訳が皇帝に説明しました。やがて、通訳が私に向つて、こう言いました。「……陛下は、何でもいいからその方に願いの筋があつたら申し上げよと言つておられる。陛下の兄君にあたるラグナグ国王のために、聞き届けてつかわそうとのことだ」と、この通訳は、私の顔を見ると、すぐヨーロッパ人だと思つて、オランダ語で話しました。そこで、私は、「……私は遠い遠い世界の果で難船したオランダの商人ですが、それからとにかく、どうにかラグナグ国までやっつて来ました。それからさらに船に乗つて、今この日本にやっつて来たところです。つまり、日本とオランダとは貿易をしている

ことを知っていたので、その便を借りて私はヨーロッパへ帰りたいと思っているのです。そんな次第ですから、どうか、ナガサキ（長崎）まで無事に送り届けていたきたいのです」と答えてやりました。

それから私はつけ加えて、「……それから、もう一つお願いがございます。どうか、あの十字架踏みの儀式だけは、私には勘弁していただきたいのです。私は貿易のため日本へ来たのではなく、ただ、たまたま災難からこの国へ辿り着いたのですから」と、お願いしました。

ところが、これを陛下に通訳が申し上げると、陛下はちよつと驚いた様子でした。それから、こう言われました。「……オランダ人で踏絵をしたがらないのは、その方がはじめてなのだ。してみると、その方はほんとうにオランダ人かどうか怪しくなってくる。これどうもほんとうのクリスト信者ではないかと思えるのだがなあ」と。

しかし、とにかく、私の願いは許されることになりました。役人たちは、私が踏絵をしなくても、黙って知らない顔をしているように命令されました。

丁度、その時、ナガサキまで行く一隊があつたので、その指揮官に、私を無事にナガサキまで連れて行くよう命令されました。

一七〇九年六月九日、長い旅の挙げ句、ようやくナガサキに着きました。私はすぐそこで、『アンポニア号』という船の、オランダ人の水夫たちと知り合いになりました。前にはオランダに長らくいたことがあるので、オランダ語は楽に話せます。私は船長に船賃はいくらでも出すから、オランダまで乗せて行ってほしいと頼みました。船長は、私が医者的心得があるのを知ると、では途中、船医の仕事をしてくれるなら、船賃は半分でいいと言いました。船に乗る前には、踏絵の儀式をしなければならなかったが、役人たちは、私だけ見逃してくれました。

さて、今度の航海では別に変ったことも起りませんでした。四月十日に船は無事アムステルダムに着きました。私は、ここからさらに小さい船に乗って、イギリスに向いました。

一七一〇年四月十六日、船はダウンズに入港しました。私は翌朝上陸して、久し振りに祖国の姿を見たわけです。それからすぐレドリックに向けて出発し、その日の午後、家に着き、妻子たちの元気な顔を見ることが出来ました。（第三部・完）

*

*

第四部、馬の国（フウイヌム国）渡航記

第四部、馬の国（フウイヌム国）渡航記

一、海賊に船を奪われる

私は家に戻ると五カ月間は、妻や子供たちと一緒に楽しく暮していました。が、再び航海に出ることになりました。今度は私に『アドベンチュア号』の船長になってくれというので、すぐ私は承知しました。

一七一〇年九月七日に私の船はプリマスを出帆しました。ところが、熱い海を渡って行くうちに、船員たちが熱病に罹ってたくさん死んでしまいました。そこで、私はある島へ寄って、新しく代りの船員を雇い入れました。ところが、今度雇い入れた船員たちは、みんな海賊だったのです。この悪漢どもは、ほかの船員たちを引き入れて、みんなして船を横取りして、船長の私を閉じ込めてしまおうと、こっそり計画していたのです。

ある朝のことでした。いきなり彼等は、雪崩を打って、私の船室に飛び込んで来ると、私の手足を縛り上げて、騒ぐと海へ放り込むぞ、と脅しつけました。私は、もうこうなつては、お前たちの言う通りになると降参しました。

そこで、彼等は私の手足の綱を解いてくれました。それでも、まだ片足だけは鎖でベッドに縛りつけて、しかも、戸口には弾丸を込めた鉄砲を持って、ちゃんと番兵が立っていました。食物だけは上から持つて来てくれましたが、もう私は船長ではなく、今ではこの船は海賊のものでした。船はどこをどう進んでいるのか、私にはまるで分かりませんでした。

一七一一年五月九日、一人の男が私の船室へやって来て、船長の命令により、お前を上陸させる、と言って私を連れ出しました。それから彼等は無理やりに私をボートに乗せてしまいました。一リーグばかり漕いで行くと、私を浅瀬に降ろしました。「……一体、ここはこの国なのか、それだけは教えてください」と私は頼みました。しかし、彼等もそこがどこなのか全然知らないのです。「……満潮にさらわれるといけないから早く行け」と言いながら、彼等はボートを漕いで行きました。

こうして、私はたった一人で取り残されました。仕方なしに歩いて行くと、間もなく陸に着きました。そこで、しばらく堤に腰を下ろして休みながら、どうしたらいいものか考えました。少し元気を取り戻したので、また奥の方へ歩き出しました。私は誰か野蠻人にも出遭ったら、早速、腕環やガラス環などをやって、生命だけは助けてもらおうと思っていました。

二、奇妙な動物に出遭う

あたりを見渡すと、並木が幾筋もあって、草が茫々と生え、ところどころからすまの畑がありました。私はもしかか野蠻人に不意打ちに毒矢でも射かけられたら大変だと思ったので、あたりに充分眼を配りながら歩きました。やがて、道らしいところに出てみると、

人の足跡や牛の足跡や、それから沢山の馬の足跡が付いていました。

ふと、私は畑の中に何か五、六匹の動物がいるのを見つけました。気がつくのと、木の上にも一、二匹いるのです。それは何とも言えない嫌らしい恰好なので、私はちよつと驚きました。そこで、私は叢の方へ身を屈めて、しばらく様子を伺っていました。

そのうちに、彼等の二、三匹が近くへやって来たので、私ははつきりその姿を見るこゝとが出来ました。この猿のような動物は、頭と胸に濃い毛がモジャモジャ生えています。背中から足の方も毛が生えています、そのほかは毛がないので、黄褐色の肌がむき出しになっていきます。それに、この動物は尻尾を持っていません。それから、前足にも後足にも長い丈夫な爪が生えていて、爪の先は鉤形に尖っています。彼等は高い木にもまるでリスのように身軽によじ登ります。それから時々軽く跳んだりねたりします。

私もずいぶん旅行はしましたが、まだ、これほど不快ないやらしい動物は見たことがありません。見ていると、何だか胸がムカムカして来ました。私は叢から立ち上つて、路を歩いて行きました。この路を行けば、いざれどこかインド人の小屋へでも来るかと思つていました。だが、しばらく行くと、私はさっきの動物が真正面から、こちらへ向つてやってくるのに出くわしました。この醜い動物は、私の姿を見ると、顔を様々にゆがめていました。と思うと、今度はまるで初めての物を見るように目を見張りました。そして、いきなり近づいて来ると、何のつもりか片方の前足を振り上げました。

私は短剣を抜くと、一つ殴りつけてやりました。が、実は刃の方では打たなかつたのです。というのは、私がこの家畜を傷つけたということが、あとで住民たちに分かるとうるさいからです。私に殴りつけられて、相手は思わず尻込みしましたが、同時に途方もない唸り声を上げました。すると、たちまち隣りの畑から四十匹ばかりの仲間が、もの凄い顔をして吠え続けながら集つて来ました。私は、一本の木の幹に駆け寄り、幹を後楯にして、短剣を振りまわしながら彼等を防ぎました。すると、二、三匹の奴等がヒラリと木の上に躍り上ると、そこから私の頭の上にジャージャーと汚い物をやり出しました。私は幹にピッタリ身を寄せて、上手く除けていましたが、あたり一面に落ちて来る汚い物のために、まるで息が塞がりそうでした。

こんなふう困っている最中、私は急に彼等が散り散りになって逃げて行くのを見ました。どうしてあんなに驚いて逃げ出すのか、不思議に思いながら、私も木から離れて元の道を歩き出しました。その時、ふと左の方を見ると、馬が一匹、畑の中をゆつくり歩いて来るのです。さっきの動物どもは、この馬の姿を見て逃げ出したのでした。

三、二匹の馬と出遭う

馬は私を見ると、初めちよつと驚いた様子でしたが、すぐ落ち着いた顔つきに返つて、いかにも不思議そうに私の顔を眺め出しました。それから私のまわりを五、六回ぐるぐる廻りまわりました。しかし、馬は大人しい顔つきで、ちつとも手荒なことをしそうな様子はありません。しばらく私たちは、お互に相手をじつと見合っていました。どうとう私は思いきつて片手を伸ばしました。そして、この馬を馴らすつもりで口笛を吹きながら首のあたりを撫でてやりました。

ところが、この馬は、そんなことはしてもらいたくないというような顔つきで、首を振り眉をしかめ、静かに右の前足を上げて、私の手を払い除けました。それから、馬は二度嘶きました。三度嘶きましたが、何だかそれは独言でも言っているような、変わった嘶き方でした。すると、そこへもう一匹、馬がやって来ました。この馬は何かひどく偉そうな様子で、前の馬に話しかけました。それから、二匹とも静かに右足の蹄を打ち合せると、代る代わる五、六度嘶きました。だが、その嘶き方は、これはどうも普通の馬の声ではないようです。それから、彼等は私から五、六歩離れたところを二匹が並んで行ったり来たりしました。それは、丁度、人間が何か大切な相談をする時の様子とよく似ていました。そして、彼等は時々私の方を振り向いて、私が逃げ出しはしないかと見張っているようでした。私は、動物がこんな賢い様子をしているのを見て大変驚きました。馬でさえこんなに賢いのならこの国の人間はどんなでしょう。たぶんここには世界中で一番賢い人たちが住んでいるのでしよう。そう思うと、私は早く家か村でも見つけて、誰かこの国の人間に会って見たくなりました。それで、私は勝手に歩いて行こうとしました。

その時、初めの馬が私の後から、「……ちよつと待て」というように嘶きました。何だか私は呼び止められたような気がしたので、思わず引き返しました。そして、彼のそばへのこのこ近づいて行きました。一体、これはどうなるのか、実はそろそろ心配でしたが、私は平気そうな顔付きでいました。

二匹の馬は、一匹は青毛で、もう一匹は栗毛でしたが、彼等は私の顔と両手をしきりに見ていました。そのうちに、青毛の馬が前足の蹄で私の帽子をグルグル撫でまわしました。帽子がすっかりゆがんだので、私は一度脱いで被り直しました。これを見て、彼等はひどく吃驚したようでした。今度は栗毛の馬が私の上衣に触ってみました。そして何か不思議そうに驚いています。それから彼は私の右手を撫で、ひどく感心している様子でしたが、蹄に挟まれて手が痛くなったので、私は思わず大声を立てました。そうすると、彼等は用心しながら、そつと触ってくれるようになりました。彼等は、私の靴と靴下がいかに不思議でならないらしく、何度も触っては互に嘶き合いました。そして、しきりに何か考え込むような顔付きをしていました。

こんな利口な馬は魔法使に違いないと私は考えました。そこで次のように話しかけてみました。「……諸君、どうもあなたたちは魔法使のように思えるのですが、魔法使なら、どこの国の言葉でも分かるのでしょうか。だから一つ申し上げます。実は私はイギリス人ですが、運悪くこの島へ流れ着いて困っているところなのです。それで、どこか私を救ってもらえる家か村まで連れて行ってくださいませんか。ほんとの馬のように私を乗せて行ってほしいのです。そのお礼には、この小刀と腕環を差し上げますよ」と、こんなふうにながしやべっている間、二匹の馬は黙ってじつと聞いていました。私の話が済むと、今度は互に何か相談するように嘶き合いました。

私は、馬の声を注意して聞いていましたが、何度も「ヤフー」という言葉が聞えるのです。二匹ともその「ヤフー」という言葉をしきりに繰り返しています。私には何の意味なのか、さつぱり分かりません。けれども、彼等の話が終ると、私は大声で、はっきり「ヤフー」と言ってやりました。すると、彼等は大変驚いたようです。それから青毛が近寄って来ると、「ヤフー、ヤフー」と教えるように二度繰り返しました。私もできるだけ、その馬の声を真似してみました。すると、今度は栗毛が別の言葉を教えてくれました。これ

は、「フウイヌム」という難しい言い方でした。とにかく私が馬の言葉が真似出来るので、彼等はとても感心したようです。それから、彼等はまだ何かしばらく相談していましたが、それが済むと、また前と同じように蹄を打ち合せて二匹は別れました。

四、青毛の馬について行くと

青毛の方が私を振り返って、手真似で歩けと言いました。私は黙ってついて行くことにしました。私がゆっくり歩くと、彼は決まって、「……フウン、フウン」と叫びます。これは、たぶんついて来いという意味なのでしょう。三マイル（約四・八km）ほど行くと、一つの建物がありました。材木を地に打ち込んで、横に木の枝を渡したもので、屋根は低く、藁葺でした。馬は私に先に入れと合図しました。

中に入ってみると、下の床は滑らかな粘土で出来ていて、壁には大きな秣草棚や秣草桶などが幾つも並んでいます。子馬が三匹と牝馬が二匹いました。別に物を食べているのもなく、ちゃんとお尻を床の上につけて坐っているのです。私はびっくりしました。もつと驚いたのは、ほかの馬たちがみんなせせと家の仕事をしていることでした。なにしろ、馬をこんなふうに通え仕込むことの出来る人間なら、よほど偉い主人に違いないと、私は感心しました。

この部屋の向うには、まだ三つ部屋がありました。私たちは二つ目の部屋を通って、三つ目の部屋へ近づいて行きました。青毛は、そこで私に待っておれと合図しました。私は戸口で待ちながら、この家の主人と奥さんに贈るつもりで、小刀を二つ、真珠の腕環を三つ、小さな鏡、それから真珠の首飾りなどを用意しておきました。

青毛は、その部屋に入って、三、四度嘶きました。すると、彼の声よりもっとかん高い声で、誰かが嘶きました。人間の声はまだ聞えません。しかし、私は向うの部屋にどんな貴い人が住んでいるのだろうかと考えました。面会を許してもらうのにこんな手数がかかるのでは、この国でもよほど位のいい人なのでしょう。だが、それにしても、そんな貴い人が馬だけを家来に使っているのは少し変です。

これは、私の頭の方がどうかしたのではないかしらと思いました。私は、今、立っている部屋の中をよくよく見まわしてみました。何度、目をこすってみても、そこは前と変わらないのです。夢ではないかしらと、目が覚めるように脇腹をつねってみました。が、夢でもないのです。それでは、これはみんな魔法使の仕業に違いないと私は決めました。

丁度、その時、青毛が戸口から顔を出して、私に入れと合図しました。中に入ってみて、私は驚きました。上品な牝馬が一匹、それに子馬が一匹、小ぎつぱりした籠の上にきちんと坐っているのです。牝馬は籠から立ち上ると、私のそばへ来て、私の手や顔をジロジロ眺めました。それから、いかにも私を軽蔑するような顔つきで、「ヤフー」と呟きました。そして、青毛の方を顧みては、お互に何回となく、この「ヤフー」という言葉を繰り返しているのです。

青毛は、私の方へ首を向けて、「……フウン、フウン」としきりに繰り返しました。これは、ついて来い、という合図なのでした。そこで私は彼について中庭のところへ出ました。家から少し離れたところに、また、一棟建物がありました。そこへ入ってみて、私はあッと思いました。

五、ヤファーとの違い

私が上陸してすぐ出くわした、あのいやつたらしい動物がいたのです。その三匹の動物が、今、木の根っこや何か生肉をしきりに食っていました。三匹は首のところを丈夫な紐でくくられ、柱につながれたまま食物を左右の前足で掴んでは、歯で引き裂いていました。

主人の馬は、召使の馬に命じて、この動物の中から一番大きい奴を取り外して、庭の中へ連れて来させました。私とこの動物とは、一所に並んで立たされました。それから主人と召使の二人は、私たちの顔をじつとよく見比べていましたが、その時もまたしきりに「……ヤファー」という言葉が繰り返されたのです。

私は、そばにいろいやすい動物が、そっくり人間の恰好をしているのに気がついて、びつくりしました。この動物は顔が人間より少し平たく、鼻は落ち込んでいて、唇が厚く、口は広く割れていました。だが、これくらいの違いなら野蛮人にだってあるはずですよ。ヤファーの前足は、私の前足より、爪が長くて、掌がゴツゴツしていて、色が違ってきます。とにかく、この動物は人間より毛深く、皮膚の色が少し変っているだけで、あとは身体中すっかり人間と同じことです。

だが、二匹の馬には、私が洋服を着ているので、ヤファーとは違って思うように思えたのです。この洋服というものを、馬はまるで知っていないので、彼等にはどうも合点がゆかないのでした。ふと栗毛の子馬が木の根っこを一本、私の方へ差し出してくれました。私は手に取って、ちよつと臭いを嗅いでみましたが、すぐ丁寧に戻してやりました。すると、彼は、今度はヤファーの小屋から驢馬の肉を一きれ持って来てくれました。これは臭くてたまらないので、私は顔を背けてしまいました。しかし彼がそれをヤファーに投げてやると、ヤファーは美味しそうに食べてしまいました。

その次には乾草を一束とからす麦を私に見せてくれました。しかし、私はどちらも自分の食物ではないと、首を振ってみせました。私はもしこれで同じ人間に出会わなかったら、いずれ餓死するのではないかと心配になりました。すると、この時、主人の馬は蹄を口許へ持つて行って、私にどんなものが食べたいかというような身振りをしました。だが、なにしろ私は相手に分かるように返事が出来ませんでした。

六、馬の家で食事をす

ところが、丁度いいことに、今、表を一匹の牝牛が通りかかりました。そこで、私はそれを指さしながら、一つ牛乳を搾らせてくれという身振りをしました。これが相手にも分かったのです。彼は私を家の中へ連れて帰ると、沢山の牛乳が器に入れて、きちんと綺麗に並べてある部屋へ連れて行きました。そして、大きな茶碗に牛乳を一杯注いでくれました。私はグツと息に飲み干すと、初めて生き返ったような気がしました。

正午頃、一台の車が四人のヤファーに引かれて家の前に着きました。車の上には身分のいい老馬が乗っていました。彼は非常に丁寧に迎えられて、一番いい部屋で食事することになりました。部屋の真中に秣草桶を円く並べ、みんなはそのまわりに藁蒲団を敷き、尻餅

を付いたようにその上に坐るのでした。そして、馬どもは、それぞれ自分の乾草やからす麦と牛乳の煮込みなどを、行儀よくきちんと食べるのでした。

子馬でも非常に行儀がいいのです。特に、お客をもてなす主人夫妻のやり方は、気持ちのいいものでした。ふとその時、青毛が私を招いて、こちらへ来て立と命じました。客たちは、しきりに私の方を見ては、「ヤファー」という言葉を言っています。これは、私のことを今いろいろ話し合っているのです。

彼等は、私に知っている言葉を言ってみよと言いました。そして、主人は食卓のまわりにあるからす麦、牛乳、火、水などの名前を教えてくださいました。私はすぐ彼の後について言えるようになりました。食事が済むと、主人の馬は私を脇へ呼びました。そして言葉やら身振りで、私の食物がないのがとても心配だと言いました。私はそこで、「……フルウン、フルウン」と呼んでみました。『フルウン』というのは、『からす麦』のことです。初め私はからす麦などとても食べられそうになかったのですが、これで何とかパンのようなものをこさえようと考え付いたので。

すると主人は、木の盆にからす麦をどっさり載せて持って来ました。私は、これを初め火でよく暖めて、揉んで殻を取り、それから石で搗りつぶし、水を混ぜて、お菓子のようにして火で焼いて、牛乳と一緒に食べました。

これは、初めは、とても不味くて食べにくかったのですが、そのうちにどうにか我慢出来ました。私は、たまには兎や鳥を獲って食べたり、薬草を集めてサラダにして食べました。初めの頃は塩がないので、私は大変困りました。が、それも慣れてしまうと、あまり不自由ではなかったのです。

七、不思議なヤファー

私が言葉を覚えると言うので、主人も子供たちも召使までみんなが私に言葉を教えてくださいました。私は、手当たり次第、物を指さしては名前を聞きました。そして、その名前を手帳に書き込んでおいて、発音の悪いところは、家の者に何度も直してもらいました。それには、下男の栗毛の子馬がいつも私を助けてくれました。

この家の主人は、閑な時には何時間でも私に教えてくれました。彼ははじめ、私をヤファーに違いない、と考えていたのです。しかし、ヤファーの私が物を覚えたり、礼儀正しかったり、綺麗好きなので、彼はとても驚いたらしいのです。ヤファーなら決して、そんな性質は持っていません。彼に一分からなかったのは、私の着ている洋服のことです。あれは一体何だろう、やはり身体の一部なのだろうか、彼は何度も考えてみたそうです。

ところで、私はこの洋服をみんなが寝静まってしまうまでは決して脱がなかったし、朝はみんなが起きないうちに、ちゃんと身に着けていたのです。馬のようにものが言えて、上品で利口そうな不思議なヤファーが現われたと、私のことが評判になると、近くの馬たちが、度々、この家を訪ねて来ました。私に会いに来る馬たちは、私の身体が顔と両手の外は、普通の皮膚がまるで見えないので驚いていました。いつも私は用心して、裸のところを見せないようにしていました。

八、服装について説明する

ある朝のことでした。主人は召使に言いつけて、私を呼びに来ました。その時、私はまだぐっすり眠っていたので、服は片方にずり落ち、シャツは腰の上に載っていました。これを見て召使はすっかり驚き、早速、このことを主人にしゃべりました。私が服を着て、主人の前に行くと、主人は不審そうに尋ねました。「……お前は寝た時と起きている時とでは、まるで姿が変わるということだが、それは一体どういうわけなのか」と。

私は、これまであの厭なヤフー族から区別してもらうために、洋服のことは秘密にしておいたのです。しかし今はもう隠せなくなりました。そこで主人に打ち明けてしまいました。「……私の国では、仲間たちはみんな動物の毛で作ったものを身体に着けています。これは寒さや暑さを防ぐためと、礼儀のためにそうするのです。それで、もしそれを見せよ、とおっしゃるなら、私はさつそく裸になって、お目にかけてもよろしいのです」と。

そう言つて、私は、まずボタンを外して上衣を脱ぎました。次には、チヨツキそれから順々に、靴、靴下、ズボンと脱いで行きました。主人はさも不思議そうに眺めていましたが、やがて私の洋服を一枚ずつ拾い上げて、よく検査していました。それから、今度は私の身体をやさしく撫でたり、私のまわりをぐるぐる歩きまわって眺めていました。そしてこう言いました。「……やはりヤフーだ。ヤフーに違いない。だが、それにしても皮膚の軟かさ、白さ、それから身体にあまり毛のないこと、四足の爪の形が短いこと、いつも二本足だけで歩くことなんか、他のヤフーどもとは、だいぶ変っているようだ」と。

そこで、私も彼にこう言つてやりました。「……一つどうも面白くないことがあるのですが、それは、しきりに私をヤフー、ヤフーと呼ばれていることなのです。なにしろ、あんな厭な動物たらないのですから、私だってヤフーは大嫌いなのです。どうか、これからはヤフーと呼ばれるのだけはよしてください。それから、この洋服のことは、あなたにだけ打ち明けましたが、まだほかの人にはどうか秘密にしておいてください」と。

九、主人に自分の身の上話を……

すると、主人は私の願いを快く承知してくれました。それで、この洋服の秘密はうまく守られました。ある日、私は主人に身の上話をして聞かせました。「……私は遠い遠い国からやって来たのです。はじめ私のほかに五十人ばかりの仲間が一緒でした。この家よりもっと大きい木で作った容れものに乗って、海を渡って来たのです」と。

私は、船のことをうまく口で説明し、それが風で動くことも、ハンカチを出して説明しました。すると、主人はこう尋ねました。「……そうすると、誰が一体その船を作るのだ。また、フウイヌムたちは、なぜその船をヤフーなんかにかかせておけるのだろうか」と。フウイヌムというのは、この国の言葉で『馬』のことでした。私は彼にこう言いました。

「……実はこれ以上お話しするには、ぜひその前に決して怒らないということをお約束してください」と言うと、彼は承知しました。そこで私は話しました。「……実は船を作るのは、みんな私と同じような動物がするのです。それは私の国だけでなく、今まで私はずいぶん旅行しましたが、どこの国へ行ってみても、私と同じ動物が一番偉いのです。ところが、私はこの国へ来てみて、フウイヌムが一番偉いので、非常に驚きました」と。

私がこう言うと、彼は吃驚してこう尋ねました。「……お前の国では、ヤフーが一番偉

いのか。そんな馬鹿なことがあってたまるか。それでは、お前の国にはフウイヌムはいないのか。いとすれば、何をしているのか、それを言ってみせよ」と言うのでした。そこで、私は答えました。「……フウイヌムならずいぶん沢山います。夏は野原で草を食べているし、冬になると家の中で飼われて、乾草やからす麦をもらっています。そして、召使のヤフーが身体を磨いたり、鬘を梳いてやったり、食物をやったり、寝床を拵えてやったりするのです」と。「……なるほど、それでは、お前の国ではやっぱしフウイヌムが主人で、ヤフーは召使なのだ」と主人は頷きました。そこで、「……いや、実はフウイヌムの話をこれ以上お聞かせすると、きつとあなたは怒られるでしょうから、もうこの話はよしましょう」と私は言いました。

十、自分の国のことについて

しかし、彼はとにかくほんとのことが聞きたいのだと承知しません。そこでまた私は話しました。「……私の国ではフウイヌムのことを馬と呼んでいます、それは立派な美しい動物です。力もあり、速く走ります。だから貴人に飼われて、旅行や競馬や馬車を引く仕事をしている時は、ずいぶん大切にされます。しかし、病気に罹ったり、跛になると、今度は他所へ売られて、いろんな苦しい仕事に追い使われます。それに死ねば死んだで、皮を剥がれて、いい値段で売られ、肉は犬なんかの餌にされます。その他、百姓や馬車屋に飼われて、一生酷くこき使われて碌な食物ももらえない馬もいます」と。

それから、私は馬の乗り方や手綱や、鞍、拍車、鞭などのことを出来るだけ分かるように説明してやりました。主人は、ちよつと腹を立てたような顔を見せましたが、また、こう言い出しました。「……それにしても、お前らがよくもフウイヌムの背中へ乗れるものだ。この家のどんな弱い召使だって、一番強いヤフーを振り落すくらいわけないし、ヤフー一匹押し潰すことなど誰にも出来るのだ」と。そこで、「……私の国の馬はもう三つ四つの頃から、訓練されます。どうしてもいけない奴は、荷馬車引きに使われます。もし悪い癖でもあれば、子馬のうちに酷くひっぱたかれるのです」と。

こう言っても、主人はまだ私の話がよく分からないようでした。そして、こう言いました。「……この国では、動物という動物は、みんなヤフーを毛嫌いしている。弱い者は避けて通り、強い者は追っ払ってしまふ有様だ。してみると、仮にお前たち人間が理性を持っていてとしても、あらゆる動物から嫌われているのをどうするのだろうか。どうして彼等を馴らして使うことなど出来るのか、そのところが分からない」と言うのでした。

しかし、彼はもうその話はそれで打ち切りました。それから、今度は、私の経歴や生国のことや、この国へ来るまでに出会ったいろんなことを話して聞かせてくれと言うのでした。そこで私は言いました。「……それは、もう何なりとお話しいたしましょう。ただ心配なのは、とても説明出来ないような、あなたがたは考えたこともないようなことが多少あるのではないかと思います」。

まず、私の生まれはイギリスという島国です。この島はここからずいぶん離れています。あなたの召使の一番強いものが歩いて行っても、太陽が一年かかって一周するだけかかるとでしょう。私は一つ金儲けをして、それで帰ったら家族を養おうと思って国を出たのです。今度のこの航海では、私が船長になって、五十人ばかりのヤフーを使っていました。

ところが、これが海で大分死んでしまったので、別のヤフーを雇い入れました。ところが、新しく雇い入れたヤフーは、みな海賊だったので。」と。

こんなふうに私は話して行きましたが、主人は海賊などというものがてんで分らないのでした。そしてこう尋ねました。「……一体、何のために、何の必要があって、人間はそんな悪いことをするのか」と。そこで、私はいろいろ骨折って人間の悪徳を説明してやりましたが、彼は、まるで一度も見も聞きもしなかったことを聞かされたように驚いて憤るのでした。

十一、何のために戦争を……

私と主人とは、それから後も何度も会っているんな話をしました。私はヨーロッパのことについて、商業のこと、工業のこと、学術のことなど、知っていることを全部話してやりました。しかし、この国には権力、政府、戦争、法律、刑罰などという言葉がまるでないのです。ですから、こんなことを説明するには、私は大変弱りました。ある時、私はこんなことを主人に話しました。「……今、イギリスとフランスは戦争をしているのです。これはとても長い戦争で、この戦争が終るまでには、百万人のヤフーが殺されるでしょう」と。すると主人は、一体、国と国とが戦争をするのはどういう原因によるのか、と尋ねました。そこで、私は次のように説明してやりました。

「……戦争の原因なら沢山ありますが、主なものだけを言ってみましょう。まず、王様の野心です。王様は、自分の持っている領地や人民だけで満足しません。いつも他人のものを欲しがるのです。第二番目の原因は、政府の人たちが腐っていることです。彼等は自分で政治に失敗しておいて、それをごまかすためにわざと戦争を起すのです。

そうかと思えば、ほんのちよつとした意見の食い違いから戦争になります。例えば、肉がパンであるのか、パンが肉であるのかと言った問題、口笛を吹くのがいいことか悪いことか、手紙は大切にするのがよいか、それとも火に焼べてしまった方がよいかとか、上衣の色には何色が一番よいか、黒か白か赤か、或いはまた、上衣の仕立ては、長いのがよいか短いのがよいか、汚いのがいいか、清潔なのがいいか、その他、まあ、こんな馬鹿馬鹿しい争いから、何百万という人間が殺されるのです。しかも、この意見の違いから起る戦争ほど気狂じみて酷たらしいものはありません。

時には、二人の王様が、よその国の領土を欲しがって戦争を始める場合もあります。また時には、ある王様が、よその国の王から攻められはすまいかと取越苦労をして、かえってこちらから戦争を始めることもあります。相手が強過ぎて戦争になることもあれば、相手が弱過ぎてなることもあります。また、人民が餓えたり病気で衰えて乱れている場合には、その国を攻めて行って戦争してもいいことになっています。

そこで、軍人という商売が一番立派な商売だとされています。つまり、これは何の罪もない連中を、できるだけ沢山平気で殺すために雇われているヤフーなのです」と。すると、主人は、私の話を聞いて、こう言いました。「……成る程、戦争についてお前の言うことを聞いてみると、お前が言うその理性の働きというものもよく分かる。だが、それにしても、お前たちのその恥かしい行ないは、実際には危険が少い方だろう。お前たちの口は顔に平たくくっ付いているから、いくら両方が噛み合ってみても、大した傷にはならないし、

足の爪も短くて軟かいから、まあこの国のヤフー一匹でお前の国のヤフー十匹ぐらいは追っ払うことが出来るだろう。だから、戦場で仆れたという死者の数だって、お前は大きなことを言っているだけだろう」と。

主人がこんな無智なことを言うので、私は思わず首を振って笑いました。私は、軍事について少しは知っていましたので、大砲とか、小銃とか、弾丸、火薬、剣、軍艦、それから、攻撃、砲撃、追撃、破壊など、そういう事柄をいろいろ説明してやりました。「……私は、わが国の軍隊が百人からの敵を囲んで、これを一遍に木っ葉みじんに吹き飛ばしてしまうところも見たことがあります。また、数百人の人が船と一緒に吹き上げられるのを見ました。雲の間から死体がバラバラ降って来るのを見て、多くの人は万歳と叫んでいました」と。

十二、金銭の話をする

こんなふうには私はもつともつとしゃべろうとしていると、主人がいきなり、「……黙れ」と言いました。「……成る程、ヤフーのことなら、今お前が言ったようなそんな忌まわしいこともやりそうだ。ヤフーの智慧と力がその悪心と一緒に出来れば出来ることだろう」と、主人は、私の話を聞いて非常に心が乱され、そして、私の種族を前よりもつと嫌うのでした。

私は、今度は金銭の話をしてやりました。これも、主人には私の言う意味がなかなか飲み込めないようでした。私は言いました。「……ヤフーというものは、このお金を沢山貯めていさえすれば、綺麗な着物、立派な家、美味しい肉や飲物、その他、何でも欲しいものが買えるのです。そして、ヤフーの国では、何もかもお金次第なのです。ヤフーどもは、いくら使っても使い足りたとか、いくら貯めてももうこれでいいと思うことはありません。お金のためには、ヤフーどもは絶えず互に相手を傷つけ合うことを繰り返します。お金持は、貧乏人を働かせて楽な暮らしをしていますが、その数は貧乏人の千分の一ぐらいしかいません。多くのヤフーは、毎日毎日、安い賃金で働いて、みじめな暮らしを続けています」と。こんなふうには私は話してやりました。それから、ヤフーの国の政治とか法律のことも、主人にいろいろ説明して聞かせました。

十三、この国のヤフーたちは……

ある朝、迎への使いが私のところへやって来ました。行ってみると、主人が、「……まあ、そこに坐れ」と言いました。「……これまで、お前から聞いた話は、その後、まじめに考えてみたが、どうもお前たちは、どういう風の吹きまわしか、たまたま爪の垢ほどの理性を持っている一種の動物らしい。ところが、お前たちは、せっかく自然が与えてくれた立派な力は、捨てて見向きもしようとしないで、元から持っている欠点ばかりを殖やそうとしている。わざわざ骨を折って、欠点を増やす工夫や発明をしているみたいなものだ。ところで、お前は、お前の国のヤフーどもの有様をいろいろ話してくれたが、お前たちと、この国のヤフーとは、身体の恰好がよく似ているだけでなく、心の方もよく似ていると思えるのだ。ヤフーどもがお互に憎み合うのは、ほかの動物には見られないほど猛烈な

もので、それは誰でも知っていることなのだが、この国のヤフーどもの争いも、お前が言ったお前たちのその争いも、どちらもどうもよく似ているのだ。

もし、ここにヤフーが五匹いるとして、そこへ五十人分ぐらいの肉を投げてやるとする。すると、彼等は大人しく食べるどころか、一人で全部を取ろうとして、たちまち、酷いつかみ合いが始まる。だから、彼等が外で物を食べる時には、召使を一人そばに立たせておくことにするし、家にいる時は、お互に遠くへ離してつないでおく。

また、牛が死んだりした場合、それをフウイヌムが家のヤフーのために買って戻ると、間もなく近所のヤフーどもが群をなして盗みに来る。そして、お前が言ったと同じような戦争が始まる。爪で引っ掻き合つて大怪我をする。ただ幸いなことに、お前たちの発明したような人殺し器械はないので、めつたに死ぬようなことはない。また、ある時は、何の理由もないのに、近所同士のヤフーどもが同じような戦争を始める。つまり近所同士で、折もあらば不意を襲つてやろうと、隙を狙っているのだ」と。

それから、主人はさらに次のような珍しい話をしてくれました。この国のある地方の野原には、様々の色に光る石があつて、これがヤフーどもの大好物なのです。もし、この石が地面から半分ほど覗いていたりすると、ヤフーは、何日でも朝から晩まで爪で掘り返しています。そして家に持つて帰ると、それを小屋の中にそつと隠しておきますが、まだそれでも、もしか仲間に嗅ぎ出されはしないかと、ギョロギョロと目を見張っています。

主人は、どうしてまたこんな石をヤフーどもが大切がるのか、さつぱり分からなかつたのですが、一度試しにヤフーが埋めている場所から、そつとこの石を取り除けておきました。すると、このさもしい動物は、宝がなくなっているのに気づいて、大声で泣きわめき、仲間をすっかりそこへ呼び集めました。そして、さも哀れげに悲しんでいるかと思つたと、たちまち誰彼の区別もなく噛みついたり、引っ掻いたり大騒ぎをします。それからだんだん元気がなくなつて、物も食べなければ眠りもしません。そこで主人は、その石をまた元のところへ返してやりました。それを見ると、ヤフーはすぐ機嫌もよくなり、元氣になつたということです。

この光る石が沢山出る土地に限つて、ヤフーどもは、絶えずその土地を争い合つてお互に戦争します。二匹のヤフーが野原でこの石を見つけると、互ににらみ合つて争います。そこへもう一匹のヤフーが現われて、横取りすることもあるそうです。

それから、ヤフーという奴は、時々、気が変になるらしく、ただ隅っこに引っ込んでしまい、寝転がって、吠えたり唸つたり、誰かそばへ寄ると、たちまち蹴飛ばしてしまします。まだ年も若いし、肉付きもいいし、別に食物が欲しいわけでもないのです。一体どこが悪いのか、さつぱり分かりません。ところが、こんな場合、ヤフーを無理にどんどん働かせると、この病氣はケロリと治るそうです。こんなふうには、私は主人から、ヤフーの性質をいろいろ聞かされました。

それでは、一つぜひどこか近所のヤフーの群を訪問させてください、と私は頼みました。主人は快く承知して、召使の月毛の子馬を私の附添いに命じました。この附添いがいなくなつたら、とても私はヤフーの近くに行くことは出来なかつたのです。私が最初この国に来た時、この忌まわしい動物に苛められたことは、前にも言った通りですが、その後、私はうっかり短剣を忘れて外に出た時など、三、四度も危く爪にかけられるところでした。それに、どうやら彼等の方でも、私が同種族のものであることになうすうす感づいていた

ようです。私は附添いと一緒にいる時など、よく袖をまくり上げて、腕や胸を見せてやりました。すると彼等は、いつも私のすぐ傍まで来て、丁度、あの猿の人真似と同じように、しきりに私の恰好を真似ますが、いつも憎々しげな顔付きでそれをやるのでした。

彼等は、子供の時からとても敏捷です。ある時、私は三歳の子を一匹捕えて手なづけようとしましたが、相手は、恐ろしい勢いで喚いたり、引っ掻いたり、噛みつくので、とうとう放してやりました。私の見たところでは、ヤフーほど教えにくい動物はいません。出来ることと言えば、荷物を引いたり、担いだりすることぐらいです。

フウイヌムたちは、家から少し離れたところに小屋を作つて、ヤフーを飼っていますが、その他のヤフーは、すべて野原に放し飼いにされているのです。彼等は、そこで木の根を掘つたり、草を食つたり、肉をあさつたり、時には、イタチを捕えて食べます。そして丘などの側に爪で深い穴を掘つて、その中に寝ます。彼等は、子供の時から、水泳ぎや水潜りが出来ます。こうしてよく魚を捕えては、牝が家に持つて帰つて、子供に食べさせます。

十四、この国の風俗や習慣

ところで、なにしろ、私はこの国に三年も住んでいたのですから、この国の住民たちの風俗や習慣をここに少し述べておきます。

このフウイヌム族というのは、生まれつき非常に徳の高い性質を持っています。彼等の格言は、「……理性を磨け。理性によつて行なえ」と言うのでした。

友情と厚意は、フウイヌムの美德です。どんな遠い国から来た知らない人でも、まるで友達のようにもてなされます。どこへ行つても、自分の家と同じように安心出来ます。みんなは、非常に上品で、慎み深いのですが、ちつともわざとらしいところがありません。自分の子供も他所の子供も同じように可愛がります。子供の教育の仕方は、なかなか立派なのです。十八歳になるまでは、ある定まった日でなければ、からす麦など一粒も口にするのを許されません。夏は、午前二時間と、午後二時間ずつ、草を食べさせてもらいます。この規則を親たちもきちんと守ります。

フウイヌムは、その子弟を強くするために、険しい山や石ころ道を走らせます。汗だくになると、今度は河の中にザンブリ頭から跳び込ませるのです。それから、一年に四回、若い男女が集つて、駆け比べや、跳込み、その他、いろいろの競技をします。勝つた者には、それを褒める歌が与えられます。

フウイヌムは、文字というものをまるで持っていない。知識は親から子へ口で伝えるのです。彼等は詩を作ることがとても上手です。友情や善意を歌つたものと、運動の優勝者を褒めたものと、なかなか美しい詩があります。

フウイヌムたちは、病気に罹るといことがないので医者はいません。しかし、怪我をした時付ける薬は、ちゃんと備えてあります。彼等は、病気に罹つて死ぬようなことはなく、ただ年を取つて自然に衰えて死ぬのです。そして、死人は人目につかない場所にそつと葬られます。臨終だと言つて、誰も悲しんだりするものはありません。死んで行く本人でさえ、ちつとも悲しそうな顔はしていません。

彼等は、大抵七十か七十五まで生きます。たまには八十まで生きるものもいます。死ぬ二、三週間前になると、だんだん身体が弱つて来ますが、別に辛くはないのです。そうな

ると、友達が次々に訪ねて来ます。つまり、気楽にちよつと外出するようなことが出来な
いからです。いよいよ死ぬ十日前頃には、今度は櫓に乗って、ヤフードにも引かせて、ご
く近所の人たちだけに答礼（返礼）に出かけて行きます。彼は答礼（返礼）先へ着くと、
まず、お別れの挨拶を述べるのですが、それはまるでどこか遠いところへ旅行する時の別
れのような恰好なのです。

私は、主人の家から六ヤード（約五・四尺）ばかり離れたところに、自分の室を一つ作
らせてもらいました。壁は、自分で塗り、床には自分で作った筵を敷きました。この国
には麻が多いので、それを打って、蒲団の覆いを作り、その中に鳥の羽毛を詰めました。
骨の折れる仕事は子馬に手伝ってもらい、小刀で椅子を二つ拵えました。服が擦り切れ
ると、これは兎の皮で代りを作りました。この皮からは、立派な靴下も出来ました。私
はよく木のうろから蜜を取って来て、水に混ぜて飲んだりパンに付けて食べました。

私は、主人のところへ訪ねて来るフウイヌムのお客たちとも知り合いになりました。主
人の部屋に私の方から出かけて行くこともあり、時には、主人やお客が私の部屋に訪ねて
来ることもあります。それから、また時には、主人のお供をして、お客の家に訪ねて行く
こともありました。

私は、質問に答える他は、こちらから口を出して、しゃべったりするようなことはしな
かったのです。ただそばで彼等の話を聞いていれば、それだけで私は気持よかったです。
彼等の話は、ちっとも無駄なところがなく、簡単ではつきりしていました。ちゃんと礼儀
は守られていて、堅苦しいところがないのです。しゃべることは、話す方も楽しければ、
聞く方も気持よくなるようなことばかりです。邪魔も入らねば退屈もなく、のぼせたり、
争ったりするようなことはないのです。

彼等は、大抵、友情とか、慈善とか、秩序とか、経済などのことを話し合います。それ
から、詩の話もよく出ます。私は、ヨーロッパで一番偉い人たちの集まりに出るよりも、
ここで、フウイヌムの話を聞いている方がずっと誇らしく思えました。

私は、この国の住民たちの力と美と速さを感じしました。そして、このような穏やかな
立派な人格を、私はだんだん尊敬するようになりました。そして私は、自分の家族や友人、
同胞などを考えてみると、とてもひどく恥かしくなりました。ヤフーと私たちが違うのは、
ただ人間の方は言葉が話せるということだけで、理性はかえって悪いことに使われていま
す。よく、泉や湖に映る自分の姿を見た時など、私は思わず顔を背けたくなりました。

十五、議会でヤーフの問題が生じる

私は、この国にいつまでも住んでいたいと思うようになりました。ところが、どうして
もこの国を立ち去らねばならぬことがもち上がりました。この国では、四年ごとに全国か
ら代表者が集って会議を開くのです。この会議は、野原で五、六日続けられます。私の主
人も、今度その会議に代表者として出て行ったのです。

ところで、今度の会議で問題になったのは、ヤフーをこの地上に生かせておいて、いい
か悪いかという問題でした。一人の議員は、次のように演説しました。「……凡そ、世の
中にヤフーほど不潔でいやらしい物はない。彼等は、こつそり牛の乳を吸うやら猫を殺し
て食べるやら、畑を荒すやら碌なことはしない。

このヤフーというものは、元からこの国にいたものではない。伝説によると、ある時、突然、山の上に二匹のヤフーが現われたという。これは、太陽の熱で腐った泥の中から生れたものかどうかわからないが、一度生まれて来ると、子供がずんずん増えて、たちまち全国に広がってしまった。

そこでフウイヌムたちは大山狩をして、ヤフーたちを取り囲み、年取ったものを殺してしまい、若いだけフウイヌム一人について二匹ずつ、小屋を作って飼うことにした。そこで、暴れものの動物も少しは馴らされ、とにかく物を引かせたり、運ばせたりするくらい役には立つようになった。しかし、住民たちは、ヤフーを使っているうちにつきうっかり驢馬を殖やすことを忘れてしまった。驢馬は、ヤフーに比べてすばしこくはないが、その代り形もいし、大人しくて臭くもない。われわれは、あの嫌らしいヤフーは殺して、その代りに驢馬を使った方がいいと思う」と言うのでした。

これには賛成したのも大分ありましたが、私の主人は反対の意見を述べました。「……二匹のヤフーが山に現われたという伝説は、こんなふうに見える。あれは、確かに海を越えて向うからやって来たもので、二匹は上陸すると、そのまま山の中へ逃げ込んだものらしい。それから時の経つとともに、だんだん野蠻になって、とうとうあんなふうな動物になってしまったのだと思われる。その証拠には、私は不思議なヤフーを一匹持っている」と、こう言つて、主人は、私を見つけた時のこと、洋服を着ていること、この国の言葉を覚えてしまったこと、この国へ来るまでのことを自分で話して聞かせたことなど、いろいろ説明しました。「……こんなふうな大人しいヤフーもいるのだから、ヤフーをみな殺しにするのは可哀そうだ。それより、ヤフーの子供を殖やさないようにして、驢馬の子をうんと殖やすようにしたらいいと思う」と、私の主人はこう演説したのでした。

私は、この会議のことを主人から聞かされて、何だか心配になりました。ヤフーをどうすることに決まったのか、それは、まだはつきり聞かせてもらえなかったのです。

十六、国からの追放が決まる

ある朝、主人から迎えの使いが来ました。行ってみると、主人は、どうも何から話し出したらいのか困っている様子でした。が、やっと口を開いて言いました。それによると、今度の会議で、私はこの国から出て行ってほしいということに決まったのです。

ヤフーを家に置いて、フウイヌム並みに扱っているとは実にけしからん、と主人は代表者たちから苦情を言われました。普通のヤフーのように働かすか、それとも、泳いで国へ帰らすか、どちらかにせよ、と言われるのです。それは、私を普通のヤフーの仲間に入れたら、ヤフーたちをそのかして、夜になると家畜を襲ったり、どんな危険なことをやりだすかわからないというので、やはり泳いで国へ帰らせた方がいいと決まりました。主人は、私に同情して、「……私はむろん一生でも喜んでお前を置いてやりたかったのだが、どうも仕方がない。泳いで帰ると言つても、まさかお前の国まで泳げますまい。だから、いつかお前の話した海を渡る容れものをつ作ってみてはどうか。それなら私の召使や近所の召使にも手伝わせてやる」と言うのでした。

私は、主人にこう言い渡されると悲しくなつて、彼の足許にふらふらと倒れました。主人は私が死んでしまったのかと思つたほどでした。しかし、とにかく気を取り直して、船

を作ることに決めました。船が出来るまで二カ月待つてもらふことになりました。そして、私は召使の月毛を助手に貸してもらいました。

私は、月毛を連れて、あの海賊どもが私を無理やりに上陸させた海岸の方へ行ってみました。丘に登ってずっと四方を見渡すと、東北の方向に島影のようなものが見えています。望遠鏡を出して覗いてみると、確かに島です。距離は五リーグぐらいです。とにかく、この島が見つかった以上はもう大丈夫だ、後は運を天に任せて、あの島まで流れて行こう、と私は決心しました。

それから家に帰ると、月毛と相談して、今度は森へ出かけて行きました。私は小刀で、彼はフウイヌムの斧を使って、柵の枝を幾本も切り落しました。それを私はいろいろに細工しました。一番骨の折れるところは月毛が手伝ってくれて、六週間もすると、インド人の使うような独木舟が一隻出来上りました。

船は、ヤフーの皮で張って、手製の麻糸で縫い合せました。帆もやはりヤフーの皮で作りました。兎と鳥の蒸肉、それに牛乳、水を入れた壺を二つ、それだけを船に積み込んで置きました。私はこの船を家の近くの大きな池に浮べてみて、悪いところを直し、隙間にはヤフーの脂を詰めました。いよいよこれで大丈夫になりました。そこで、今度は船を車に積み、ヤフーたちに引かせて、静かに海岸まで運んだのです。

十七、出発して島へと……

準備が出来上って、出発の日がやって来ました。私は、主人夫妻と家族に別れを告げました。目は涙で一杯になり、心は悲しみに掻きむしられるばかりでした。だが、主人は、私が船に乗るところが見たいと言って、近所の人々を誘って一緒にやって来ました。私は潮合を一時間ばかり待っていました。風工合もよくなつたので、いよいよ向うの島へ渡ろうと思ひ、そこで、私は改めてまた主人に別れを告げました。私がひれ伏して、彼の蹄にキスしようとする、彼は静かにその蹄を私の口許まで上げてくれました。ほかのフウイヌムたちにも、丁寧に挨拶して、舟に乗り込むと、私はいよいよ岸を離れたのです。

私が岸を離れたのは、一七二四年二月十五日、朝の九時でした。主人や友人たちは、私の姿が見えなくなるまで海岸に立って、見送ってくれていました。時々、召使の月毛が、「……ヤフー君、お大事にね」と、怒鳴ってくれるのが聞えました。私は出来ることなら、どこか無人島を見つけないと思ひました。そこで働きさえすれば、生きて行ける小さな島があったら、私は、一人で静かに暮らしたいのです。私はヨーロッパのヤフーたちの社会へ帰るのは、もう考えただけでも厭でした。

その日の夕方、向うに小さな島が一つ見えてきて、私は間もなく、そこへ着きました。だが着いてみると、それは大きな岩だったのです。しかし、岩の上によじ登ってみると、東の方に陸地がずっと伸びているのがはっきり見えました。その晩は舟の中で寝て、翌朝早く起きると、また航海を続けました。七時間ばかりすると、ニューポランドの東南端に着きました。

私は武器を持っていないので、奥へ進むのは心配でした。海岸で貝を拾いましたが、火を焚いて土人に見つかるといけないので、生のまま食べました。三日間は牡蠣と貝ばかり食べていましたが、近くに綺麗な小川があったので、水の方は助かりました。

十八、さらに遠くの島へ

四日目の朝、私は少し遠くへ出かけてみました。ふと、前方の丘の上に二、三十人の土人の姿が見えました。男も女も子供も真裸で火を囲んでいるのです。一人がふと私の姿を見つけて、すぐほかの者に知らせたかと思うと、五人の男がこちらへ近づいて来ました。私はもう一目散に海岸へと逃げて帰ると、舟に跳び乗って漕ぎ出しました。

それから私は舟を北の方へ進めてみました。しばらくすると、向うに帆の影が一つ見え来ました。しかも、船はどんどんこちらへ近づいて来るのです。私はこのまま待つていようかしらと思いましたが、ヤフーのことを考えると、たまらなくなりました。そこで舟を漕いで一目散に逃げ出しました。そして私が朝出たあの島へまた戻って来ました。私は小川の傍の岩かげに隠れていました。

後から追つて来た舟は、ボートを下ろして、この島へ水汲みにやって来ました。そして水夫が上陸する時、私の独木舟に気づきました。持主がどこかにいるに違いないと、彼等はそこらじゅうを探しまわりました。武装した四人の男が、とうとう岩かげにすくんでいる私を見つけ出したのです。革の服、毛皮の靴下、私の奇妙な服装に彼等は驚いたようでした。「……立て、お前は何者だ」と、水夫の一人がポルトガル語で尋ねました。ポルトガル語なら、私もよく知っているので、すぐ立ち上って答えてやりました。「……私はフウイヌムの国から追い出された哀れなヤフーです。だから、どうかこのままそつとしておいてください」と言いました。

ポルトガル語が出来るので彼等は驚きましたが、私がまるで馬のように嘶いてもものを言うのに噴き出してしまいました。私はもう怖くてブルブル震えていました。逃がしてください、と言いながら、独木舟の方へ行こうとすると、彼等は私を捕えて、どこの国の者で何処から来たかなど、いろんな質問をしかけました。

彼等がものを言い出した時、私は犬や牛がものを言い出したように全く変な気持ちにさせられました。私が何度も逃げ出そうとするので、とうとう彼等は私を縛り上げて、ボートへ引きずり込み、それから本船へ連れて行かれました。そして私は船長室へ引つ張って行かれました。船長の名前は、ペドロと言い、大変親切な男でした。「……どうか、あなたの身の上話を聞かせてください。食事はどんなものを召し上りますか。これからは私と同じ待遇にして上げたいのです」と、こんな親切なことを言ってくれました。しかし、私は相変らず黙り込んでいました。

私は、彼等の臭いが厭でたまらなく、今にも倒れそうでした。しかし、彼等は私に一寝入せよと言って綺麗な部屋へ案内してくれました。私は服のままベッドに寝転んでいましたが、三十分ばかりして、水夫たちの食事をしている隙にそつと抜け出しました。こんなヤフーどもと暮すくらいなら、いっそ海へ飛び込もうと覚悟しているところを、船員の一人に見つけられました。そして、今度は船長室に閉じ込められました。「……なぜあんな無謀なことをしようとしたのだ。自分は、出来るだけのことをしてあげたいと思っっているの」と、船長はしみじみ言ってくれました。

私は、ごく簡単にこれまでの身の上話をしてやりました。すると、船長は夢の話でも聞いているような顔つきでした。しかし、彼はなかなか賢い男で、やがて私の話をだんだん

分かってくれました。私も、もう二度と逃げ出すようなことはしないと約束しました。

*

*

航海は順調に進みました。一七二五年十一月五日、船はリスボンに着きました。十一月二十四日にイギリス船で私はリスボンを発ち、十二月五日にダウンスに着きました。

てつきり私を死んだものと思ひ込んでいた妻子たちは、大喜びで迎えてくれました。家に入ると、妻は私を両腕に抱いてキスしました。だが、なにしろこの数年間というものは、人間に触^{さわ}られたことがなかったので、一時間ばかり、私は気絶してしまいました。(第四部・完)

*

*

「参考文献」

※底本「ガリバー旅行記」原民喜訳（「青空文庫」）